

奇譚グラス

新しい風俗文献誌

口癖物語 暗黒集 団

グラビヤ フォト 緊縛 艶姿 五十熊



奇譚グラス

KITAN CLUB

10

定価 百四十円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

新装 1960. 10月号



A vertical banner with a blue rope border. The text is in Japanese and reads from top to bottom: 限貨庫 (Limit Warehouse), 特別号 (Special Issue), 心の弾 (Heart's Bullet), 怒 (Anger), 煙 (Smoke), 写 (Write), 真 (True), 夕 (Evening), 夕 (Evening), 舞 (Dance).

特価五百円 略号「グラフ」

画題 「縛り人形」
絹川文代
花坂道子

くとかくと宣伝文句を並べたて
るまでもなく、全巻これ縛られた
美女の氾濫です。門外漢はいざ知
らず好事家は必ずやその価値を見
出して下さると思います。自
信を以てお贈りするこの限定版を
どうか手にとって、心ゆくまで鑑
賞して下さい。

卷頭裸身緊縛一頁大扉

荒縄全裸緊縛……………大塚啓子

落した腰巻九態（野外）

円い乳房……愛川悦子

浴室におびえて九態……愛川悦子

縄の陶酔……絹川文代

恍惚境 悦虐の末……絹川文代

いためられた乳房……桜井葉子

耐えられる?.....桜井葉子

月経帯の強制 二態……大塚啓子

手吊りと逆手吊り五態……大塚啓子

全裸悦虐態……大塚啓子

白痴美の誘惑……大塚啓子

はねかえす縄……大塚啓子

ううう許して！……大塚啓子

雪白の肌は縄にまみれて

六態……大塚啓子

優姿ハダカ縛り……………絹川文代

股間縛り背正面二態……絹川文代

捕われの麗人2態……絹川文代

湯責め二態……大塚啓子

浴室にて責める四態……大塚啓子

何にしようと言うの……桜井葉子

新人媚態集八景……………桜井葉子

いじめぬく二態……絹川文代

メンスバンドの猿轡……絹川文代

観念横臥の図二態……絹川文代

變形手足しばり4態……愛川悦子

裸身をさらして六態…愛川悦子

豊満くらべ 九態……桜井葉子

亀甲縛り正背面二態……愛川悦子

怨めしき縄目二態……大塚啓子

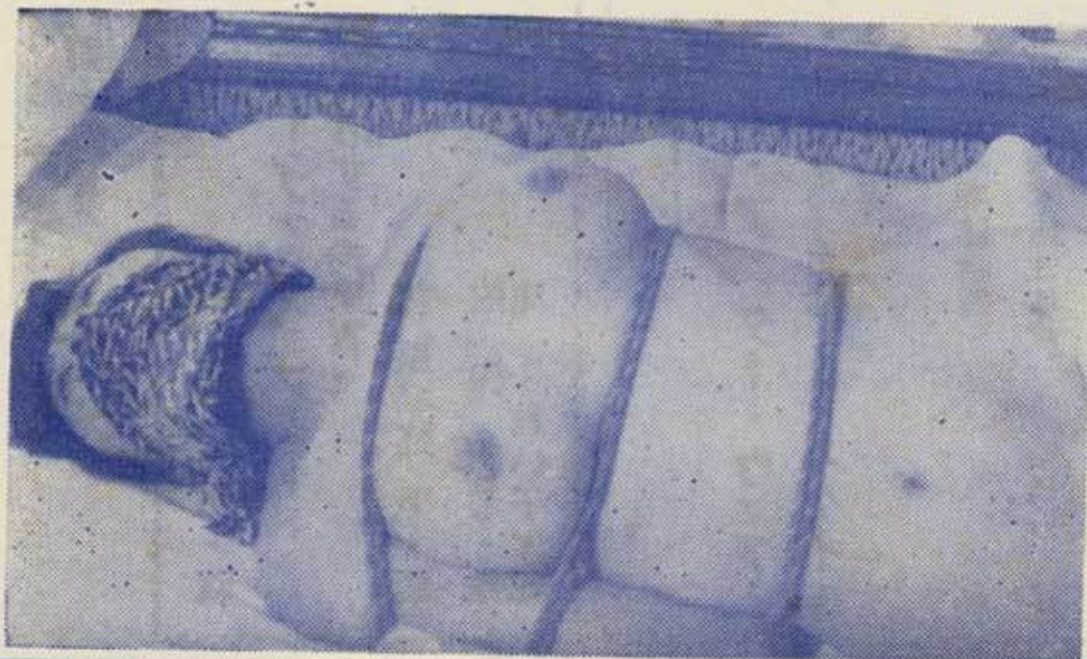
後手首腰繩 四態……大塚啓子

新人緊縛ポーズ集6態：桜井葉子

隅から隅まで 4 態…愛川悦子

鏡面万華模様(裏と表)……愛川悦子

四十項目 百十五ポーズ





奇譚クラブ 新装十月特大号 目次

色刷口絵 「鏡を見てごらん」	四馬 孝・画
表紙裏 四馬孝画 (第二表紙) 「ニュー・ファッション・モード」	
裏 「鉄枷と鎖の恐怖」	杉原 紅児・画
目次裏 「風流いろは草紙」	佐保 忍・作 滝 れい子・画

第一口絵 緊縛フォト・ア・ラ・モード

サイクリング・スタイル。ノー・アンダー・ウェア
水着スタイル。ストップ・ルック。オシメ・スタイル
◎実写マゾヒスチック・フォト◎
肩車、懲しめ、
「男性の自由を拘束する女」 (本誌特写)
(米誌ヨリ)

第二口絵 (絵物語) 暗黒集団 四馬孝構成並画
女狩、捕獲、訊問、装着
検査、飼育、馴致、輸送

緊縛艶姿五十態

グラビア・フォト

第一篇

慟とう 哭こく	モデル 絹川 文代
芳紀二十才の表情	モデル 柳 初子
女奴隷呻吟	モデル 絹川 文代
新入荷品第四号	モデル 絹川 文代
豊腎鞭捷	モデル 桜井 葉子
放心と羞愧	モデル 若原 明子
電車の見える部屋続肌に紐悲し	モデル 絹川 文代
第二篇	
佳人鼻難(鼻責)	モデル 絹川 文代
防声具と乳房責	モデル 桜井 葉子
顔枷の装着	指導 辻村 隆
小町娘(女装)	モデル 杉江美津子
諦観と観念	モデル 絹川 文代
受縄の初姿	モデル 柳 初子
テレビのある風景	モデル 大塚 啓子

夜の毘 女相撲と女斗美

観戦記(八重桜と君ヶ浜の血戦)

バスガールの運命	滝畑 二郎
手帖雑報欄と沼正三だより	沼 正三
地底の女奴隷市	塔婆 十郎
第一章 真夜中の競売	四馬 孝・画
「奴隷娘、悲しき十六才」	赤沢 英生
(黒奴被虐の「コマ」)	
探刑事捜査ノート	植村 泰
輝 ふんどし 魔ま	青木 善・画

体験記 病院にて

△洗腸の羞恥にもたえ苦しんだ入院生活▽

「手記」赤い羽根	須藤 律夫
(瑞美子の告白から)	
「女性長靴フェチに於ける二つの型」	一ノ瀬悦子
(映画女優を例にとつて)	

毎日こんなに洗腸されている!	川崎 進一
連載小説「宇宙のどこかで」	佐治 麻造
無期懲役囚の手記より	

或る強盗事件(承前)	南 時夫
夏から秋の縛り映画	東山 映史
被虐の白い花	赤川 道郎
マゾヒズム百景	馬場 好男
曲馬団の訓練	白井 久
松井鏡子悦虐小説シリーズ	松井 頼子

空しい情事

体験記 檻の時間	栗瀬 長
この足千四百万円	林 純夫
「ジーナ・ロブリジータの美足の値段」	比良野 裕
告白 女装の楽しみ	近藤 一
イメージ 生贄裸女の喘ぎ	藤山 秀緒
乗馬スポン・シリーズ	藤山 秀緒
夕陽を染める乙女たち	田沼 醜男
我が描くエッセイとコント	
「マゾヒズム天国」	



風流いろは草紙

佐保忍作
淹れい子畫

よ 夜遊びの
戻りに
見たり

珍プレイ

こんな

苦しみ

た 耐えたのか

れ

連縛は

いやよと
二人
だだも
こね

そ

そつとして
足の裏には
羽ねぼうき

つ

抓つてもううと
うめくは猿ぐつわ

ね

な

ながしにて

女子大生の

腹切りぬ

寝て
いるが

ごとき

拾る

手ぎわ

よさ





緊縛フォト・ア・ラ・モード

(KINBAKU PHOTO A LA MODE)

<どうぞ、ごゆっくり、ごらん下さい。>

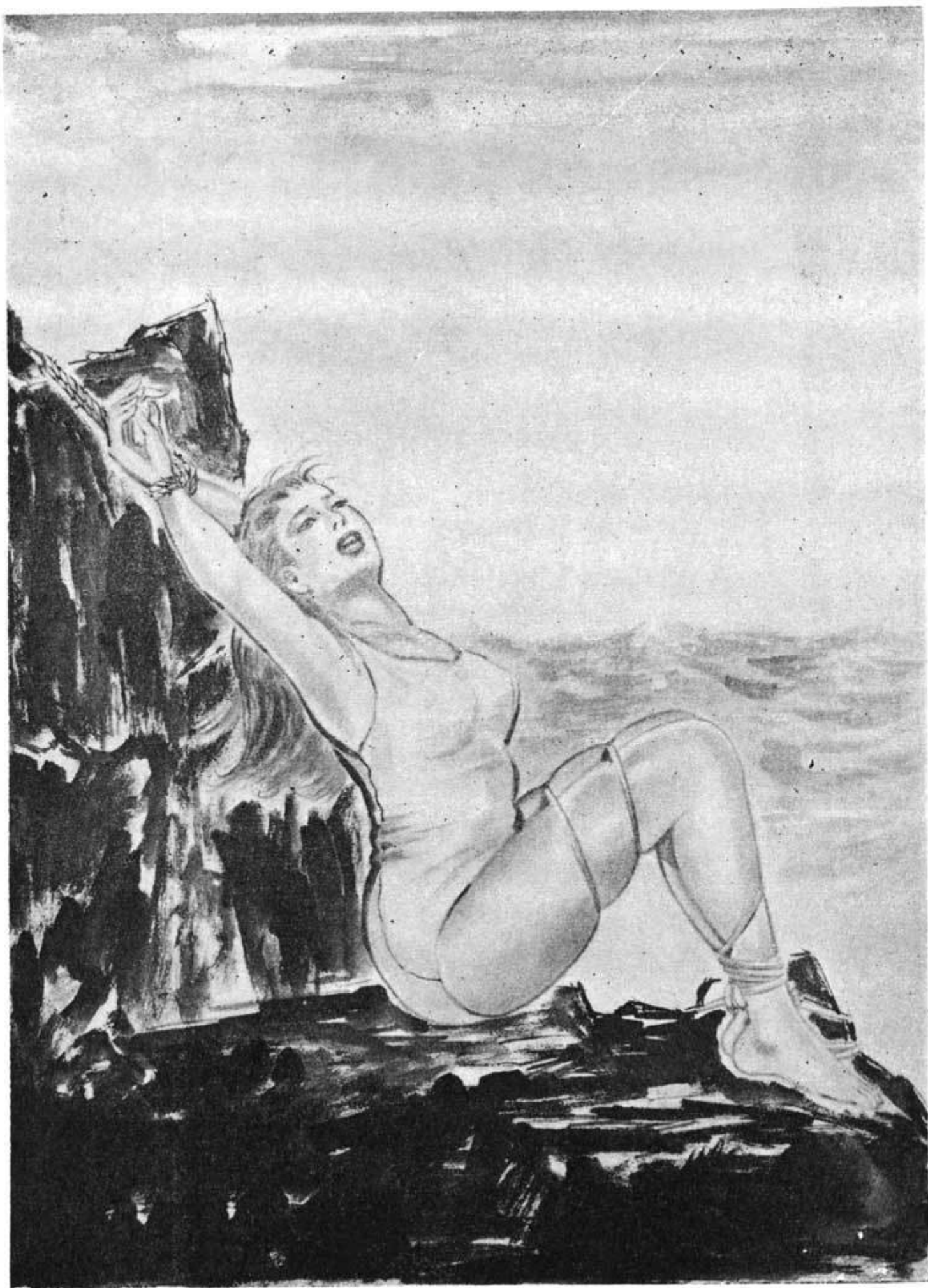
サイクリング・スタイル



ノー・アンダー・ウェア

富士絹を透して、かすかにうかがえる肉体の線は、あらわなヌードよりも、一層魅感的である。着衣と拘束の不安定感は、彼女を深い危惧に陥れる。





水着スタイル

はちきれそうな若々しい肉体を水着に包んで海浜に青春を謳歌して、絢を競う美女たち。然し、遙か海上を望む岩の上で縛られると、一層彼女の美しさが増すから不思議である。

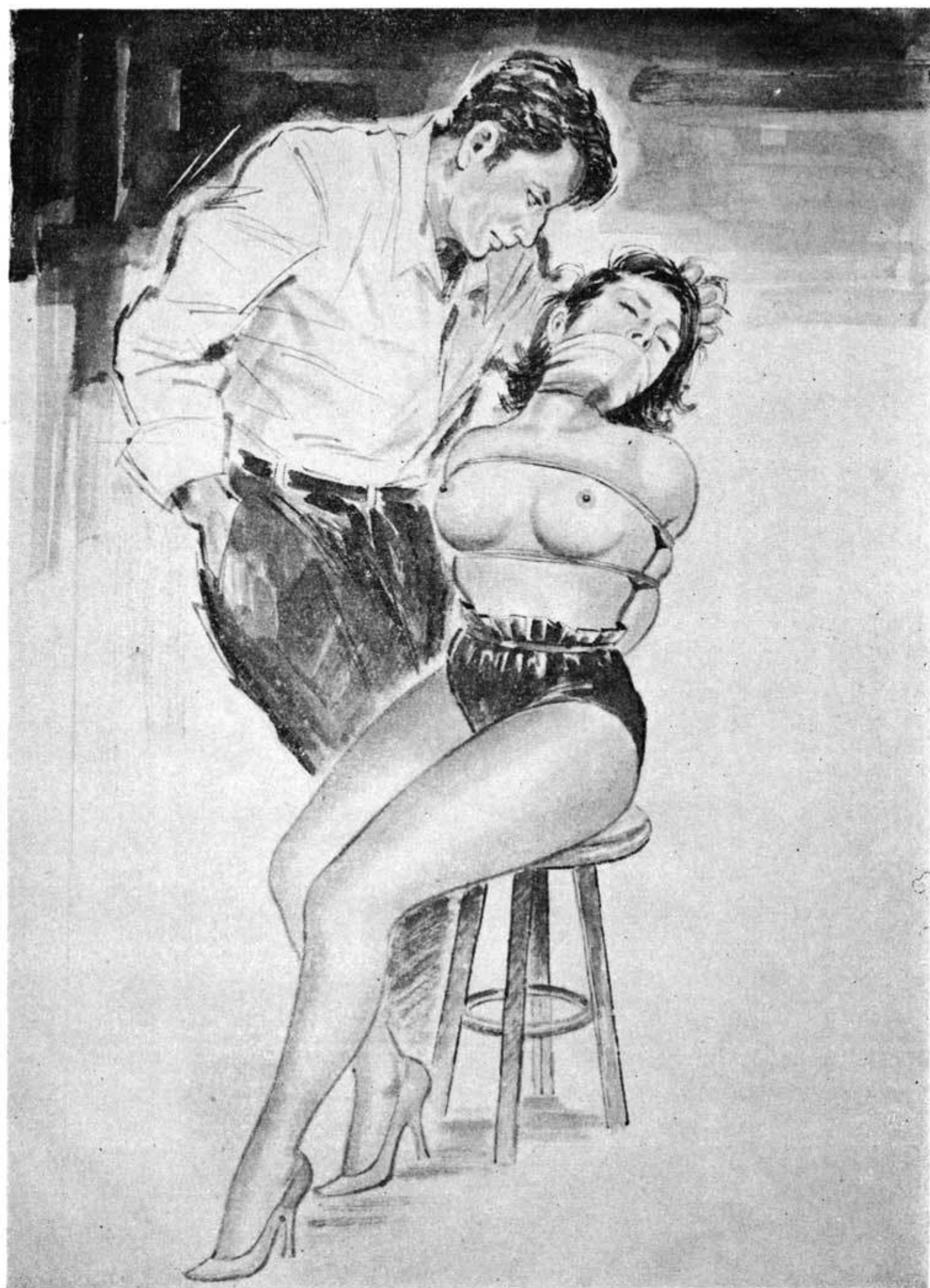


ストップ・ルック

ぴったりと肌に密着して身体のカーブをそのまゝに出したストップ・ルックは思わず男性の眼を釘づけにさせる妖しい吸引力を持っていた。

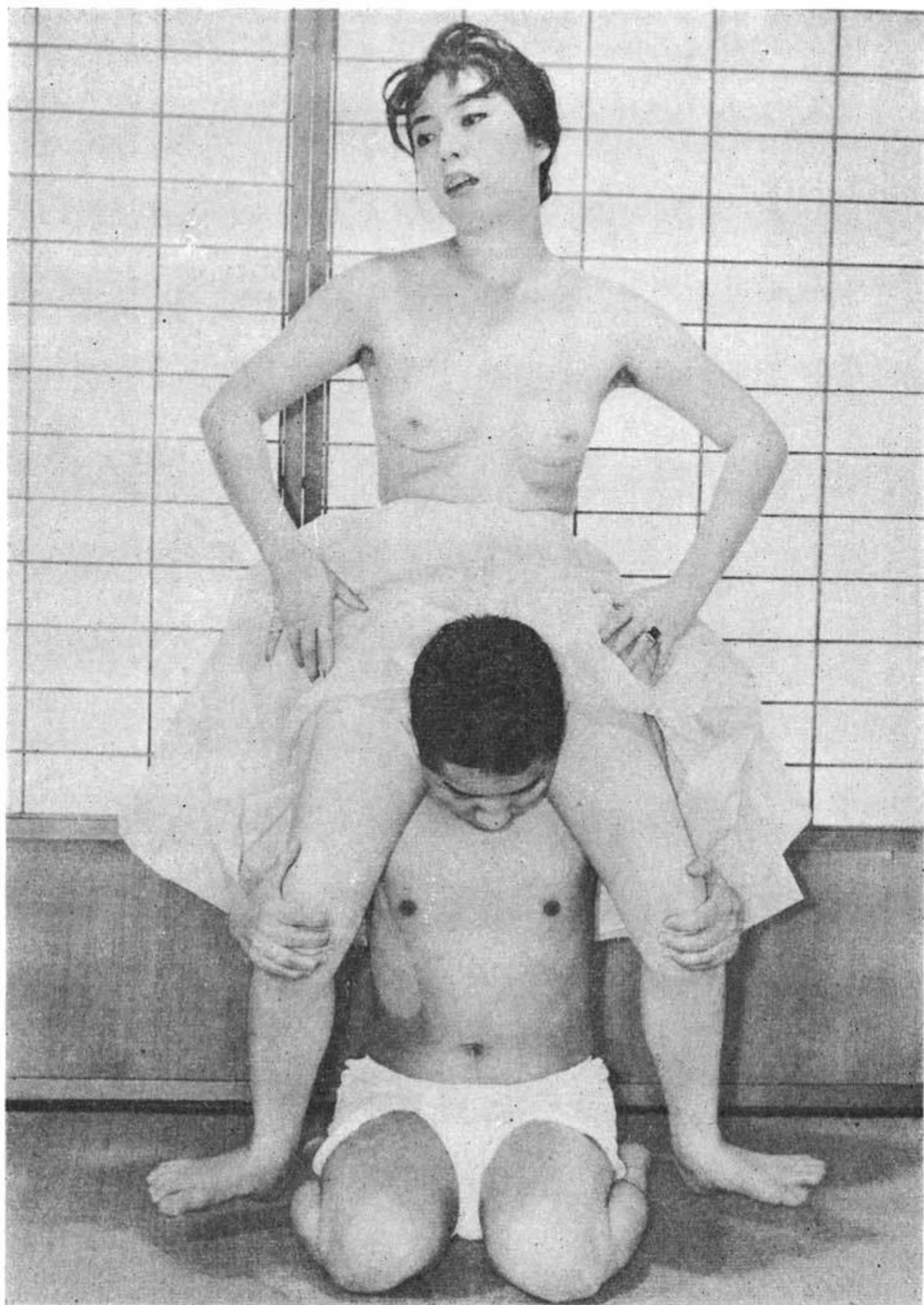
おシメ・スタイル

ヌメヌメとしたゴムのタッチは、女性の肌に対して或る異質の影響を与えるものであるらしい。ポリウムのあるヒップを包んだゴム布は、彼女の意志に反して意地悪く働く。



肩 車

「さあ、乗るわよ。しっかり頑張ってなくちゃ駄目よ。」54キロの女体が、どっかと首の上にのっかってきたので小柄な彼は中々立ち上れなかった。早く立ち上って部屋を回らないことには、次の仕置が待っているのだが…。





懲しめ

なかなか考えるとおりに動かない、こやっ奴、お尻の上で二ッ折りにして懲しめてやろう。頭を挙げようたって、全体重が背中へかかっている上に、後手首を逆に引かれているので、ドミナの思いのまま、この男を操縦できるのである。



男の自由を奪う

をそそられる一場面。

男をピストルで脅迫して後手に猿ぐっわ。米誌の挿絵にあらわれたマゾヒスチックな感興

(EXOTIQUE NO、10ヨリ)

慟^{どう}

哭^{こく}

モデル 絹川文代





モデル 柳 初子

芳紀二十歳の表情

身長157センチ
体重 46キ ロ



新入荷品第四号



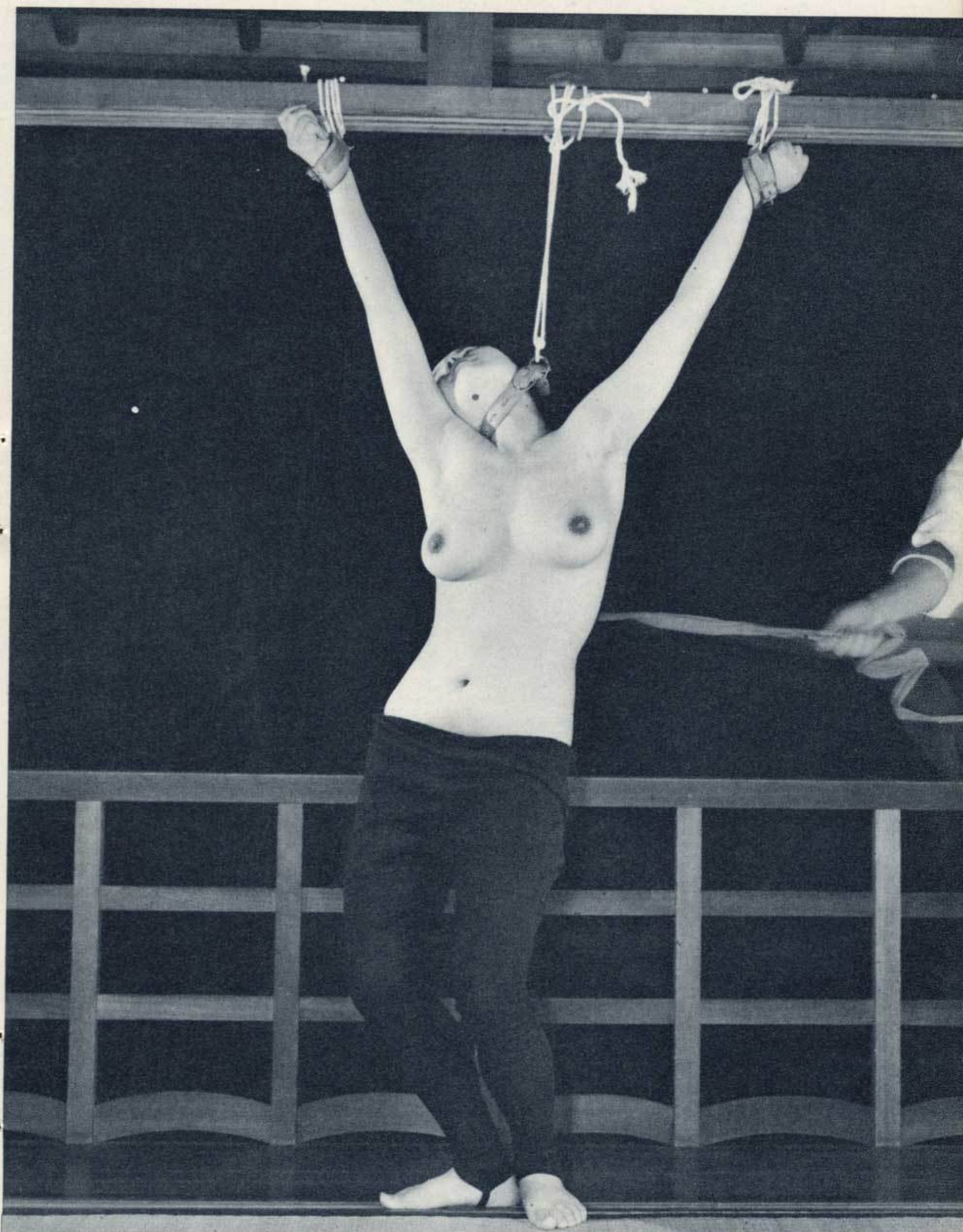
女 奴 隸 呻 吟





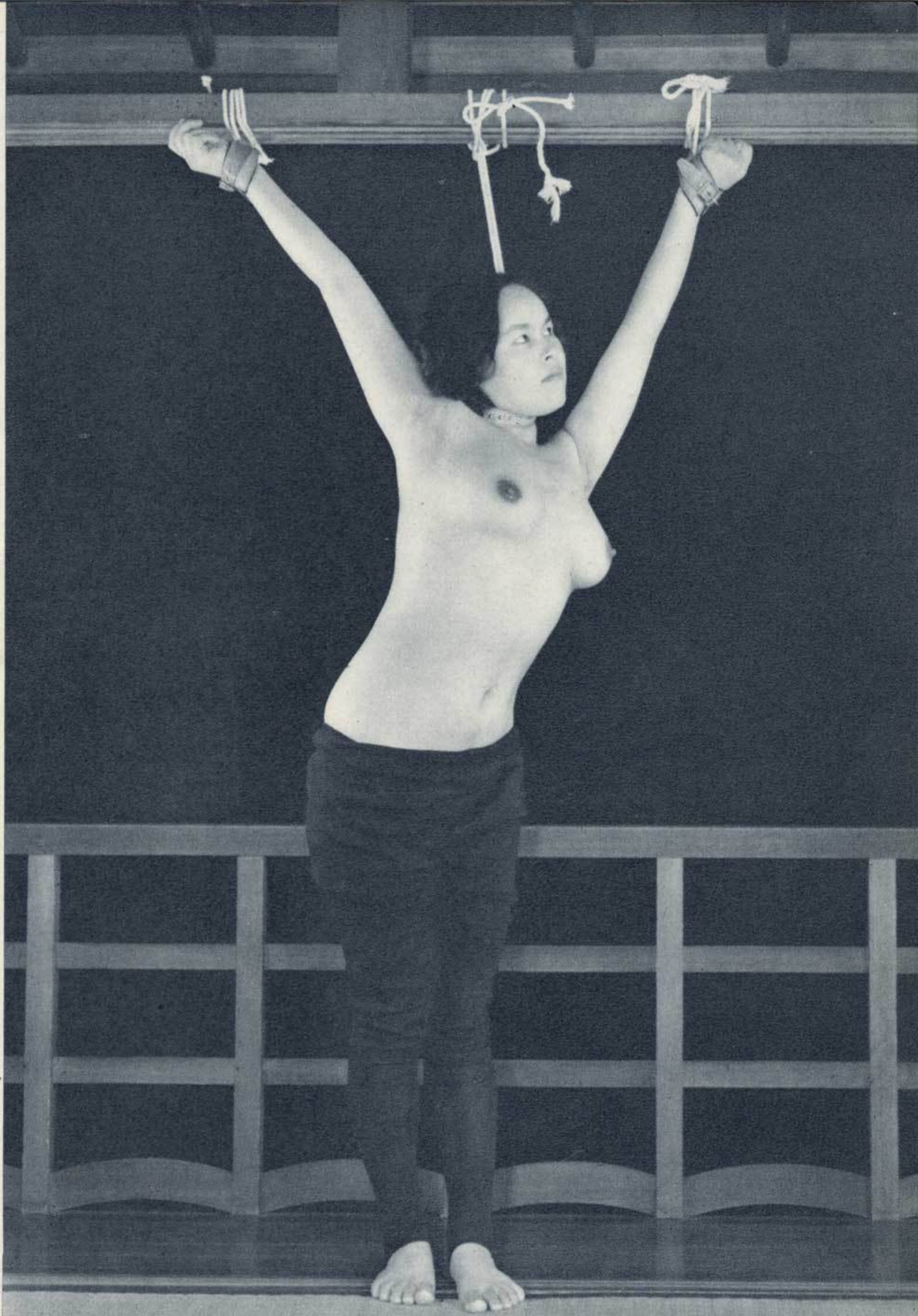


撻 鞭 臀 豐





モデル・桜井 葉子





放^{ほう}

心^{しん}



羞しゆう

愧き

モデル 若原明子



電車の見える部屋

続^{ぬめ}肌^{はだ}に紐^{ひも}悲^{かな}し





モデル・絹川文代



国際女奴隷売買グループの真黒い魔手がいつしか日本にも伸びてきたといったら、多くの人々は驚くというよりも頭から信用しないであろう。そのグループを名づけて「暗黒集団」と呼ぶ。愛玩用としては世界的に有名な日本の女性が彼等の触手から逃がれることは困難だった。グループの日本支部が大都会の中心部に設置されると、いち早くリストによって候補者が物色された。

絵物語『暗黒集団』女狩

四馬孝構成並画



暗闇から突如として現れたハンサムな青年は有無をいわず津矢子に襲いかかり、す早く皮手套の両手首を細紐でくくってしまった。あっという間もない一瞬の出来事であった。幸か不幸か、青年の手ぎわが、余りにも敏捷だったため、矢津子は助けを求めて叫声を挙げる機会を失ってしまった。青年が美女捕獲の第一報を本部へ通報すると間髪をいれず車が近寄ってきて、両脇からかかえあげるように乗せた。

絵物語『暗黒集団』捕獲

四馬孝構成並画



絵物語『暗黒集団』 訊問



四馬孝構成並画

本部へ護送された津矢子は直ちに後手に縛り上げられると訊問室へ連れて来られた。そこには何国人か、津矢子にははっきり識別出来なかったが、赤茶けた毛髪からして日本人でないことは確かだった。女狩に来た二人の青年は、さてはこの男の手先だったのか、とさとしたが後の祭だった。本名、生年月日、両親の名、等を聞かれたが、それらは既にリストによって調べあげられていることばかりであつた。

絵物語『暗黒集団』装着

四馬孝構成並画



訊問の終わった津矢子は別室へつれて来られた。そこは壁ばかりの殺風景な部屋で天井や壁のところどころにフックのようなものがついているのが殊更異様に見えた。部屋へ入るなり、津矢子は着ているもの全部を脱ぐように命じられた。ファッション・モデルをしているので衣裳を着替えることには慣れていたが、二人の青年の见ている前で衣服を総てとってしまうということは乙女の身として出来ることではなかった。

絵物語 『暗黒集団』 検査

四馬孝構成並画



両手の革帯が万歳の形でフックにかけられると、津矢子は他に何の拘束もうけていないのに、全く身体を自由を失ってしまっていた。全身に対する精密検査が先ず足の先から行われた。足の拇指から小指に至るまで次々と指紋をとられ、指の長さ、爪の大きさ等を刻明に記録されていった。両足が終ると革のブーツが足に合わされた。検査官は皮の長靴をはいた将校服の男であった。

やっとのことで全身の検査が終了したが、津矢子のたぐい稀な美貌と見事な肢体とは
いたくこの異国の検査官を満悦させた。この素晴らしい女体を「飼育」という名目に名を
かりて、一つ弄んでやろうと思いついた。助手の男を帰らせると、女を坐らせ首輪を壁
の環に固定した。殺伐な砂漠の中に半生を過したこの男にとって、目の前に自由を奪わ
れて呻吟する日本娘は、狼の前の羊のようなものであった。

絵物語『暗黒集団』飼育

四馬孝構成並画



絵物語『暗黒集団』馴致



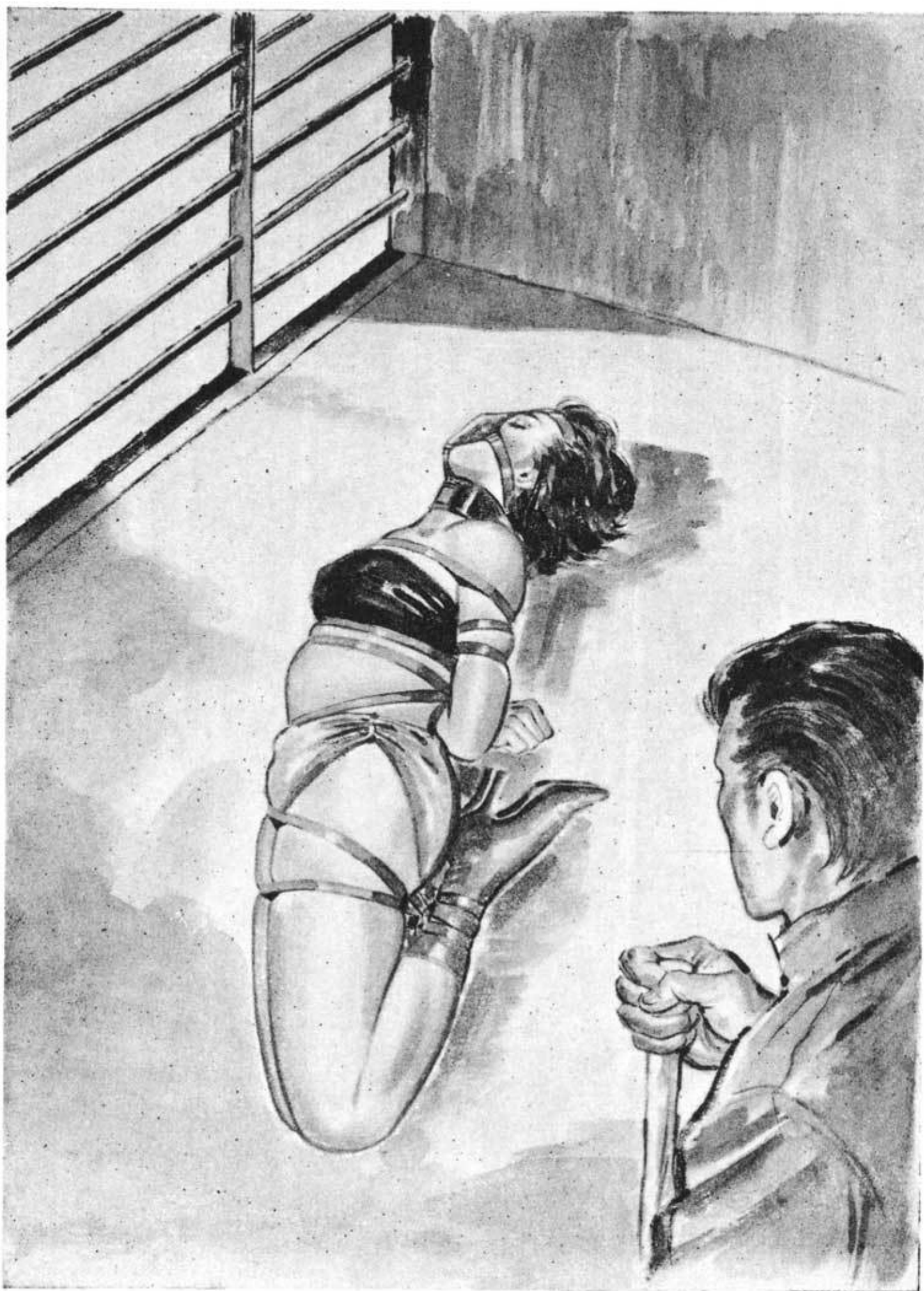
四馬孝構成並画

次に収容された室は、自由自在に調節出来るパイプから津矢子の全身にあらゆる温度の液体を注ぐことの出来る気密室である。その液体は単純な水であることもあれば、又各種の成分を溶解した溶液であることもあった。津夜子が一匹の家畜として十分に生活してゆくことが出来るために施される家畜馴致の一手段であった。これは日本娘の需要が予想外に旺盛なために急速に家畜化を計る一手段として考究された方法である。

家畜化が完了した女体は嚴重に荷造りして世界各地へ密輸されるのである。今や津矢子も幾多の苦痛と汚辱とを経験して、ここに一匹の家畜として生れ変わったのである。ナンバー・ワンのファッション・モデルとして颯爽と銀座のペーブメントを闊歩していた彼女も、その白い肉体を捧げて主人に奉仕することのみを役目とする家畜になり下ってしまったのである。

絵物語『暗黒集団』輸送

四馬孝構成並画



佳^か

人^{じん}

鼻^び

難^{なん}

モデル・絹川文代









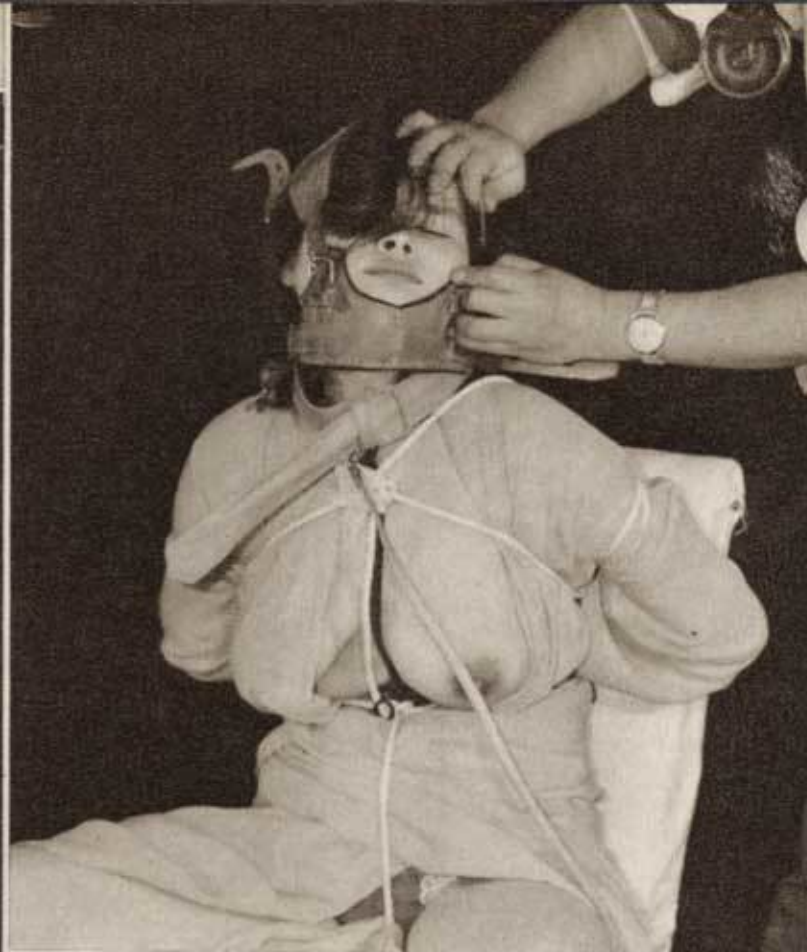
防 声 具 と 乳 房 責

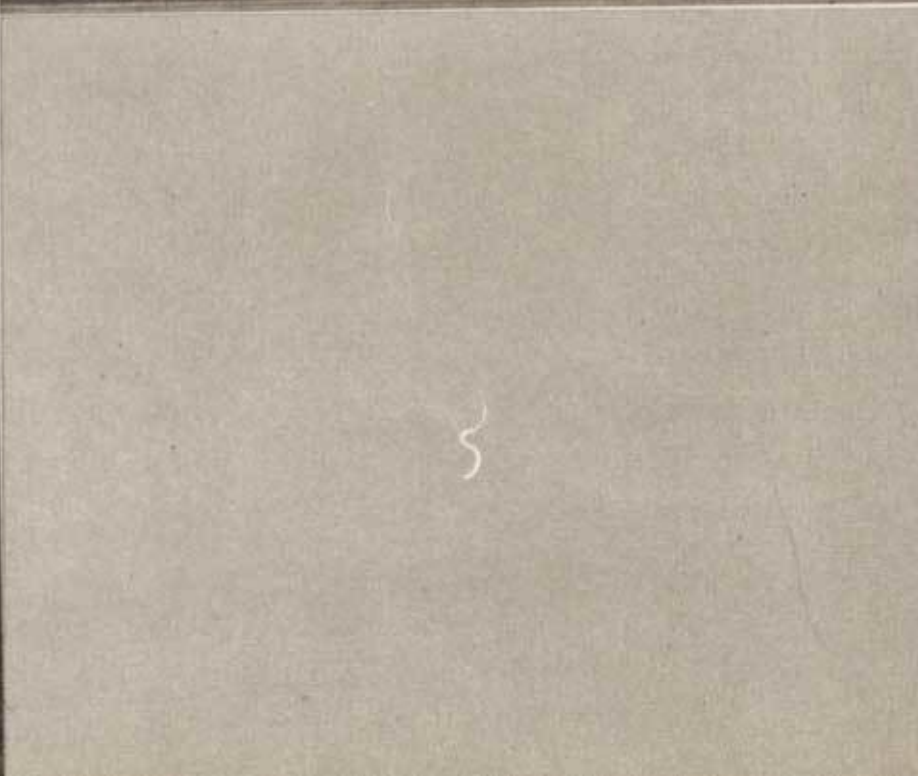
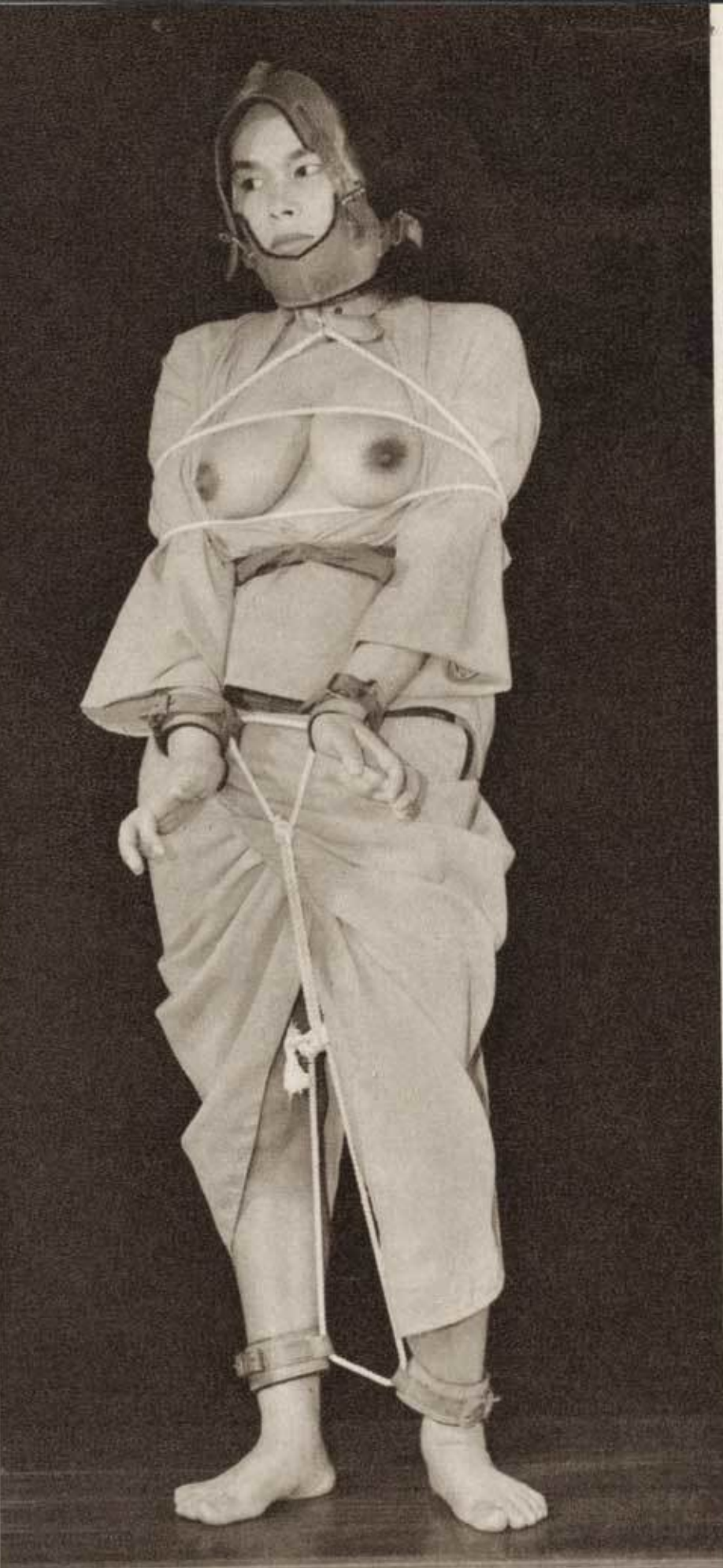
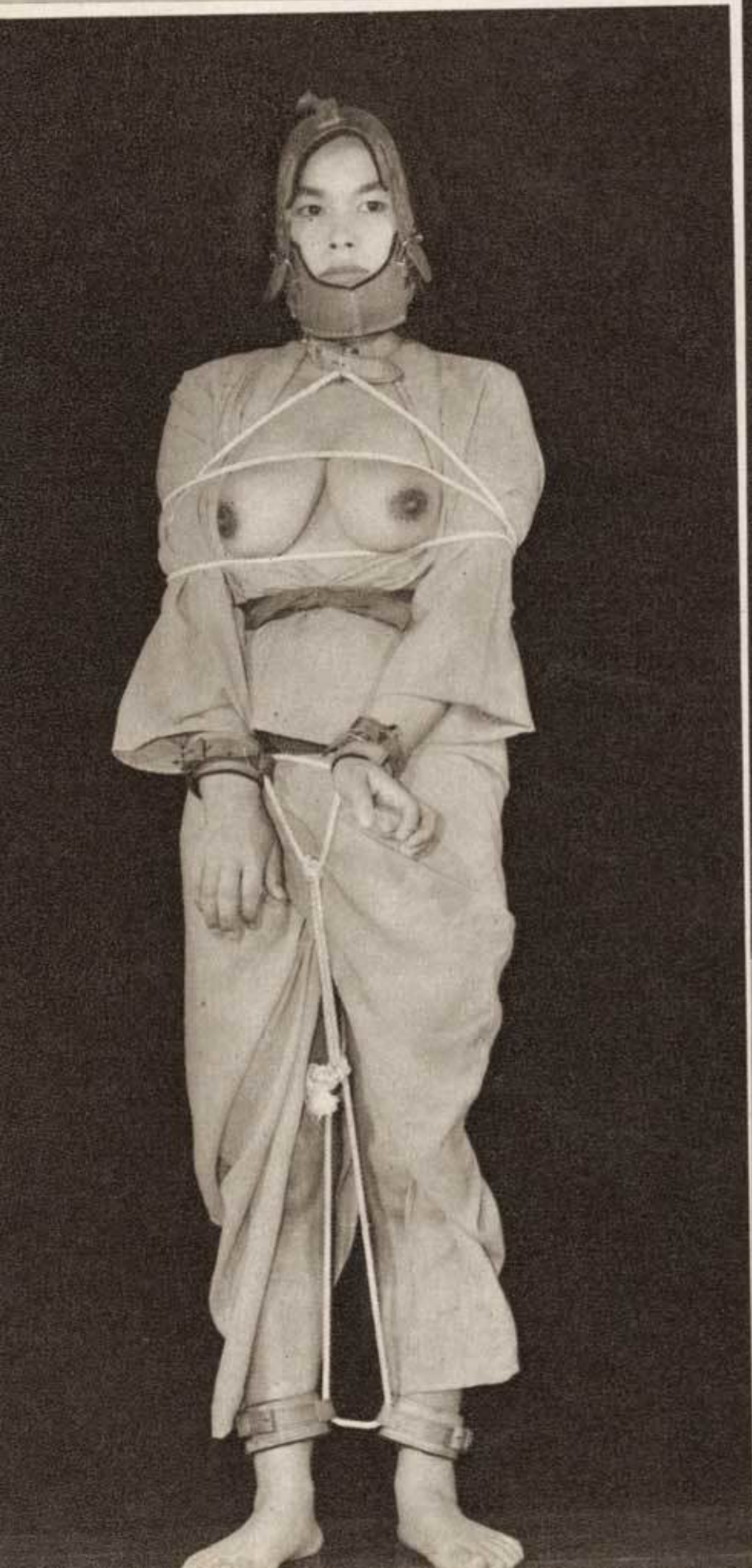
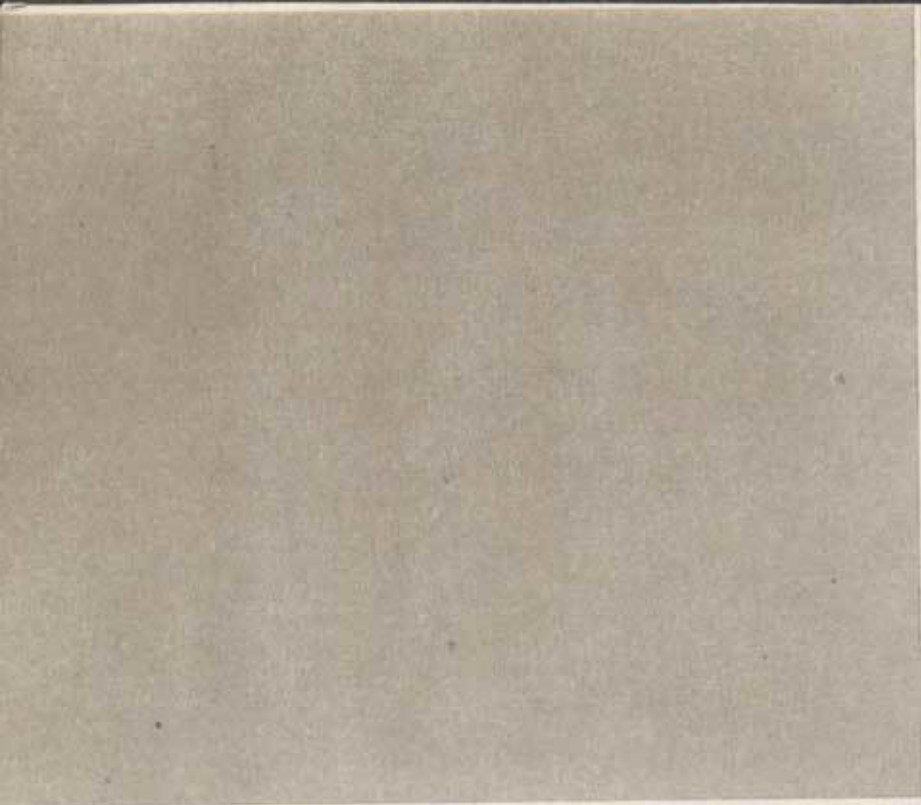


顔枷の装着

構成・辻村 隆

モデル 櫻井葉子



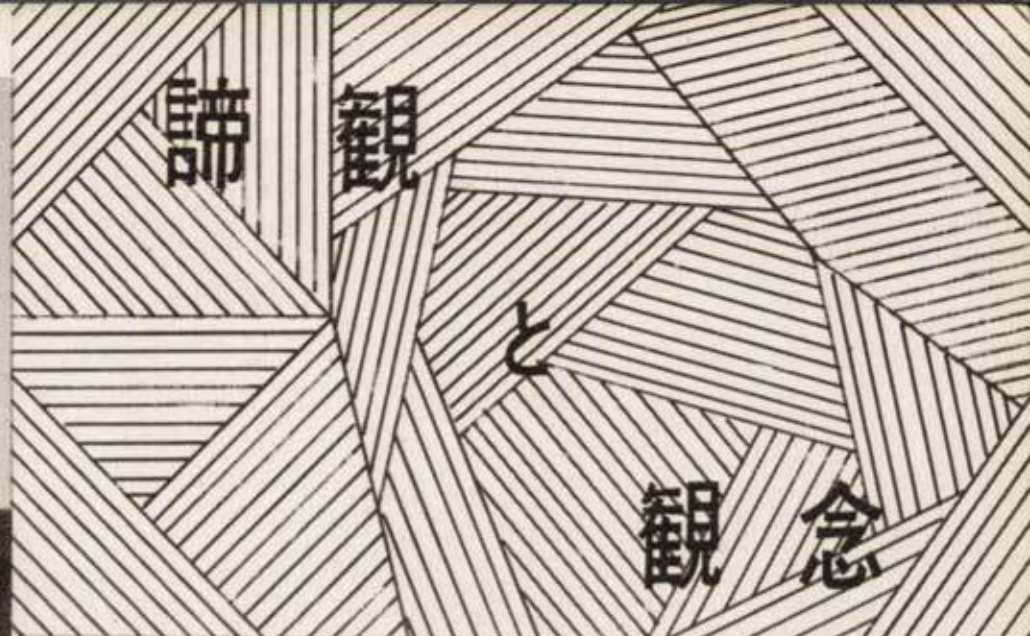




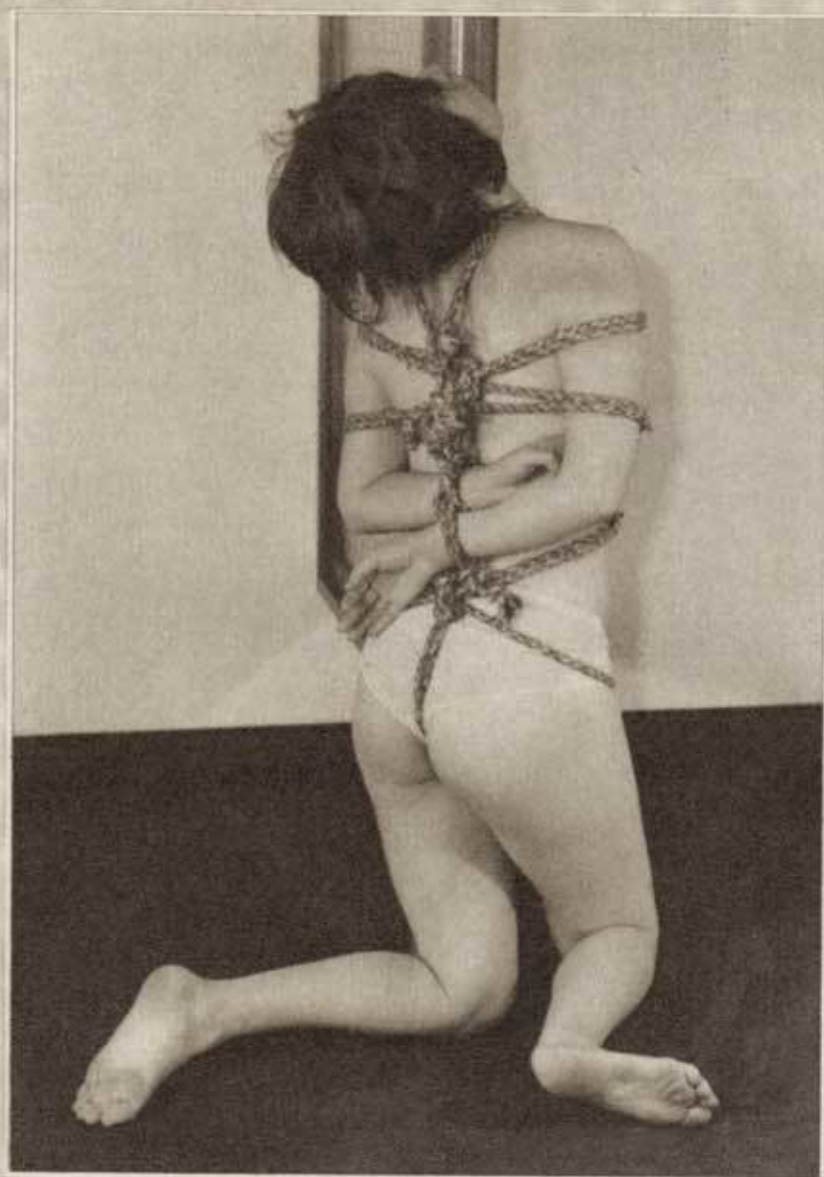
小町娘

モデル 杉江美津子











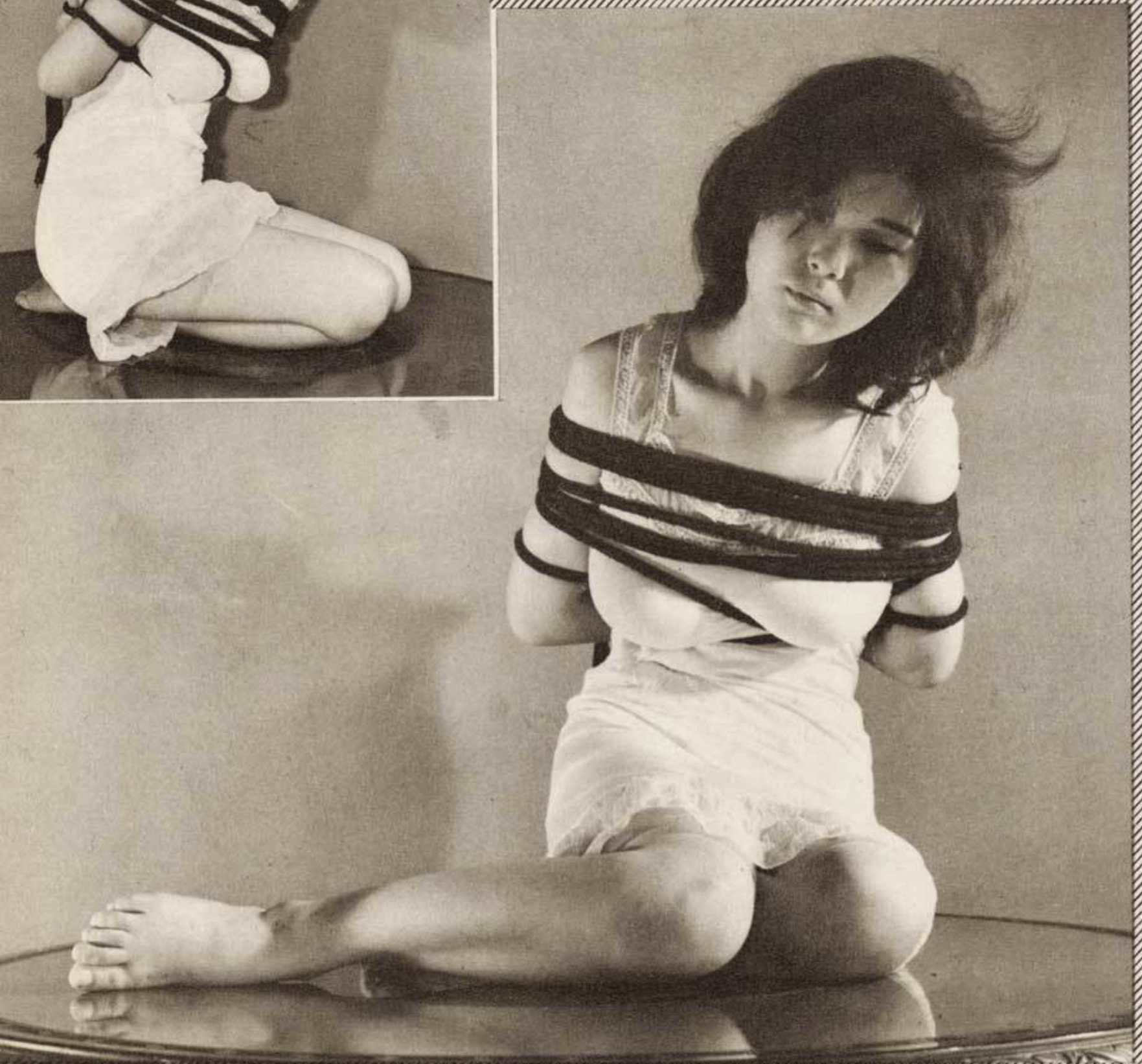
モデル・絹川文代

受縄の初姿



モ子ル柳 初子



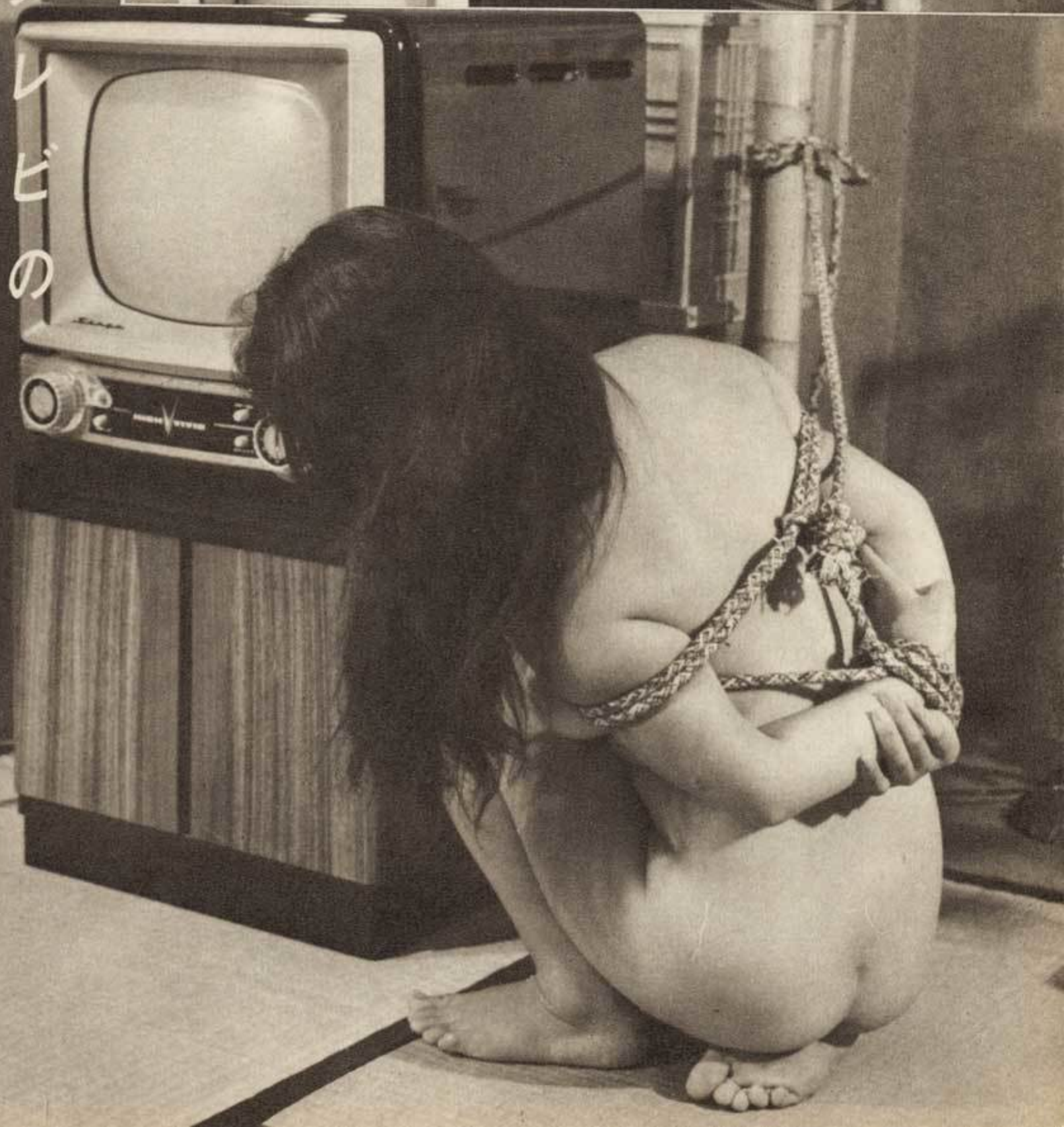




テレビの

ある風景

モデル・大塚啓子



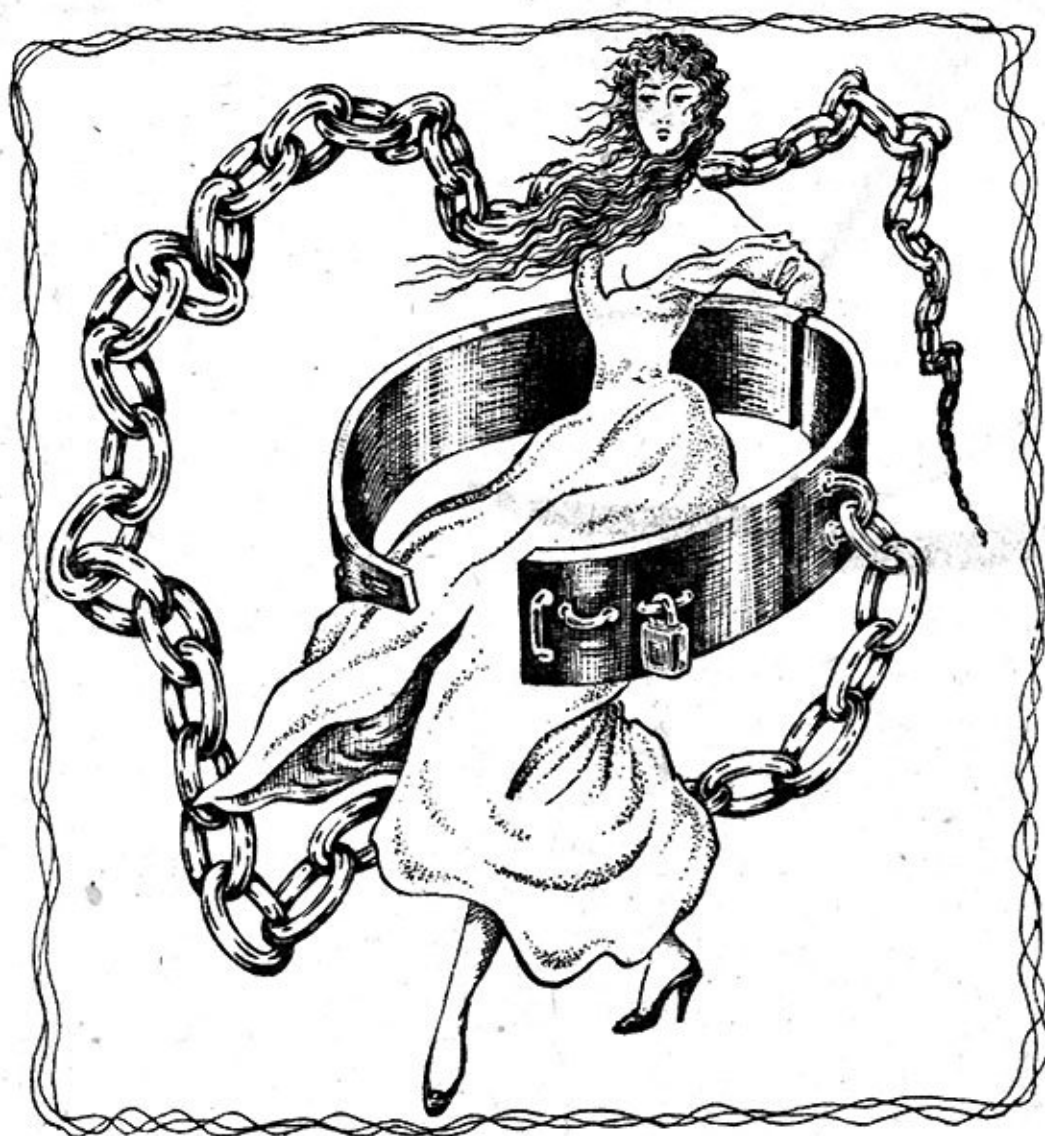
新しい風俗文献研究誌

奇譚クラブ

新装十月特大号

1960年 10月号

(第十四卷 第十四号 通刊第四百十六号)



夜^{よる}

の

畏^{わな}

藤

見

郁

灘

五

郎

・

画

1

駅をでると、深夜の湿った空気が、肌にしんと触れた。

そこは私鉄の終着駅で、ほかにおりた客はなかった。マユミは疲れている身体をふるいおこして、かよい馴れた我が家への帰り道をいそいだ。

夜、もう十二時をまわって一時に近い。

空はよく晴れていて、星がいっぱいちらばっている。まるい月が、冴えた青白い光りを放っていた。疲れているので、マユミは前こごみ



になって、いそぎ足に歩いていく。

延源寺という、小さな寺の前を通りかかった時である。

寺門の脇に貧弱な街燈が一本たっていて、まるい光りの輪を道路に投げていた。

——おや？……

マユミの足がとまった。

その街燈の明かりの輪と暗がりとの境い目に、黒い皮の財布が落ちていたのである。

マユミは、ハイヒールの靴の先で、その財布を、ちよいと蹴とばしてみた。それから、すばやい視線で、キョ

ロキヨロとあたりを見まわした。

このセチがらい世の中に生きている
十人のうち八人までの本能であろう。

夜ふけの道に、人の影はない。

マユミは腰を折り、財布にそっと手
をのばした。いい財布だ。中身を調べ
てみる。千円札が五枚あった。

——五千円！……

マユミの胸が、どきんツと鳴った。

——儲かったわ……

思わず、つぶやいた。

マユミは、勤め先のバーのマスター
に今日もいやみを云われたのだ。

「マユミさん、週のうちに同じ服を二
度も着てお店にでることは、どうも感
心しないね。なにしろ、うちは美人が
売り物なんだから。お客の眼も肥えて
いるし……」

「はい……すみません」

マユミは、うつむいて唇を噛んだ。
彼女は年老いた父と、学生の妹を養
っているの、ほかの女給たちのよう
に、収入を惜しげもなく衣裳につぎこ
むわけにはいかなかった。

——五千円あれば、イージーオーダ



——で、ちつよとしたスーツの上着ぐら
いできる……

マユミは、その財布を自分のハンド
バッグの中へ入れた。

それからまた足早に歩きだす。

二十メートルほどいくと、赤い電燈
のともる交番があった。中では若い警
官が机に坐って、なにか帳簿のような
ものを調べている。

マユミの足が、一瞬すくんだ。

胸の鼓動がドキドキと高くなった。

——やっぱり、交番に届けてしまお
うか。

そのほうが、あと味はいい。

だが——

マユミの足は、交番の前をそのまま
通りすぎた。身体じゅうが熱くなっ
た。顔がカッカッと火照った。

背中から「モシモシ」と、呼ばれる
ような気がして、思わず足が早くなっ
た。

だが警官は、マユミの姿をチラッと
見送っただけだった。

マユミはホッとして足をゆるめた。
膝がふるえた。

——これでこの五千円は、あたしのものだわ……
急にうれしくなって、もう一度ハンドバッグをひらき、中の財布をたしかめた。

と——そのとき、

「モシモシ……」

背中に、男の声がした。

ぎくん！……とマユミの心臓がとまった。両足がすくんだ。

2

うしろから声をかけたのは、黒いソフト帽をかぶった中年の男である。一見、紳士ふうの服装をしている。

男は、マユミの肩に身体を押しつけるようにして近寄った。

「——見てしまいましたよ」

低い、しやがれた声で男はささやいた。

「な、なにをです！」

こたえたが、マユミの背筋に氷のようなつめたいものが走った。

顔色が青ざめた。

「なにをって、あなた、とぼけちゃいけません。——その財布を落したのは、じつはぼくなんです。落してから気がつき、あわててもときた道をひき返し、あのお寺の前までくると、ちょうど、あなたが、ぼくの財布をひろうところだった。——それから、あなたは急に足を早めて、どんどん、まるで馳けるように行ってしまうもんだから、ぼくは追いかけるのに、ハアハアと息を切りましたよ。ああ苦しい……」

もぞもぞとつぶやくような、ねばっこの口のきき方である。

「あ、あたし、こ、交番へ届けようと思ひまして……」
あわてて、どもりながらマユミは男に弁解した。つめたい汗が腋の下に流れる。

「フフフ……笑わしちやいけませんよ。あなたは、交番の前をすました顔で通りすぎたじゃありませんか。あなたは、ぼくの財布を、つまり、ネコババするつもりだったんだ。そうでしょう、ええ？」
男の顔が、マユミの鼻さきに迫った。

「……」

マユミの身体が硬直した。

駄目だ。この男は、みんな見ていたんだ。

「さあ、ぼくと一緒に、いまの交番へいきましようよ。——拾得物横領罪、そんな罪名がありましたねえ……」

男は、マユミの右腕を、ぐいとかんだ。

「ゆ、ゆるして下さい。財布は、お返しします。お願いします。ゆるして下さい！」

すがりつくように、マユミはいった。

「駄目、駄目。ぼくはね、あなたのずるい心を、怒っているんですからね」

男は強い力で、マユミの片腕をひきずっていく。

「お詫びします。ほんとうにお詫びします」

マユミは泣き声になって哀願した。

交番で事情をきかれたら、マユミに弁解の余地はない。マユミは警察がおそろしく思えた。

「心から、ぼくに詫びてくれますか？」

男は手の力をゆるめた。そして、のぞきこむようにして、マユミ

の顔をみた。

「はい、ほんとうに、すみませんでした」

マユミは、ハンドバッグに入れた財布を、男の手に渡した。

「口だけじゃ、ぼくは納得しませんねえ。それに、まだ若いし、美しい顔をしている。どうです、詫びの気持があるのなら、そのしるしに、ぼくと三十分ばかり、つき合いませんか……」

男の唇が、不気味なうす笑いを洩らした。

「……」

この紳士ふうの男から、なにか異様な気配を感じて、マユミは二歩、後退した。

「逃げてでも駄目ですよ、あなた。ぼくはどこまでも追いかける……」

どうです、三十分で返してあげる。いやなら、このまま警察へいきましよう……」

男は、また手に力をこめた。

「お、お供しますわ」

マユミは決心した。警察にいくのは、どうしてもいやだ。

男は、ニヤリとしてうなずいた。

暗い家並のむこうに、温泉マークのネオンが、赤く妖しく燃えていた。

男は、マユミの片腕を固くつかんだまま、その炎のようなネオンをめざして足を踏みだした。マユミの身体は、もうその力にひきずられるままだった。

3

小さな洋間だった。

片側の壁に、ベッドが据えられてある。むろん、二人がそれだけのために使うベッドだった。

男の手が、マユミの肩を押した。うしろ手でドアをしめる。

——卑劣な男！……

マユミは胸中でさげんだ。マユミとて、いわゆるシロウトの女ではない。この怪しげな旅館へ誘われたときに、もうすべての事態は察していた。

——仕方がない、野良犬にでも襲われたと思って、すこしの間、眼をつぶるか……

マユミの心は、あきらめに傾いた。

しかし、男の様子は、部屋に入ってから、急に変わった。兇暴になったのではなく、むしろ、マユミに対して、妙に遠慮がちになったのである。

オドオドしているようにもみえた。

「すみません、こんな所にお連れして……。でも、あなたの身体に危害を加えたり、あなたの身体をどうしようとかいう気持は、ぼくには全然ありませんから、その点だけは、どうか安心して下さい」

男は、哀願するよういふのだ。

——変な男……

マユミは、いぶかった。旅館の一室に連れこんでから、そんな奇妙な弁解じみたことをいうのは、いかにも変っている。

「じつはね、ぼくはあなたの、その、写真を撮らせて頂きたいのです」

いままで恐怖のためにマユミは気がつかなかったが、男は手に小

型のポストン・バッグをさげていた。そのバッグの中から、一台のカメラを取り出したのだ。

「写真を？」

思わずマユミは、きき返した。

ますます奇妙な男だ。狂人ではないだろうか。



「ええ、あなたの写真を……。でも、普通の写真ではないんです」男はなおもバッグの中を手さぐり一束の縄をつかみ出したのだ。その縄をみたとき、マユミはぎくりとして思わず男の顔をみあげた。

——この人、なにをする気だろうか……

男は縄束を器用にくるくると解いた。縄は蛇のように長く一本にのびて床の上にくねった。

「さあ！」

男の手が、いきなりマユミの右手首をつかんだ。痛いほどの力だった。

「な、なにをするんです！」

「あなたの身体に、決して危害は加えません。ただ……あなたの縛られた姿を写真に撮りたいのです。すみません！」

男は、あえぐようにいった。声がふるえていた。

つぎの瞬間、マユミの右手首に縄がかかっていた。その手首が、おそろしい力で背中中にねじりあげられた。

「あゝ、痛ッ！」

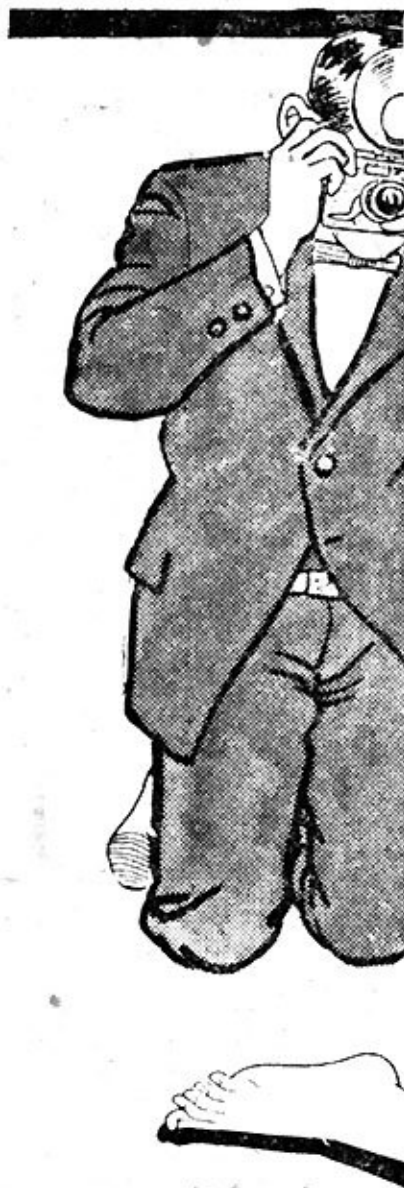
つづいて左手首も背中へねじりあげられ、マユミの両手首は一つに重ねられる。たちまちギリギリと縄がからみつく。

別人のようにあらあらしい男の動作だった。

「なにをするのよ！」

マユミはわめいた。

だが、男は無言だった。なにかに憑かれたような眼の色で荒い息を吐きながら、マユミの両腕をうしろ手に縛りあげていくのだ。



マユミの身体は床の上にねじ伏せられた。縄にひきしぼられて、両腕が肩の方へ、みしみしと吊りあげられた。

「うううッ、痛ッ！」

苦痛のために、顎が犬のように前へとびだし咽喉が、きしんだ。胸に乳房に、縄がまわされた。

二巻き、三巻き、四巻き、凄い力である。男は夢中なのだ。縄はマユミの肌に、ぐいぐいと喰いこんだ。

完全に両手を縛りあげてから、やっと男の力がマユミから離れた。板張りの床の上に、横倒しになってもだえているマユミの白い四肢。その苦悶の姿態に男の眼が異様な光りを帯びて見つめる。喰いつき、なめまわすような眼の色だ。

さすがに美人バーで働くだけあって、現代的に洗練された美貌とすくすくとよくのびた豊満な手足をもつマユミである。

その若い新鮮な張り色をもつマユミの身体が、縄にいましめられて両手を失い、芋虫のようにもかく光景は、この世のものとは思われない、妖しいむごい眺めだった。

スカートのまくれあがり、その下のスリッパの裾が現れて、肉づきのいい腿が、まぶしいほどの白さであえいでいる。

「痛いでしょうが、辛抱して下さいよ」

男はカメラをかまえた。構図を練った。

フラッシュ・ランプの鋭い閃光。

「あれッ」

思わずマユミは声をあげ、足をすくめた。

マユミにはわからない。なんのために、あたしのこんな恰好を撮ろうとするのか。あとで脅迫の材料にでもしようというのか。

ああ、縄に締めつけられた腕が痛い。乳房が苦しい。スカートの裾が気になる。肌をみせたら、この男はつぎにどんな手段にでるだろう。それはわかっている。

男の眼が、血に飢えた獣の色に似てきた。

こなければよかった、こんな旅館へ……。警察へいったほうがマシだった。マユミの背筋に黒い絶望と戦慄が走った。

4

フラッシュの閃光はつづいた。

カメラをかまえる男の腰つきも、シャッターを押す手つきも、かなり馴れている様子である。

「やめて、やめてえッ」

マユミは泣き声をあげた。

恥しい。気味がわるかった。悪夢だろう、そう思いたい。だが、身に喰いこむ縄の苦痛は夢ではない。おぞましい現実だ。

マユミは床の上を、ごろごろと転げまわった。スカートの裾が、さらに大きくひるがえる。まるい腿の肉づきが、いっそうあらわに

さらけだす。その素肌を隠そうにも、両手はぎゅぐゅと後ろだ。

ブラウスの乳房が痛烈な縄目に大きくはずんだ。乱れるのはスカートやスリッパばかりではなかった。ブラウスの襟もと、ボタンがひきちぎれて、まくれあがった。

牛乳を塗るかためたように白い丘陵の、そのなまめかしいまるみが半分ほども露出している。縄にくびれた、いたましい乳房の顔だった。

ごくり、と男が生唾をのむ。

その乳房の苦悶にも、レンズを近づけ、フラッシュをむける。

男の額には、うっすらと汗が浮びはじめた。鼻の頭が、あぶら汗で光っている。

この男の心は、いま恍惚の渦にあるのだ。五体がしびれるほどの歓喜に酔っていた。

——すばらしい！……なんというすばらしさだ。この美しさ、この異常な美しさはどうだ。眼がくらみそうだ。これでなければ、迫真力のある写真は撮れないのだ！……

男はシャッターを押しつつける。夢中だった。この男は、過去に幾人かのモデルを使って縛り、その記録を印画紙の上にのこしてき

た。だが、モデルではもう、ものたらなくなってしまった。モデルには表情がないのだ。顔だけの表情ではない。この写真には、手にも足にも指さきにも、胴にも腰にも表情がなければならぬ。

女体と縄をテーマにしたときの、ドラマチックに緊迫した表情、雰囲気。それが過去のモデルにはないのだ。

そのことを、いくらモデルに求めても、教えても駄目だった。眼

の表情すら乏しい。感情も変化もだせないのだ。

——金で雇ったモデルを縛って写真を撮るなんて、もう馬鹿みたいなもんだ！……

男は絶望した。

芝居や演技ではないモデルを、狂ったように求めはじめた。

そして、この男の眼の前に、いまその夢にまでみた女体が、生き生きした恐怖で横たわり、身をくねらせているのだ。

「すばらしい、美しい！……」

男は感嘆し、声にだしてうなった。

手の甲で額の汗をふく。したたり落ちるほどの汗だ。

かまえていたカメラを下におろす。すでに一本のフィルムを終えた。

「ああ……」

マユミは切ない息をつき、はげしく疲れていた。床の上でもがきまわる力は、もうなくなっている。

「咽喉が渴いたの。水、水をちょうだい」

マユミは、かすれた声をだした。

暑いのだ。室内には異常な熱気がこもっている。汗がしたたり落ち、咽喉がやける。

「ああ、すまない。いま飲ませてあげます」

男は意外なほど素直に、マユミの縄を解いた。

自由を得たマユミは手首や二の腕についた縄目の痕をこすった。

ベッド脇のサイド・テーブルに、水の入った瓶とコップが置いてある。マユミは床に膝をついた中腰のまま、瓶とコップに手をのばした。

ごくごく咽喉を鳴らして水を飲む。赤い唇の端から、水が溢れて咽喉から胸へと伝わった。

マユミはコップをテーブルに戻しながら、隙をうかがった。ドアをあけ、廊下へとびだして逃げる隙だ。

だが、男にも油断はなかった。

立ちあがり、ドアのノブにすばやく手をかけたマユミの肩を、

「駄目だよ」

男の手が猛烈な勢いでつかみ、手もとへひき寄せた。

「あれッ！」

マユミは頭からのけぞった。床に音たてて尻を打ちつけた。ずしんと弾んだ。痛かった。マユミの顔がゆがんだ。狂ったような男の力を知り、もう一度、立ちあがって逃げる気力がおとろえた。だが血走った眼で、マユミは男の顔を睨みあげた。

「大きな声をだすわよ！」

「ウフフフ……大声をあげたら、誰かが助けにきてくれると思うのかね。ここはね、温泉マークだよ。いくら女が声をあげたところで誰も聞きこえないフリをしているのさ」

男は笑った。

そして床に落ちている縄をひろいあげ両手できゅっとしごいた。

マユミを見る視線に、また不気味なものが生まれた。

5

マユミは、パンティ一枚の裸にむかれていた。そして、ふたたびうしろ手に縛りあげられていた。縄が柔肌の中に、くっきりと喰いこんでいる。いっそう残酷な空気が流れていた。

フラッシュ・ランプの残骸が、室内の一隅にすでに数ダースも積み重なっていた。

「すばらしい！……ううう……まったくすばらしい身体だ！」

男は、うわごとのようにつぶやきながらシャッターを押すのだ。羞恥に耐えかね、残った気力をふりしぼって、マユミは床の上をころげまわった。レンズから逃げるのだ。足で床を蹴った。肩で床を這いまった。

乳房も太腿も、むざんにさらけだされたマユミだ。それをいま、フィルムの上にうつされているのだ。

パンティが残されているのは、マユミにとって救いだった。そこにこの男の、わずかに残されている良心をみた。

「も、もうやめて！」

マユミは泣きながら哀願した。両手が自由ならば、押んで許しを乞いたいほどだ。

縄が乳房をしめつけて、呼吸すら苦しくなっている。さっきはブラウスの上からだだが、こんどは素肌に、じかに噛みこんでいるのだ。強烈な縄目だ。まるで蛇のように力をゆるめない。

手首のあたりは、もう血管までもしめつけられて、指さきはつめなくなっている。感覚がしびれていた。

「あ、あ、痛いッ、くるしい！……」

縛られたまま、うつ伏せになって、執拗なレンズの眼を避ける。すると、板敷きの床に乳房がつぶれてまた疼痛が重なる。

そこで横むきになる。と腕に体重がかかって、すぐがまんできなくなる。仰向けになると、背中にくくられている手首や腕に、全身の重みがのしかかり、どうにも苦しく、ヒイヒイと泣き声をあげて

しまう。

ごろごろと反転して、すこしでも、この苦痛からのがれようと、むなしい努力をするマユミだった。

ゆたかにふくらんだ二つの乳房が、そのたびに、わめくように揺れ、うす紅色の乳首が恐怖と羞恥にかたくとがる。

胴のくびれが肉感的な誘惑をみせて極端にほそく、そのくびれの下から、きゅうにむくむくと盛りあがっている腰の隆起が、白いパンティをはちきるかと思うばかりの見事さだった。

内腿の真っ白に柔かい部分が、ぷりぷりとふるえている。

左右の足を必死により合わせて、この屈辱を耐えるマユミ。悪魔の眼のようにどこまでも狙ってくるレンズから逃げようと、無駄な努力をつづけるのだ。

「もう一度、もう一度こっちをむいて！」

カメラをかまえながら、男は憑かれたようにポーズの注文をつける。

注文というよりも、マユミが苦しまぎれに転々と変えるポーズを夢中になって追いまわしているのだ。

いまこの場面を、第三者がふとのぞきこんだとしたら、どんなにかそれは妖しい、どぎつい光景として眼に映るだろう。

ベッドだけ据えてあるが、安旅館のなに一つ装飾もない殺風景な部屋。その板張りの床に、パンティ一枚の若い女が、うしろ手に縛られてうごめいている。白い肌と黒い縄。

刺激的な図だ。地獄絵的な対照だ。

その裸女から、やや離れた位置に、中腰になった男がカメラをかまえ、汗まみれになってシャッターを押している。

単なる遊戯的な撮影風景ではないのだ。

女の顔にも、身の悶えにも、恐怖にさいなまれ、羞恥にあえぐ、真の表情があらわれている。

「おねがい！……もういいでしょう、もうやめて、くるしい！……縄が、縄が身体に喰いこんで、死んでしまう！……」

マユミの口から、火のような息が吐きだされる。さんばらに乱れた髪が、顔半分におおいかぶさる。

「もうすこし、もう一本だけ！」

男の形相もまたすさまじい。両眼をみひらき、唇を噛んで粘りに粘る。

「ああッ、もうゆるしてッ……」

マユミは疲れ果てた。全身、流れるような汗だ。もがく力も使い果たした。

腹這いになったまま、ぐったりと床に顔を伏せてしまう。そして動かない。

「駄目だ、駄目だ。顔をこっちにむけて！」

男は、どなった。

だが、マユミの顔は突ッ伏したままだ。

と、みた男は腕をのばし、手の指先でマユミの足の裏をくすぐりはじめた。

「どうだ、そら、くすぐるぞ。そら、そら、くすぐりたいだろ。それ、コチョコ、コチョコ、コチョコ、コチョコ……」

ふざけているようにも見えるが、これは残忍な責めだった。

「ああッ、ひっひっひっ……」

たちまちマユミは足を締め、また急激に突ッばらせて、このくす

ぐり責めをはね返そうとする。

男の指は、だがどこまでもマユミの足の裏をなぶりつつける。おもしろがっている。

「あッあッ、ひッひッひーッ！」

泣いているのか、笑っているのか、わからないようなマユミの悲鳴だった。



白い腹がへこんだり、ふくらんだりしてヒクッヒクッとあえぐ。

胸が胴が腿が足が、また芋虫のようにくねりはじめる。ただくねるのではなく、七転八倒だ。

「そうそう、それだ！」

ふたたび、フラッシュを浴びせ、恍惚のシャッターを切る。

「よし、そこでもうすこし、変ったポーズをしてみよう」

男はカメラを置き縄尻をつかんでマユミの身体をひき起こした。こんどはベッドの脚にぎりぎり巻きに縛りつけるのだ。身動きならず、縄でくびれあがった乳房が、レンズの前に拡大される。

咽喉にも縄を巻き、しめ殺されるのではないかと、恐怖の瞳をとびでるほどにみひらいたマユミの表情のクローズアップを一枚。

両足首を縛り、その縄尻を首にひっかけてしめあげる海老責めを一枚。

ベッドの上に大の字なりに縛りつけ、そこをのしかかるように一枚。

猫がねずみをもてあそぶ情景に似ていた。

疲労きわまったマユミは、しまいには人形のようにされるがままだった。マユミの全身には、あぶら汗がギタギタと光り、熱く濡れていた。肌の縛られた部分には感覚がなくなっている。

痛みのためにいつか恐怖を忘れ、いまはただ、地獄の海の中にただよっているマユミの肉体と神経だった。

やがて疲労は、男にもやってきた。疲労と同時に、興奮と陶酔も絶頂を越えていた。

「ああ、もうフィルムがなくなった。残念だけど、もうおしまいだ。縄を解いて家へ帰してあげるよ。お嬢さん」

男は、汗で濡れた顔に、やっと人間らしい微笑をうかべた。彼は満足した。

マユミはやっと自由をとり戻した。彼女は身づくろいながらも不思議だった。

男は、あの約束を守ったのである。裸にむいて縛り、かなりあくどい悪戯をしたにもかかわらず、マ

ユミの貞操には、指一本触れなかったのだ。

——まったく、変な男だわ……

マユミには、そう思うゆとりが生まれていた。それが、くやしい思いに火をそそいだ。

6

草むらで虫が鳴いている。秋が近いのだ。

それから三週間ほどたった夜のこと——。

私鉄の終着駅に近い、延源寺の門の暗いかげに、一人の男がじつと立ちすくんでいた。

三週間前に、マユミを罠にかけた男だ。

男は、ことさらに闇の濃い門柱のうしろにひそんで、人の通りかかるのを待っていた。

門の前は、貧弱な街燈に照らされていて、ぼんやりと明かるい。

と——

駅のほうから、一人の若い女が靴音をひびかせてやってきた。

マユミより二つ三つ年上の女だ。背をまるめ、前こごみになって、足早に歩いてくる。

闇の中の男の唇が、ニヤリと笑ったのは、その女の靴音が、門の前でピタリととまったからである。

女は、地面を照らす、街燈のまろい光りの輪の中に、黒い皮の財布が落ちているのを見つけた。

十秒ばかり、ためらっている。が、女は決心したように、その財布へ、ついと手をのばした。

あたりをキョロキョロと見まわす。それから、財布をひらいた。

千円札が五枚。中身を調べ終えると、女は手の中に財布を握りしめた。

そして、また足を早めて歩きだす。

と——門柱の裏にいた男が足音を忍ばせて女を尾行しはじめた。女の足は速度を増した。前方に赤い燈のともる交番がある。

その交番の前で、女はためらい、立ちどまるかのように見えた。が、先夜のマユミと同じく、結局は通りすぎていったのである。

男の唇に、またニンマリと微笑がうかぶ。

交番を通りすぎて、五十メートルほどいったとき、男は女の背後から、そっと声をかけた。

「モシモシ、あの……」

女は、ギクリとして肩からふりむいた。

「なんででしょうか？」

女の視線が、鋭く男を凝視した。

「いまあなたがひろった財布、じつは、ぼくが落したもののなんです……」

男は相変らず低い声で、ささやくようにいった。

一瞬、女の瞳がまるくひらき顔色が青ざめるかのようにみえた。

「あなたは、ぼくの財布をひろいながら、それをネコババしようと思いましたね。中には、五千円入っています。まちがいなく、ぼくの財布です。拾得物横領罪ですね。ぼくと一緒に警察へきて下さい……」

女の身体が、大きくふるえだした。

男の眼が誇ったように燃えた。女の腕を、ぐいとかんだ。

「もし警察へいくのがいやなら、どうです、三十分ばかり、ぼくに

つき合って頂けませんか……」

男は女の腕をひいた。

「それとも、警察へいきましようか」

男は声にやや凄みをふくませて、なおも女の耳にささやいた。五分後——。

男は、新しい犠牲者のやわらかい二の腕をつかんだまま、赤いネオンが屋根に燃えさかる温泉マークの、その玄関に立っていた。

「たのむよ、この間の洋間がいいね」

三週間前の夜、マユミを縛り、かずかずの苦痛を与えた部屋。

その部屋の片隅に、今夜の女はすでに観念しきった表情と身のことなしで、哀れにもうなだれていた。

男の胸に、ゾクゾクする期待が湧いて、女の身体を眼でなめまわす。

「フッフ……あんたはなかなか、あきらめがいいね。なに、ぼくはべつに、ひどいことはしやしない。ただ、写真を二、三本撮らせてくれればいいんだ……」

男の手が、バッグの底から縄束をつかみだした。そして、女の手首を握り、ぐいッと背中へねじりあげた。

そのとき——

ドアが乱暴にひらかれ、二人の警官がとびこんできた。

「あっ！」

女をうしろ手に縛りあげようとしていた男は、突きとばされて仰向けにひっくりかえった。

「な、なにをする！」

男はわめいてはね起きようとしたが、二人の警官に左右からおさ

懸賞原稿募集

☆ 規 定 ☆ ☆ 賞 金 ☆

告白と手記と体験記

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千円	若干篇
佳作	一篇に付	二千円	若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

えこまれた。
「フフフ……」

笑ったのは女である。

いままでの青ざめた顔が、ガラリと勝ち誇った色に変わった。

「どうもご苦労さん、あぶないところだったね。」

警官の一人が、女にねぎらいの言葉をかけた。

「ちくしょう、そうだったのか！」

事態をさとして、男はうめいた。

「ホホホ……。うまく罠をかけて、また一人若い女に悪戯しようとしたけど、こんどは反対に罠にひっかかったというわけね。わたしは当局に頼まれて、わざとあなたの仕掛けた罠に足を入れてみたの……」

女は小気味よさそうに笑った。

こんな男は、女性全体の敵である。

三週間前の被害者であるマユミが、くやしきのあまり、匿名で警察へ投書したのであった。

事件が事件だけに、泣き寝入りしている女性が、まだほかにきつといるに違いない。

そして、これに味をしめた卑劣な男は、まだ、このさきも同じ手で、あくどい悪戯をするに違いない。マユミはそう思って投書したので。

当局は一計を案じて、ついにその現行犯を捕えた。

「——この人が罠に使った財布の中の金を、明かるいところで調べてみて下さい」

女が利口そうな眼つきでいった。

「なに、財布の中の金？」

警官の一人が、いわれたとおりにした。

「なんだい、これは？……」

警官は啞然として、その金を指さきでつまみだした。

五枚の千円札は、すべて幼稚な偽造であった。

だが、夜の暗い道路上で、あわててのぞきこむ欲ばりの眼には、やはり本物に見えるのだろう。

偽札ならば、たとえ罠が失敗して、そのまま持っていかれてしまったとしても、損はないはずである。

「すみません。わたしが悪うございました」

首をふかくうなだれて、男は警官にひかれていくのである。身からでた錆とはいえ、いたましいほど悄然と、哀れっぽい男の姿であった。

女^{おんな}相^ず撲^{もう}と女^メ斗^ト美^ミ

雪崎 京人

観戦記 八重桜と君ヶ浜の血戦

いろいろのスポーツ、芸能などに於て専門家と素人、所謂プロとアマとではその実力に大きな差があるのが普通である。その中でも相撲、碁、将棋など特にその差が甚だしいといわれている。

世間には相撲の得意な男は、学生相撲、草相撲といわず沢山に居る。しかし学生横綱として不出世の偉材だった拓大の吉井山が専門家の大相撲に入ってはあまり目だたぬ存在のまま遂に引退してしまつた様なのが、その例である。

さて例の女相撲に於ても同様で、男に較べ

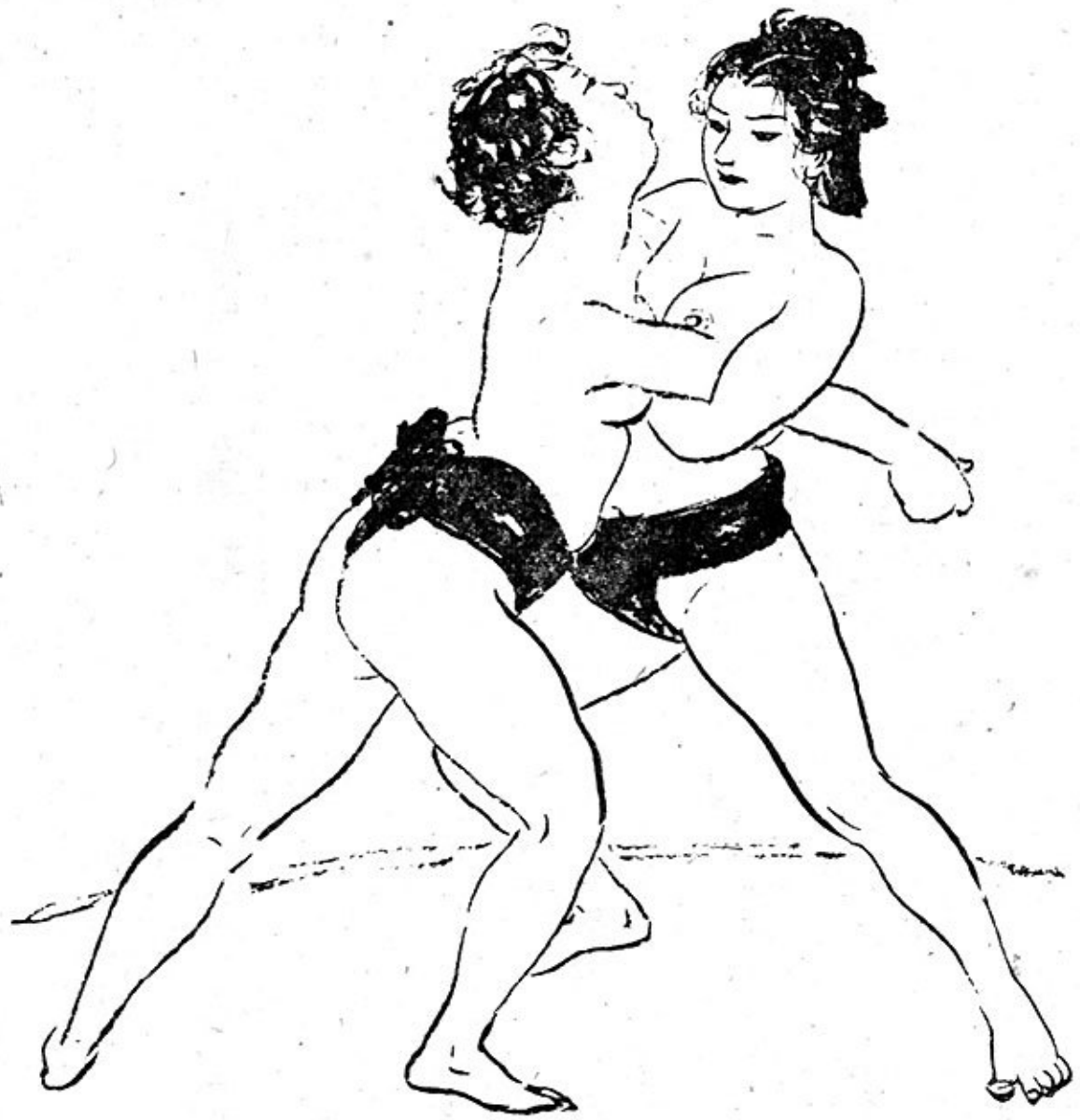
て女で相撲を取る人が少ないだけプロとアマの差は甚だしいと思わなければならない。その女相撲に於てアマである素人娘が千軍万馬の古強者プロの女力士に挑戦し、凄絶な死斗の後之を倒した勝負の有様を記して見たい。

今から数えろと十年近く以前、湘南地方にあるH氏の別荘でこの催しが行われた。勿論非公開で、女相撲マニアの同好者が、それぞれの縁故で報せを受けて同氏邸に集った。庭前の砂地に立派な土俵が築かれ、松林に囲まれた広い庭園に初夏の太陽が光を投げて居た。プロ女力士による数番の取組みが先ず行

われた。

H氏が苦心の結果、特に美人の女力士を招いたので、容貌といい、体格といいいづれ劣らぬグラマー女力士、非公開であるから勿論全裸に黒の相撲褌をきりりと締めて土俵に上り、火の出る様な突き合い、揉み合いの熱戦を展開してくれた。しかし、これを記述するのが目的ではないから割愛し、当日の呼物だったプロ女力士の君ヶ浜みつえと可憐な素人娘八重桜やす子の対戦の模様を記して見たい。

君ヶ浜みつえは三十四才、五尺四寸、十八



貫二百、千葉県の生れで、一家揃っての相撲好き、十六才の時に巡業に來た女相撲の一行に無理に加わり、天性の相撲好きに加えて稽古熱心、それに体力腕力も人に勝れて居た所からメキメキと強くなり、相手になる者がな

に男に混って出場しても断然強身があったところで評判の怪力娘だったらしい。H氏が之を聞き及んで自邸へ連れて來て暫く稽古をさせて、今日の対戦となったというわけだ。豊かな乳房のきめの細い肌をした美女で派手な模

い程になった女力士。一寸女相撲の若の花といった所筋肉質で勘がよく精悍な感じの美女で浅黒い肌が激しい稽古でつやつやと輝き、敏捷な女豹といった感じだ。

之に対する八重桜やす子は岩手県の生れ、二十一才、五尺三寸五分、十七貫八百、子供の時から力が強く、男の子と相撲を取っても殆ど負けたことがなく、村の青年団の相撲など

様の浴衣を肩にひっかけて控えに入っている。

いよいよ当日の呼物、君ヶ浜と八重桜の対戦となった。溜りに居並んで見ている女力士達は口々に「そりゃあ、なんといっても君ヶ浜さんにはかなわないよ。第一肌のきたえ方が玄人と素人では違うわよ。」と言っている。君ヶ浜は東から土俵に上る。水もしたたるばかりの黒髪を大銀杏の櫓落しに結び上げ、必勝の自信にあふれた悠然たる表情で相手をじっと見ている。

一方八重桜は如何に強いといっても未だ年も若いし、裸相撲には未だ場数をあまり踏んでいないこととて、大分あがり気味、髪はパーマのまま、真白なもち肌が湯上りに桜色になった所へ黒の相撲褌を堅く締込んだあで姿相手の大姐御に勝味はないかもしれないが、無惨な負方をさせ度くない、ある程度喰下って大姐御を手こずらせる所を見せて欲しいと見物も思ったことと思う。

この取組みは三番勝負で勝敗を決することになっている。先ず最初の一番、気合合して立上ると激しく突張り合い、八重桜もろ差しになった。八重、体をつきつけて東土俵へ寄ろうとすると、君ヶ浜これをかんぬきに絞

上げた。君ヶ浜は怪力の持主、寛政の昔の雷電為右エ門のかんぬきではないが、その小型の様なもので大抵の相手は参ってしまうもの。君ヶ浜の得意の手の一つ、脇をあけて簡単に八重桜にもろ差しをゆるしたのも最初からの作戦だったらしい。女力士同志なら警戒してガップリもろ差しに直ぐにはならない所だが素人娘でしかも初の顔合せ、うかうかと敵のわなにかかったというわけだ。

君ヶ浜、どう、私のかんぬき痛いわよ。といわぬばかりに相手の顔を見乍らじりり、じりりと締め上げれば、八重桜、苦痛に顔をゆがめ身もだえするが、君ヶ浜、口許に薄笑いすら浮べて益々絞り上げる。八重桜の前膊は血の気を失い、真白になって見える。君ヶ浜そのまま西土俵へ持つて行き、ドッと突放せば八重桜、尻餅ちをつきそのまま土俵下に転げ落ちたが、両腕がしびれて暫しの程起き上れない。

控えの女力士に助け起されたが、痛さと、みじめな負方とに声を忍ばせて泣いている有様。玄人と素人との差をあまりにもはっきり見せつけられて、見物も興ざめた感を持った程だった。後の二番はとて取れないし、取ったとしても勝敗は分りきっていると思われ

た。しかし気かぬ気の八重桜、負けてもよいから後の二番もやらせてと行司に言っている。行司も承知し続行することになった。

八重桜の両腕は暫くマッサージされ、回復を待ち再び戦い開始。土俵に上った八重桜、両眼を真赤に泣きはらしている。しかしくやしさに必死の表情で仕切りに入

った。一方君ヶ浜、この素人の小娘がといったなめ切った表情で、油断があったらしい。

八重桜一瞬早く立ち猛然と右肩から当って出るのを君ヶ浜ガツチリと受止め右を差し右四ツ八重頭を相手の胸につけて東土俵へ寄って出るのを、君ヶ浜、右へ廻り乍ら相



手の頭を起し、逆に正面土俵一ぱいに寄りつめ体を預けて寄り倒そうとする所を、八重桜、若さから来る強じんな二枚腰、かかえ上げる様にし乍ら、体を弓なりに反らせて左へ打っちゃれば、君ヶ浜、相手を甘く見て居て、土俵際にこんなしぶとさがあるうとは知らず、

勝ったものと思つて油断した瞬間、足を開いたまま孤を描き土俵下に落ち、八重桜も同時に折重なつて溜りへ落ちた。

思わぬ逆転勝ちに軍配は八重桜に上った。しかし倒れた時に八重桜、強く胸を打ったらしく、砂まみれになつた右の乳房を押さえて痛そうな表情。八重桜土俵下でゆるんだ禪を控力士に締め直して貰い、三度目の決戦に臨み土俵に上った。八重桜は禪一本の素裸で相撲を取つた経験が少ないせいか、しじう立ちを気にして、股間に喰い入るのを右手で直しているのも興味ある風情である。

今度は君ヶ浜も大事を取つてなかなか立たない。立上るや八重桜又もや猛然とつつかけるのを、君ヶ浜左からかち上げ寄つて出れば八重するすると西土俵に後退、一挙に土俵を割つて勝負がつくかと思われたが、土俵際で巧みに廻り込み、左を差して土俵中央に寄り返し、互に左四つのまま上手禪を取らせず、一呼吸、行司はヨイヤハツケ、と叫び乍ら両人のまわりを廻っている。

君ヶ浜、機を見て敵の上手禪を取るや左で前禪を引付け右足内掛けの強襲に出れば、八重桜、ばねの強い足によくこらえ、左で君ヶ浜の立禪に近い所を掴んだまま体を引つけ頭

を敵の肩口につけて突然右手で相手の左乳房を掴んで力の限り絞上げた。

この思いがけぬ不意打の逆襲に女の急所を攻められた君ヶ浜、齒を喰いしばつてこらえ乍らこれを振りほどこうとするがダニの様に喰い下つた

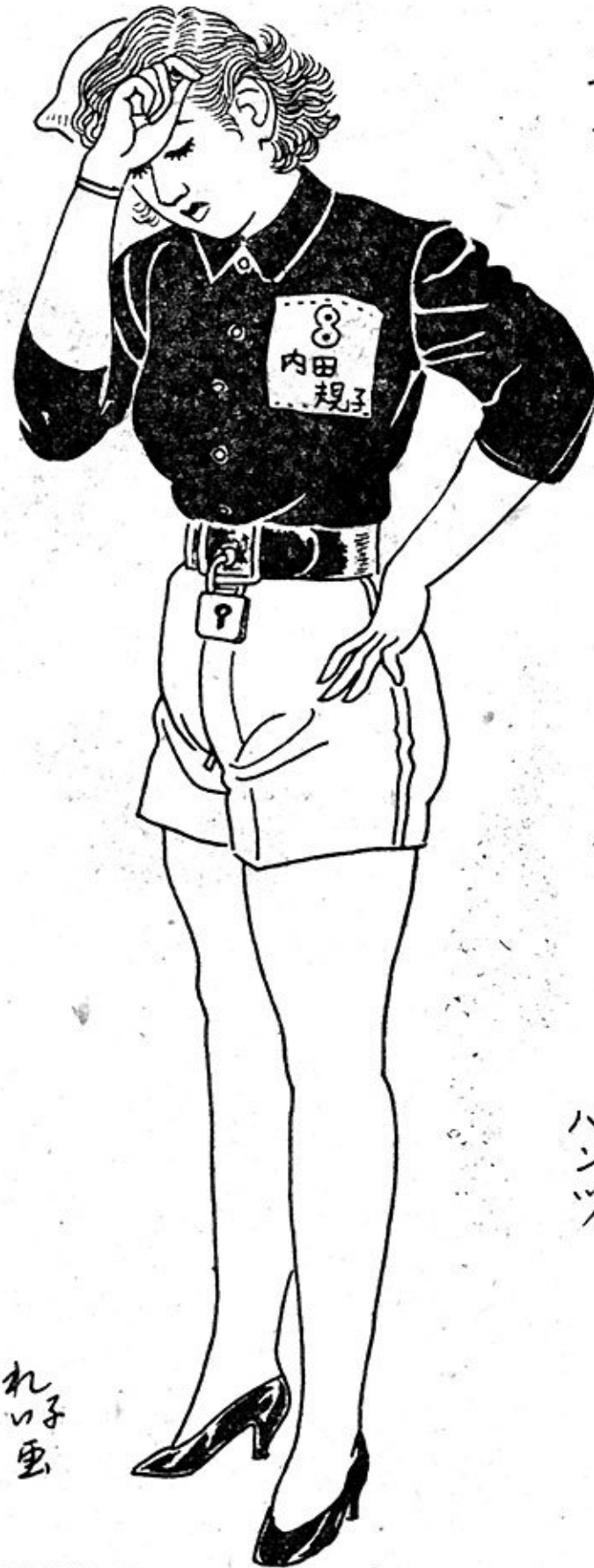
八重桜、益々乳房を握り締め、放さばこそ、子供の二人も生んだことのある君ヶ浜、乳首から乳液がタラタラと流れ出る始末。

乳房の攻め合いは、女相撲では禁じ手という程ではなく、殊に非公開の裸相撲の場合な



ど、センセーショナルな攻め手の一つとして認められている。形勢は逆転して今まで優位にあつたヴェテランの大姐御力士が、年若な美女力士に乳責めの苦しみ会って悶えているということになった。しかし流石はヴェテ

肌着とするには、ざわざわする
真赤なブロードの七分袖のブラウス、庭球用のショート
パンツ



れい子画

バスガールの運命

滝 畑 二 郎

たき・れい子画

今年満二十二才の規子は車掌としての生活を始めるには少し年をとり過ぎているようである。彼女の同期生は皆、高校を卒業したばかりの少女であるし、彼女の生活を大きく支配した教導員の敏子ですら、彼女より一つ年下であった。

朝の車体清掃に始まる一日の激しい見習車掌生活は規子にとって身心共に大きな修練で、寄宿舎に於ても教導員の敏子と同室の彼女には、真の自由の時間を持つことは許されないことであつた。そこへ大失敗をやってしまったのだから、規子自身のウツ積した気持とは別に、少し卑屈になりかけていたのも無理はない。

あのような出来事のあつた数日後、一日の勤務を終った規子が、両親宛の手紙を書いている時だつた。

「規子さん、お家へお便りなさるなら丁度いいわ。不必要な持物をまとめて送り返すからって、書き添えておきなさいね」

「ハイ。お師匠さん、寝巻なんかのことでしようか？」

「エエ、寝巻もそうだけれど、まあ早く書いてしまったら？」

規子は入社当日、極度に制服を羞しがったので、早く慣れるため、という口実のもとに夜も先輩のお古の制服を着せられ、その上からバンドまで締めて寝ることを強制されているので、家から持参した新しい寝巻は全く不要なものになり終っている。

「規子さん、実はねえ、明日から私があなたの専任教導員として指導させてもらうことに決ったのよ。専務さんが、大変あなたをお気に入りにになったのね、特別モデル生として訓練するのですって。あなた、余程見込まれたらしいわよ」

「まあ」

「そこで、まずあなたに必要なことは、気持ちの一新だと思うわ。こうなれば尚更、この間のような間違いを起さないように、清潔な生活をしなくては駄目だと思うの」

「……………」

「これからあなたは特別の訓練生なんだから制服だけじゃなしに、下着も一切、会社から支給されたものを着るのよ」

「……………」

「では、八番練習生内田規子は、現在着用の私服類一切を、ここにある物と取替えなさい。開けてごらんなさい」

示された包みを解き、並べられたものは、ブロード七分袖の真赤なブラウスと、M運動具店製の、多分庭球用にでも作られたものであろうが、共布れバンド付の丈夫そうなジョーットパンツで、いずれも肌着とするには程遠いものであるが、敏子は、これからの激しい訓練には汗が早くひくことが第一条件だ、と考えてこれらを選んだのである。

ブロードのブラウスは、カッターシャツ仕立て、下着として使うには襟が邪魔になる。左胸部に大きな白布をつけ、名札として、八番、内田規子と大きな字で書き込む必要がある。

三枚宛買ってきたブラウス全部の襟を切取り、名札をつけることを規子に命じ、敏子自身は調理室に出かけ、別に用意した革バンドに少し細工を施した。自分のサイズに合わないバンドに誰もがするように、規子のウエス

トを押し測りながら、真赤に灼いた火箸の先で、新しい尾錠穴を三つばかりこしらえて更に全部の穴を焼き拡げて大きくした。

最後に、重要な目的のために、口金から三センチばかりの所に小指大の穿孔をして、この細工を終り部屋に戻った。

「どうやら出来上ったようね。私の方も出来たし、では規子さん、お着替えなさいな」

「えッ、いまだですか？」

「そうよ」

「……………」

「何をぐずぐずしてるんです。あなた、この間私に絶対服従するって誓ったでしょう」

規子の心境は哀れであったが、一種の諦めにも似た気持ちに従って奇妙な下着を取上げた。

ブラウスと、テニスパンツは、肌着としてはかた過ぎたが、規子は我慢しなければならぬと観念した。ジョーットパンツに附属したバンドを締めようとすると、じっと見守っていた敏子の声が遮ぎった。

「バンドはそれじゃないの。これになさい。革の方がきっちりするでしょう？」

無言で規子が、革バンドを締めると、「ついでに、もう一つつけて貰うものがある

の。これはあなたの特別訓練用には是非必要なのよ」

敏子はポケットから小さな南京錠を取り出し、いぶかる規子のバンドに素早く施錠してしまった。錠は、バンド本来の尾錠穴と、新らしく穿けられた小指大の穴を重ね通して、パチリと小さな音をたてた。

「規子さんは、割合におトイレが近いわネ。

これは仕方のないことだけど、バスの車掌は長時間我慢しなければならぬことがあって仕方のないことだ、だけでは済まない場合が度々あるのよ。訓練によってある程度は辛抱できるようになる筈よ。今夜からその訓練に入ります。その錠の鍵は私が預っていて、一昼夜に三度だけ貸すことにします。だから、あなたはその回数を有効にお使いなさい。もしあなたの要求がそれ以上の回数になった場合は、罰として一回につき二十分の特別訓練体操、又は正座をしてもらいますから、そのおつもりで。いいこと？」

規子にとってはまことに苦しい訓練を強いる無情な宣告であった。

真赤なシャツには大きな名札がつけられ、ショートパンツのバンドには鍵がかけられて否応なしに規子は囚人の心境を味あわされる

結果となった。もし仮りに、彼女に「赤札囚」を読ませたとしたら、主人公「咲恵」と、我身の置かれた境遇を比較して複雑な気持ちに陥ったに違いないであろう。

規子の奇妙な服装が出来上ったところで、敏子は彼女に一切の私物衣類を小包にまとめさせ、所持していた若干の小遣いまで自分が預るといい出した。

「あんまりですわ、お師匠さん……」

と、あとは言葉にもならず、半泣き顔で規子は唇をふるわせた。

「あなた車掌志願で入社したのでしょ。この会社はお給料だって凄くいただける代り、勤務も遊びではないのよ。この間の間違いだって、専務さんのお取計らいがなかったら、とつくに懲罰に廻されていた筈よ。私はなにも意地悪でするのじゃない、これが私の辛いお仕事なのよ。どうしても私に従えないのなら今すぐにでも辞職なさったらいわ。そうしたら、私だってこんな嫌な教導員をしなくても済むし、あなたはすぐ自由な元のお嬢さんに還れる訳よ。そりゃあ、あなたに期待しておられる専務さんは、ずい分ガツカリなさるでしょうけどネ」

敏子の厳しい言葉に、彼女は思い直さざる

を得ないのだ。

もし私が、今、会社を辞めて帰ったら、こんな訳で辞めましたと、お母さんにさえ羞しくって話せないし、信二郎さんにはからかわれるのが関の山で、とてもまともに取り上げてもくれまい」

「どう？ 素直にやってみるでしょね？ 私も出来るだけの面倒は見るわ。何といても会社のお勤めは車掌が第一線なんだから、規則は規則、訓練は訓練よ。わかってくれます？ ね、規子さん」

口惜しさで情なさで溢れようとする涙をようやく抑え、こっくりと肯かざるを得ない規子の運命なのだ。

「私が悪うございました。お師匠さん、かんにんして……」

こうして、最悪の危機は規子の全面譲歩によって回避された。この際の規子の態度が、自分の将来の運命に大きな影響を及ぼすことを意識しなければならぬ敏子にとっては、誠に幸運であったというべきで、彼女は内心大いに規子と神に感謝したのだった。

悶々の中に一夜が明けた。起床、洗面に引続いて、規子は忍従の新しい頁を、彼女自身で開かねばならなかった。

「お師匠さん、あのう……」

口に出すのは羞しかった。敏子は微笑しながら鍵を渡してくれた。

朝食を前にしても、これからのことを思っ
て水分を摂るのがはばかられた。食事中にも
バンドの錠が気にかかり、不安が連想を呼ん
で落ち着けないのだ。

もしもこの次の抜打ち検査でクジに当た
らどうしよう。この変な下着の秘密が検査員
に知れる。そして、いずれは皆に知れて、噂
の対象にされるだろう。

いいえ、私は特別訓練生なんだから、お師
匠さんがうまく守って下さるだろう。でも、
万が一、他の人に知れたら……

打ち消そうとしても、又、湧き上ってくる
不安に、規子は生れて初めての味気のない食
事を経験させられた。

実際問題として、二十四時間を通じて三回
しか許されないということは、いくら長距離
を受け持つ車掌といえども考えられないこと
である。

にもかかわらず規子は、実行しなければな

らないのである。それに加えて下着がゴツゴ
ツするのだ。

乗務実習についても人知れぬ苦痛を味わね
ばならなかった。こんなことが、これから先
一カ月も続くのかと思うと、昨夜、悲しい決
意をしたのにもかかわらず、情けなさを通り
越して腹立たしいものがこみ上げてくるのを
禁じ得なかった。

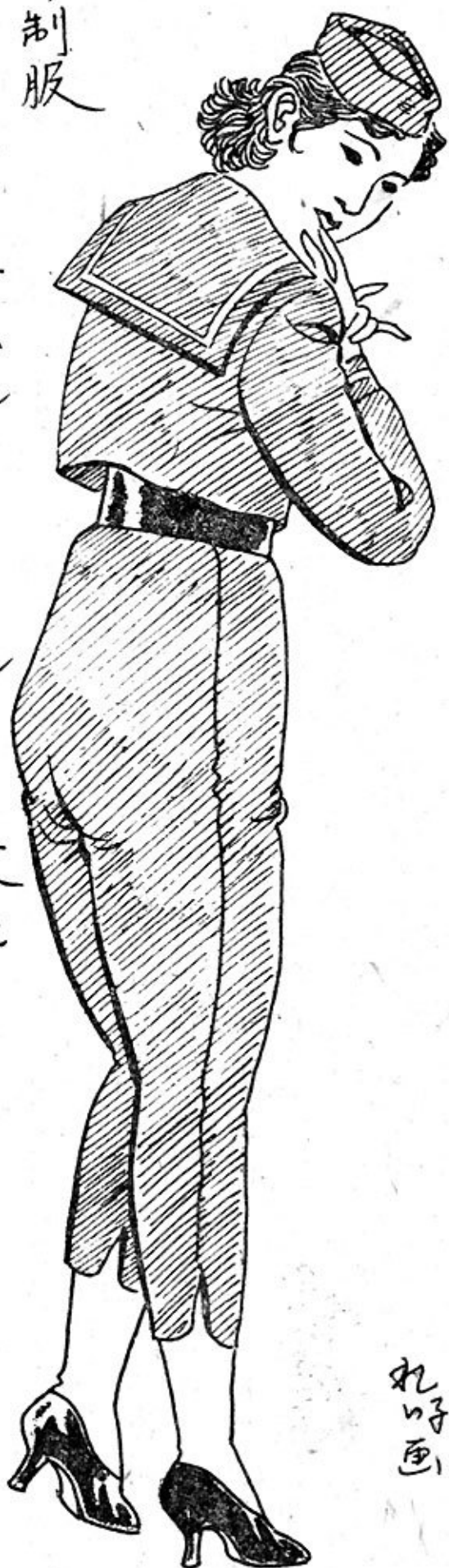
午後は実習を免じられ、代りに、規子は専
務としての信二郎の邸に行くように命じられ
たのだ。勿論、敏子が一緒に付き添ったし、

れ子画

新制服

ネズミ色のセブンスボンとセーラーシャツの組合せ

になる夏服



最寄りの停留
所でバスを降
りるまで、規
子は行先を知
らされなかつ
た。練習用の
制服制帽で靴
をつけ、見
習の腕章ま
で巻いて、婚
約者の家へ連
れて行かれた
彼女の胸中は
察するに余り

あるほど、みじめであつたろう。

その上、彼女が後日の告白談にも表現を避けた、いまわしい下着と錠が、昨夜から重苦しく拘束し続けていたのである。

お小遣いは全部を敏子に預けてしまったので、もう十円の持合せすらなく、いくら差しくても仕組まれたゲームから逃げ出すことは許されなかった。彼女は、昨夜の屈辱を長時間に亘って後悔したことであらう。

モデル見習生と呼ばれた規子は、信二郎の考案になる新制服を着て、カメラの前に立たされることになった。

新制服は試作品として規子に合せて仕立てられたもので、従来の車掌のユニホームと比較して、物凄く変り型のものであった。

ネズミ色のズボン・スタイルの合服上下、七分ズボンとセーラーシャツの組合せになる夏服は、いずれも信二郎の合理主義を表現して、男ものズボンのようにファスナーで開くようになっていて、この一事だけでも、彼女を羞しがらせるに充分の効果を發揮したのだ。合服の上着は、往時の予科練生の制服を思わせる程、丈が極端に短かく、ジャンパー風で、長いキッチリしたズボンと組合せると、大変フレッシュな感じで、水着を着た時

のように、曲線を描き出したし、その上、胸部には会社のマークと並んで「内田規子」と明瞭な金文字で刺繍がされている。

夏服の方は、ネズミ色の七分ズボンに純白セーラーシャツの対で、セーラーシャツは衿から背掛のみがズボンと同色のネズミ色、右腕の袖の位置とズボンの右前に、会社マークとネーム入りという凝ったものである。

セーラ服といえば女学生を連想するのが普通のようであるが、これを着用した規子は、文字通り可愛い女水兵そのものであった。

信二郎の好みを敏感に悟りつつあった敏子は、新制服の着付の際、あれこれと細かいところまで干渉し、不必要にバンドを強く締めさせたし、余興的に、命令して、

「次は〇〇、お降りの方はございませんか」「発車オーライ」などと規子のバスガイド振りを信二郎に披露させるのだった。彼女の気持は、それによって一層みじめにさせられるのだ。

撮影にはかなりの時間を要し、規子の気持は暴走寸前であった。しかし信二郎は別れ際は規子と二人きりになれる時間をつくり、彼女をなぐさめ、はげます言葉を忘れなかった。規子にはこれが大きな救いとなり、

「敏子さんは、私と信二郎さんの間柄をまだ知らされていないのだから仕方ないわ」と、思い直し勇気が湧いてくるのだった。

規子が寄宿舎に帰ると、同僚達が集ってき、将来自分達の制服になるらしい彼女の服装を物珍しがって、眺め廻し、いじくり廻して彼女を困らせるのであった。中でも一人が「でも、これは一寸いやね」

と、いいながらズボンのファスナーを開閉するのには、すっかり閉口した。

夕食を済ませて八時過ぎ、波乱の多かった一日が幕を閉じようとする頃、規子はその日の最後の開錠を申し出て、敏子から思わぬ叱責を受ける始末となった。

「一日に三回の訓練なのよ。今日はこれで四回目だけど、努力が足りないんじゃないかしら？ どうしてもっていうなら仕方ないから鍵はお渡ししますけど、規定の罰はお忘れじゃないでしょうネ」

「だって、お師匠さん……」

規子の心算では、この嫌な訓練を申し渡されたのは昨夜の八時前だから、もう既に二十四時間は経過している計算だったのだ。

だが、「一日は午前零時から始まる」という敏子の強硬な態度には反撥出来なかった。

奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号	(昭和30年10月号)	△売切
復刊第2号	(昭和30年11月号)	△売切
復刊第3号	(昭和31年4月号)	△売切
復刊第4号	(昭和31年5月号)	△売切
復刊第5号	(昭和31年6月号)	△売切
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切
復刊第8号	(昭和31年9月号)	△売切
復刊第9号	(昭和31年10月号)	△売切
復刊第10号	(昭和31年12月号)	△売切
復刊第11号	(昭和32年1月号)	△売切
復刊第12号	(昭和32年2月号)	△売切
復刊第13号	(昭和32年3月号)	△売切
復刊第14号	(昭和32年4月号)	△売切
復刊第15号	(昭和32年6月号)	△売切
復刊第16号	(昭和32年7月号)	△売切
復刊第17号	(昭和32年8月号)	△売切
復刊第18号	(昭和32年9月号)	△売切
復刊第19号	(昭和32年10月号)	△売切

復刊第20号	(昭和32年11月号)	定価二百円
復刊第21号	(昭和32年12月号)	定価二百円
復刊第22号	(昭和33年1月号)	△売切
復刊第23号	(昭和33年2月号)	△売切
復刊第24号	(昭和33年3月号)	定価二百円
復刊第25号	(昭和33年4月号)	定価二百円
復刊第26号	(昭和33年5月号)	定価二百円
復刊第27号	(昭和33年6月号)	定価二百円
復刊第28号	(昭和33年7月号)	定価二百円
復刊第29号	(昭和33年8月号)	△売切
復刊第30号	(昭和33年9月号)	△売切
復刊第31号	(昭和33年10月号)	定価二百円
復刊第32号	(昭和33年11月号)	定価二百円
復刊第33号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第34号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第35号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第36号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第37号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第38号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第39号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第40号	(昭和33年12月号)	定価二百円
復刊第41号	(昭和33年12月号)	定価二百円

復刊第42号	(昭和34年1月号)	三百五十円
復刊第43号	(昭和34年2月号)	定価二百円
復刊第44号	(昭和34年3月号)	定価二百円
復刊第45号	(昭和34年4月号)	定価二百円
復刊第46号	(昭和34年5月号)	定価二百円
復刊第47号	(昭和34年6月号)	定価二百円
復刊第48号	(昭和34年7月号)	定価二百円
復刊第49号	(昭和34年8月号)	定価二百円
復刊第50号	(昭和34年9月号)	定価二百円
復刊第51号	(昭和34年10月号)	定価二百円
復刊第52号	(昭和34年11月号)	定価二百円
復刊第53号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第54号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第55号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第56号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第57号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第58号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第59号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第60号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第61号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第62号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第63号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第64号	(昭和34年12月号)	定価二百円
復刊第65号	(昭和34年12月号)	定価二百円

信二郎邸でのコーヒーや、夕食のおいしい汁碗が、恨めしく思い出されるのだった。

「では、仕方がないから作業衣に着替えて」

「ハイ、でも……」

「でも？ この場合の罰はネ、先に済ますことになってるのよ。さ、早くして。運動場を駆足で七周なさい。鍵はその後です」

日没後の運動場だから誰にも見られる気遣

いはなかったけれど、規子は内外から襲われる苦痛に、例のオーバーオール作業衣がベツトリする程の脂汗を流さねばならなかったのだ。ようやく責めを果して、ひったくるように鍵を受取った時の彼女の頬には、流れ落ちた幾条かの涙の跡が明瞭に認められた。

敏子は、自分のやり過ぎを後悔した。このお返しが、半年先にどんな形で自分に返って

くるかわからないと考えるのは恐しいことであつた。規子が専務夫人となつた時、自分だけではなく、恋人の健一にも憎しみが及ぶのではなからうか……。

こうしている間にも、規子と信二郎の華燭の典は刻々と近づいているのである。

(第三部終)

雑
報
欄

三六二 モールス著高橋義孝他二氏訳『性の世界史』 文化史的風俗史的な論述としては非常によく纏ったものである。第十六章「邪道におちたエロス」の章下に「マゾヒズムの発見」「毛皮と鞭」等の節があり、クラフト・エビングやザッヘル・マゾッホの業績に触れている。著者がマゾヒズムを東洋的と規定し、西欧的な同性愛と対比させているのには、私は同意できないが――。なお、中世の吟遊詩人時代の女性奉仕傾向についての理解も不十分なようだ。し



手帖雑報欄

と

沼正三だより

沼

正 三

(カット・杉原虹児)

かし、こういう不満にもかかわらず、手帖を読まれる方には好参考書として必読をおすすめしておく。たとえば、手帖旧五一項で扱ったポッペア・サビナの名などもあげられている、など。(エラガバルスとすべきを独乙語表記に囚われてエラガバルとしているのが他の人名と不統一な点など、訳者の不用意も見えるが、総じて訳文も良いようである。)

三六三 菊地政男『白い肌と黄色い隊長』、文春誌で発表されたものの単行本。セレベス島マカッサル市外カンピリ抑留所におけるオランダ女性を主とする白人女性と所長の日本人下士官との関係。別にマゾ的なものではないが、ここでは長である日本人が白人女性

の人権を十分に守るべく活躍する。これと、

三六四 ミッチエナー「ハワイ・栄光へのいばらの道」 第三回

(リー・ダイ五月号)に見える、白人隊長に率いられた日系人部隊(二二二部隊)が、救出される米兵の員数よりも多くの戦死者を出してまで米人部隊の救出を強制されたりするのと、比較すると、白人へのコンプレックスを持つ者には多少の刺戟があるう。

三六五 ジョン・H・グリフィン「恥辱への旅券」(文春七月号)

皮膚の色を薬で変え、髪を丸坊主にして、黒人になりすました白人が南部で黒人として白人に接触した体験記。白人から黒人意識を自覚することを強制される悲しい黒人の在り方を抉って出色の文献。

ある白人は、彼に向かってお前の女房は白人と寝るかと訊ねていう「白人の男なら誰でもやっているんだよ。それにおれたちはお前らの子供たちに少々白人の血を分けてやるんだから、黒人に恩恵を施していると考えているんだ。……よく覚えておくがいい。おれたちはお前たち黒人と商売もしてやるし、お前たちの女と一緒に寝てもやる。しかしおれたちに関する限り、お前たちの存在価値はそれでおしまいなんだ。……」(手帖新一七章題辞、雑報二二三・二六二等参照)。

三六六 『サドとマゾの対決』(週刊喫煙室七月六日号) 告白

文学誌「同人衆」所載のマゾヒストの文章——『女から愛してもらうことに、ぼくは胸のときめきをおぼえた。……明子にぼくのからだに馬乗りになった。もがくぼくの手を膝で押えつけて、身動きもさせない。「ゆるしてよ、明ちゃん」……「和夫は強情だね。も」と痛い目が見たいのか……明子のからだは、ぼくの背骨にぐっ

と新しい荷重をかけた。』といった引用、更にキンゼイ報告によると体位においても女が上になり愛撫することが増えたことを紹介する。「戦後ナイロン靴下と共に、急に女性が強く変質するにつれて、虐げられる喜びを求める日本の男性が多くなった。」なお、同誌の別のコラムに「女が上に」と題して——「すっかり夏姿になった清純な制服の女学生、年の頃十六、七と見える乙女たちが四五人、公園のベンチに腰を下して話し合っていた。……やがて一人の少女が感に堪えぬ声をあげた。「まあそうだったの！私、男が上になるのだとばかり思っていたわ」リーダー格の女学生が落着き払って答える。「昔は男が上だったらしいけどサ、今は女が上なのよ」

三六七 『パンティーにされた星条旗』(週刊新潮六月二十七日号) 南太平洋ハイチ島の原住民が放出された星条旗を服や下着の着地にしたというだけで、経済的理由のみ、別に旧五八項の「日の丸ズロース」の話見たいに、復讐的意図はないのだが、それにしてもちょっと面白い。

三六八 画報風俗奇譚第二集『マゾヒスティック絵画館』および『アブノーマル秘画展』と題した画集が充実している。殆んど二番煎じであるが、前者中には現代日本人の描いたマゾ画が数点ある。外に『ズボンをはいた女たち』これはホルトモント著「ズボンの役割」の解説。解説者谷貫太は、森本愛造氏のペンネームかと思われる。

三六九 『サディストとマゾヒストの往復書簡』(風俗奇譚八月号) 同じく谷氏の文。前半はある白人女性を慕った日本人の彼女との往復書簡。手帖旧一〇五項で記したように私もこの種の文通の経験があるので、私には非常に面白かった。後半は日本人同志の文

通。男が人間便所になりたいと望み、それがかなえられていった前後の女の手紙に実感がある。なお、同誌には他に『あたしの悦虐プレイ』などマゾものがあるが、感心しない。資料的には谷氏のもの以外は無視できる。ただ、女による男の責めや男性緊縛を巻頭写真に五頁も入れているのは、奇クに比して羨ましい。

三七〇 女の百科七月増刊 並木徹『ムチ打つ女と打たれて陶醉する男』という文あるも下らない。山下紀一郎描く漫画『イカレテイル男』連作中「岩清水」と題するタブロー、男女二人のピクニック姿、男が岩清水と思って道傍で口をつけて飲んでるのが、実は女のしたあと……

三七一 週刊漫画別冊八月号 扉の塩田英二郎の『ヌーベル・バグ新しい波・乗り』と題する漫画は、水上スキ一の代りに男の身体を使ったもので、ヤプーでこれと同じものを出すつもりであった私には、ショックであった。同誌には他に『マケラレマセン男二八』と題して、小型機やオートバイや射撃などに励む女性の写真がある。この程度のものは近頃とても多いので一々あげていないことをお断りしておく。

三七二 笑の泉八月号 小島信夫『男性よ恐れるな』駄文。扉のアメリカ漫画は、ガールフレンド「夕食におよびした時はあなた料理してね」と題して荷物を山ほど持たされた男がズボンの上にエプロンをしている図。なお、「名犬」と題する人間犬テーマの漫画もあったが、前者に劣る。

三七三 世界裸か美画報八月号 パックリネバートZあそびと題して、池袋フランス座の舞台からの二頭立人間馬に乗る女（馬が男学

生二人、裸女が女学生）の写真がある。いつか奇ク読者通信欄でどなたかが、二頭立人間馬に乗るとは？ といった質問をしておられたが、ちょうどその回答のような写真。（絵なら昔から沢山ある）

三七四 漫画読本八月号 改田昌直のタブロー漫画三枚『矢文』は女武者が男を打ち倒して踏んでいる姿だが、鎧にささっている沢山の矢が皆ラブレター、『ギロチン』の方は、長い鞭を持った調教師風の女性処刑吏がギロチンの傍に立つのに対照して縛り上げられた男の罪人、『妻の座』は、生前夫を尻に敷いていた妻の墓石が夫の墓石を台に敷いて立てられているところ……いずれも男性に対する女性の勝利を描いたもの。

三七五 週刊新潮七月四日号 遠藤周作「好奇心の強い男へ」一回、『Sについて』と題し、サドマゾヒズムについて触れるが、ハンブルグの娼婦に乗馬服装のものがいるとか山王ホテルの使用人が進駐米軍女性に可愛がられたとかいった程度のあっけないもので「月光のドミナ」「女王」作者の文としては低調であった。

三七六 テレビ『光子の窓』六月二十六日 詩人を志す軟弱漢と海軍大將になりたいというナギナタ使いの美少女の三代の関係を軸にしたミュージカルで、群舞の中、ナギナタを持った女群が男達を足許に打ち倒して踏みつける場面や、男の背中に揃って——肩車でもなくおぶさるのでもなく——乗る（男の身体の上に女の上半身が見える位に）場面があった。

三七七 S・F・マガジン誌の創刊 これまで触れるのを忘れていたが、今年二月号から創刊されており、既にいくつか他星人テーマ（そのマゾ的意義については手帖旧八三項参照）のものが出てい

る。ただ、マゾ価の高いものはまだ少ないようである。

沼正三だより

(奇々八月号読後) 「愛犬譚」 「百景」 「記録」 「ファンタジア」 「象の思い出」 「ある女優の乗馬日記について」 「宇宙のどこかで」 ……と色々マゾものがあるようでいて、重量感のあるのは「宇宙…」つまり、どうも物足りない思いをしたのは私だけでしょうか。この頁数は既に休刊前の一時期と同じなので、あの頃の名作を思うと、がっしりした作品がもう一つ位は欲しいものです。

(佐治氏に) 「宇宙のどこかで」は既に七〇〇枚を送稿していらっしやる由。全くこれだけが楽しみという現状だけに嬉しい話です。特殊場面削除は私も経験があり、ヤプー中絶も一つにはそれで氣勢を削がれたせいだったのですが、貴兄は私のような失敗のないよう願います。貴兄考案の特殊錠は、私も黒人に対して制度化しておったのですが、遂に目の目を見ずです。極端な描写をして削られたり、他の文字に変えられ意味不明になったりするより、初めから緩和化した表現によって、筋書だけは維持すること(特殊錠の制度そのものの説明だけは何とか誌上に出したい)をおすすめします。以前私の原稿で、「性愛」を勝手に「人間愛」と直され(性の字の嫌忌)何のことか分らなくなることがあります。むしろ初めから「欲望」とでもしておいた方が意味をよく伝えたいでしょう。こういう私の苦い経験を生かしていただきたいものです。なお、挿絵については二カ月位先の掲載分について、こういう場面のこういう人物をこう

いう風にと、文章または略図であらかじめ注文すれば、画家の方で可及的にそれに合せて書いて呉れる様です(もっとも全裸は禁物らしい)。これもご参考までに。

(八月号口絵の洋画スチール) 「巨人ゴーレム」の下のもの「題名不詳」とありますが。これが本誌上既に度々論ぜられた『無頼の谷』です。春木氏「続映画に見た淡いマゾ」(復2号)、手帖雑報一〇九、馬化白書(人間競馬、マゾ百景二八景、等に出て来ます。ディートリヒ演ずるオルター・キーンの女騎手がこの競馬で一等になるわけです。

(今月の雑報欄) 自分でも下らぬと思う雑誌の名ばかり出て来ます。以前のように単行本の名を比較的多くあげたのと違い、これでは資料的価値は低いでしょうが、この頃では店頭にたまに立ってマゾ漫画のありそうな雑誌を手取るだけなので、こんな有様です。——他にも『腹下死の統計的増加』(腹上死ではない。つまり女上位がこの頃増えているということ)とか『花婿学校』とか『コール・ボーイ』とか「尖った女靴の先にパチンコ玉を入れて足蹴にした時利くようにする女」とかいったメモの項目があるのですが、出典(勿論低級娯楽誌です。)がはっきりしませんので、控えます。しかし、とにかく、この種の雑誌からこの種の記事が拾えるということ自体、手帖初期の頃には考えられなかった「性の難破」的風俗の世相化なのですから、そう見れば、資料としてそれほど無意味ではないかも知れません。



市隷女奴の底

第一章 真夜中の競売

塔婆十郎作

(四馬孝・画)

怪電話

——リリリリリン……

テーブルの電話が、けたたましい勢いで鳴った。

夜食のラーメンをすすっていた妙子が、割り箸を握ったまま受話器をとった。

「はい、はい、こちら現代情報社。ええ、そうです、はい」

口のなかでソバを噛みながら、妙子は元気よく返事する。

電話のむこうは女だった。それも若い声である。ひどくあわてている様子だ。

「なんですって？……ええッ？……もっと、はっきりおっしゃって下さいよ」

妙子は眉をしかめた。割り箸を置いて受話器を握りなおす。

「なにッ？……殺される？……誰が？……ええッ？……あなたが？……」

妙子の背後から、そのとき、利根京介が声をかけた。

「よし、妙子、おれが代ろう」

ぶっそんな電話は、妙子から、京介の手へ受け継がれた。

地

京介は落着いた声で応答した。

「フム、フム……なるほど。いますぐに城東公園だね？……フム、フム、それであんたの名は？……ミドリ？……ミドリさんだね、よし、わかった、すぐいく」

京介は、受話器を置いた。

「なんだい、社長。そのミドリとかいう女性は何？」

またラーメンを口に運びながら、妙子がきいた。

「どこかの盛り場に巣喰う大掛りな売春組織の実態をつかんでいるそうさ。つまり、その秘密組織の全貌を教えるから、いくらかまとまった金をくれというのさ」

京介はこたえた。

「なあんだ。ネタの売り込みかい。殺されるなんて、人騒がせな」

「いや、ただの売り込みでもなさそうさ。おれの想像では、もしかしたらミドリという女は、その組織で働いている女じゃないかな」「なるほど。その魔窟から逃げだしたために、悪漢どもから追われて殺される……という筋書きか……」

妙子はうなずいた。回転のいい頭脳をもった娘だ。

「とにかく、おれはその女に逢ってくる。イタズラかも知れないが、商売になるかも知れんからな。女が指定した場所は城東公園。おい、妙子、留守番はしっかり頼んだぜ」

「あいよ、気をつけてね」

返事をしながら、妙子は残ったラーメンの汁をすすった。そして、若い社長の出勤を、信頼と愛情の瞳で見送る。

ここは、銀座裏の川っぶちにある小さなビルの二階。「現代情報社」の事務所。

事務所といっても、机が二つに電話が一本。社長の利根京介に助手の雪村妙子。これだけしかない。

「現代情報社」と名前はいかめしいが、じつは週刊雑誌にトップ記事売り込む、通称トップ屋なのである。

追われる女

これが城東公園――。

かなり広い公園である。野球場、テニスコート、プール、野外音楽堂と設備もとのついている。

東京の下町、隅田川から東側の地区ではもっとも大きな公園だ。

「――野外音楽堂前のベンチだといったな」

京介はつぶやき、公園の入口から、まっすぐにそこへむかった。夕暮れどきの白いもやが、樹木の間にうっすらとただよっている。淡い青色の街燈があちこちに点きだして、風情を添える。

「いたぞ、あの女にちがいない」

京介は足を早めた。

音楽堂前のベンチ。このあたり照明もすくなく、夕闇に包まれている。人影もない。

女は薄紫色のコートを羽織っていた。髪にはグリーンの水玉模様

のスカーフを巻き、顔を包んでいる。

「——あんたかい、ミドリさんは？」

京介は、つとめて軽い調子で声をかけた。

ハッとして、女は青ざめた顔を京介にむける。瞳は恐怖の色だ。

「あんたから電話をもらった現代情報社の社長は、ぼくだ。というより、トップ屋の利根京介はおれだが……」

京介は、女に気易い笑顔をみせた。彼は自分の笑顔が人なつこいことを知っている。

「ああ……」

ミドリは、やや安堵が生まれた。

「そっちの話がはじまる前に、こっちからききたいことがある。現代情報社の存在を、あんたはどうして知ってるんだい？」

「週刊雑誌の中の『トップ屋が語る裏話』という記事を、あたしこの間、読んだんです。その時に、あなたのお名前と電話番号をひかえておいたんです……」

「それで納得した。よし、話をきこう。内容によっては高く買いますよ。——殺される、なんていつてましたね。そんな危険があるのなら、トップ屋なんかへ相談するよりも、まっさきに警察へいくべきじゃないかな」

「あたし、お金が欲しいんです。この話を警察にもっていても、お金にはならないわ」

「なるほど。じゃ、しゃべりなさい。その暴力団が経営する秘密売春組織の実態というやつを……」

京介は、ミドリと肩を並べて、ベンチに坐った。

ミドリは、コートのポケットから一個の小さい銀色のバッジをと

りだして、京介の手に渡した。

「なんだい、このバッジは？」

京介は、てのひらに受けて、それを見つめた。

銀色の中に、もつれあつた二匹の蛇が彫りこんである。卑猥な想像をよびおこす図柄だった。

裏を返すと、裸の女が両腕で自分の両膝をかかえ、まるくなっている形が浮きでている。見かたによっては、背中に鞭でも喰らっているような、被虐的なポーズだ。

「ふうん？……」

京介は首をひねった。

奇妙なバッジだ。不気味なデザインを彫りこんだ銀製品だ。地質は安物でない。

「これが、宇宙会館の地下室へおるための特別会員証なんです」

ミドリが説明した。

「なんだって、宇宙会館？」

京介がきき返したときだ。

背後に、バラバラッとする人の気配がした。

「見つけたぞ、ちくしろう、ミドリのやつ、こんな所にいやがった！」

三、四人の屈強な男が、京介とミドリの背後に迫ってきた。

「あっ！」

ミドリはふり返って腰を浮かし、小さくさげんだ。顔色がみるまに蒼白になった。

「なんだ、きみたちは！」

京介は、どなった。



「てめえこそ誰だ！」

男の一人が凄んだ。ひと目で堅気ではないと知れる風態だ。

「ミドリ、世話をかけずに、おとなしく帰るんだ！」

べつの男が、ミドリの片腕をつかんだ。がむしやらにズルズルとひきずった。

「いやッ、いやッ」

ミドリは足を踏んばって抵抗した。

そのミドリの頬に、ピシッ、ピシッとはげしい平手打ちが鳴った。

「なにするんだ、乱暴はやめろ！」

京介は、男にとびかかった。いきなり男をなぐりとばした。

「この野郎、味なマネをしやがる！」

京介の背中に、固いものがピタリと押しつけられた。拳銃だ。銃口だった。

「うッ」

と、京介の咽喉が鳴った。拳銃の台尻が京介の後頭部に、ガツンッと打ちおろされたのだ。

京介はくずれ折れ、ベンチの下にあっけなく昏倒した。

京介が意識をとりもどし、地面から顔をあげたのは、それから十五分ほど後のことだった。

むろん、ミドリの姿も、あの怪しい男ももういない。京介はフラフラしながら立ちあがった。なぐられた後頭部が痛い。手をあてると、血がにじんでいた。

——くそッ、やられたな……

京介は、自分の敗北を認めた。こんな公園のベンチで、ミドリから話をきこうとしたのが、まず軽率だった。

——どうやら、あの女が告白しようとした暴力売春団というのは、嘘じゃないらしいな……

京介は、握ったままの右の拳を、そっとひらいた。

れいのバツジが、汗をかいている。背中をまるめた裸女が、肌を光らせていた。

——こいつがおれの手に残っている以上、おれはまだやつらに敗北したわけではない……ようし……

京介は不敵な微笑をうかべ、唇を噛んで一人うなずいた。

ブン屋くずれのトップ屋だが——いや、トップ屋だからこそ、この飛びこんできたネタに対して、異常なまでの闘争心が湧きあがってくるのだ。

宇宙会館

ミドリが口走った宇宙会館というのは、城東楽天地の中にあった。鉄筋コンクリート六階建ての豪華な温泉ビルだ。

この宇宙会館の白いビルを囲んで、バー、キヤバレー映画館、ロード劇場、パチンコ屋などの娯楽施設が建ち並び、城東楽天地という、どぎつい色彩の歓楽街を形成していた。人もよく集まり、繁昌している。

この地帯のきらびやかな看板、装飾、ネオンの蔭に、悪の根が蜘蛛の巣のように張りめぐらされていることも、当然、想像できるの

だ。

「——たしか、宇宙会館の地下だといったけな……」

京介は、温泉ビルの前に立ちどまってつぶやいた。

時刻は、すでに夜十時半。

今夜の京介は、用心のために色のついたメガネをかけている。昨夕、城東公園で京介とミドリに襲いかかった男たちに、もし顔でも見覚えられてはまずいからだ。

「おかしいな。地下一階は大衆大浴場となっている……」

京介は案内板をみつめた。

大浴場の中で秘密売春？……たしかにおかしい。

京介は、とにかくその大浴場において様子をみることにした。と——。

トップ屋の鋭いカンが、入浴券売り場のボックスの背後に、小さな階段があるのを見つけた。

地下一階から、なおも下へおりる階段だ。つまり、地下二階へおりる階段である。

——ここだな？……

京介は、すばやくその細い入り口に踏みこんだ。

「もしもし……」

すぐに横手から声がかかった。

白い制服を着たボーイが、底光りのする眼を、京介にむけている。

「失礼ですが、どちらへ？……この下は、当会館の事務室及び従業員の控え室になっているのでございますが……」

ボーイは光る眼のままでいった。

京介は、だまって背広の襟をかえした。

ボーイの眼が、そこに吸いついた。

襟の蔭には、れいのバッジがはめこまれてある。特別会員の身分を保証する、蛇と裸女のバッジだ。

と——それを見たボーイの表情が、きゆうに柔和になった。

「これは失礼申しあげました。いらっしやいませ」

低い声で、ささやくようにいった。

そして、京介を案内するそぶりで、自分から先にその細い階段をおりていく。

京介は、それとなく周囲に眼を配りながら、ボーイの後からついておりる。

階段の突き当たりに、廊下があった。左へ曲がる。右手に部屋があり、ドアがついていた。

ボーイが、そのドアをあけ、京介に、

「どうぞ……」

と、会釈した。

京介はうなずき、案内された部屋に、足を踏み入れた。

広い部屋だった。従業員の控え室どころではない。金のかかった豪華な洋室だ。

ナイト・クラブのホールに似ていた。正面には小さなステージがあり、その前にビロウド張りのソファとテーブルがずらりと並んでいる。

そのソファには、すでに特別会員という名の客が、三十名ほども腰をおろしていた。

みるからに重役タイプ、社長タイプの紳士が多い。ある紳士はキヨロキヨロと視線をうごかして落着かず、ある紳士はこの秘密の雰

囲気を楽しむ表情で、テーブルにだされたビールを、静かに味わっている。

低い天井には、タバコの紫煙がわだかまっていた。

京介も、テーブルの一つに腰を据えた。ボーイがすぐにビールとチーズを運んできた。サービスがいい。

——これから、いったい、何がはじまるんだ？……

コップにつがれたビールに、遠慮なく口をつけながら、京介の胸にムラムラと好奇心が湧きあがってくる。

やがて、低いブザーの音が、このホールにひびき渡った。

うすいピンク色の照明が、徐々に暗くなっていく。

ステージに垂れているカーテンが、音もなく左右にひらき、そこだけにバラ色の明かるいスポット・ライトがそそがれた。

数人の客が、パチパチと拍手した。

ステージに黒いマスクをした男が登場したのだ。タキシードを着ている。

男は、客席にむかって、馬鹿ていねいな一礼をした。唇をなめた。そして、しゃべりはじめた。

「——今夕はみなさま、ご多忙中のところをよくおいで下さいました。まことにありがたうお礼申しあげます。さてこれから、みなさまを今は昔、遠くペルシャの国にご案内し、かの国の奴隷市における王侯貴族の気分を、満喫して頂こうと存じます。ほかのクラブでは絶対に味わうことのできないこの変わった豪華な雰囲気、どうぞ思いのままにお楽しみ下さいませ……」

もったいぶった、大げさな口上だった。

その男がまた一礼して退場すると、このホールいっぱい、ドラ

が鳴りはじめた。

ドラの音が弱まると、つぎに中近東の砂漠地方を思わせるエキゾチックな音楽が、静かにひびきはじめた。夢想的に、しかも享樂な曲だ。

ハイ・ファイなので、音質が美しい。そしてステージの照明が、次第に暗くなっていった。

——なるほど、これだけでもうっとりして浮き世ばなれした気分誘いにまわれるに……

京介はこの演出に、ちよつと感心した。

アラビヤ調の音楽は、低く耳やわからかに鳴りひびき、ことさらに異国情趣を盛りあげるようである。

京介もほかの特別会員たちも息をのんでステージを見つめている。凝視の中にするするとスクリーンがおり、そこに砂漠や、丸い塔の建築物や、ペルシヤの市場風景のカラーズライドが映しだされる。

最初からある程度の想像はついていたが、京介も思わず膝をのり



だしてこの雰囲気呑まれた。ビールの酔いも手伝っていた。

奴 隷 商 人

やがて、旋律にのって、一人の女がステージに登場した。

いや、登場したというよりも、これは曳きだされたのである。

よろめきながら現われたのだ。

その女に、ふたたびバラ色の眼もさめるようなスポットがあてられた。

女は素肌の上に、透きとおったナイロンの薄衣を一枚まとい、服というよりは、布片をぐるりと裸身に巻きつけただけであつた。

そして、肩からむき出た左右の白い腕は、長い縄で、背中にきびしく縛りあげられていたのである。

——なるほど、売りにだされる女奴隷という趣向か！……

京介はうなつた。

ほかの会員たちの間からも、ホホウとか、ウームという感嘆のよきな吐息が湧きおこる。

色彩は美しいが、むごたらしい空気がステージの上に流れた。

女の手首は、背中にたかだかと吊られるようにくぐられ、胸にかかった縄は、縄目も見えないほど、乳房の肉に喰いこんでいる。

と——縛りあげた女の、その長い縄尻を握って、また一人の男が登場した。

この男は、昔の中近東における奴隷商人の衣裳をつけているのだ。

頭に青いターバンを巻き、だぶだぶの黄色いブラウスに、赤い縞のズボン、さらには茶色の頬ひげまでつけ足した男だ。しかも、右手には、長い皮鞭を握っている。

現われた奴隷商人は、その皮鞭で、ステージの床を、ぴしりッと叩いた。陰惨な音だった。

半裸の女は、ピクリッと全身をふるわせ、おびえた瞳をした。

奴隷商人は片手に握った女の縄尻を、ぐいッと引張った。

「さあさあ、お客さま方。いい値をつけてくれた方に、この女売るよ。さあ、遠慮なく声をかけて下さいな、さあ、いくらいくら」

皮鞭も女を縛った縄の強さも本物だが、この奴隷商人は芝居じみた身ぶり手ぶりで、大声でわめいた。ヘラヘラ笑いながら、客席を見渡した。

「——五千円」

腹のつきで紳士が、客席から遠慮がちに値をつけた。

「五千円？……てへッ、ごじようだんおっしゃっては困りますよ。

これ、この女をよく見て下さい。顔だって身体だって、このとおりの上玉ですぜ」

奴隷商人は、嘲侮のような笑をみせ、大げさに首を横にふった。

そして、皮鞭の先で、女の薄衣をこじり剥いだ。

背をまるめ、逃げようとする女の縄尻を引き戻し、ビリビリと剥ぎとるのだ。むっちりとおくらんだ乳房が、客たちの前にさらけだされた。

乳房の上下には、二筋ずつの縄が喰いこんでいる。肉のなかにもぐりこんでいるような縄の強烈さである。ゆたかな乳房が、よけいに巨大に盛りあがっているのだった。

その柔らかな球体の頂点にある、うす紅色の乳首までが、苦痛のためか、羞恥のためにか、大きくふくらんでいた。

「ああッ……」

奴隷の女は、うめき声をあげて身を前にかがめた。さらけだされた乳房を、紳士たちの視線から隠そうとする努力だった。

だが、奴隷商人はそれをさせなかった。

唇をねじまげ、醜悪な顔で皮鞭をふりかぶった。

「これッ、胸をまっすぐにのばして、お前の身体をもっとよくお客さま方に見て頂くん、それッ！」

その叱咤と同時に、奴隷商人の腕は高くふりあがり、皮鞭が女の肩に、ピシリッと打ちおろされたのである。

「ひえッ」

女はのけぞった。胸がそりかえった。二つの乳房がプリプリとゆれた。

言葉にならない声をあげて、客席がどよめいた。

「もう一つだ、それッ」

奴隷商人はわめき、またピシリッと女の背を打った。芝居でもトリックでもない鞭だ。

残酷な音だった。うそ寒く陰惨な空気がこのホールにたちこめた。

背にも肩にも、まだわずかに薄衣がまつわっているが、はげしい皮鞭の痕は、女の素肌に、むごたらしくしみついたことだろう。

——くそッ、ひどいことを！……

京介は、思わずビールのコップを握りしめていた。が、まさか大声で「やめろ！」と怒鳴るわけにもいかない。黙って傍観しているだけだ。

ほかの紳士たちは、喰いつくような眼で、鞭打たれ、縄尻を引かれてもがくステージの女を凝視している。

その熱っぽい眼、眼、眼……。

ギラギラと好色に光る眼、眼、眼……。

光っているのは、眼だけではなかった。ある肥えた老紳士は、そ

の唇までも光らせていた。にぶい色の涎で……。

奴隷商人に髪をつかまれ、むりやりに客席にむけられた奴隷女の容貌は、若々しい丸顔で美しい。おそらく、まだ二十を一つか二つ越えた年頃ではないだろうか。

「さあ、いくら、いくら！……どしどし声をかけて下さいよッ」

奴隷商人は、鞭で床を叩きながら、威勢のよい声を張りあげるのだ。

女 の 競 り 市

「——七千円！」

立派な口ひげを生やした紳士が、うわずった声をあげた。

「まだまだ、七千円じゃ安い！」

奴隷商人は、ニヤニヤ笑いながら首を横にふった。

そして鞭の先を器用に使って、こんどは女の裾を、ヒョイとまくりあげた。

「あれッ、ああ！……」

女は身をくねらせた。

ゆたかに肉づいた二本の脚が、みじめにもさらされる。まっ白にむきでた太腿なのだ。

それを恥しげによりり合わせ、歯を喰いしばって身悶える女奴隷の姿……。演技も誇張も感じられない。真の苦痛に泣く哀れな女体だった。だからこそ、客の興奮も熱っぽくたかまるのだ。

「——八千円！」

ステージにもっとも近い席にいた客が、あえぐように声をかけた。

「八千円、八千円、ほかにどなたか値をつけるお方はございませんか。もしなければ、この美しい女奴隷は、八千円でこのお客さまの持ち物になりますよ！」

奴隷商人が客席をひと渡り見まわしてさげんだ。

返事はどこからもなかった。

ひそかな吐息と嘆声ホールの中にざわざわと波うった。

その若い女は、結局、八千円で買い落とされた。

——なるほど。つまりこれは、新手の高級秘密売春というわけだな……

京介は啞然として、胸の中でつぶやいた。

赤線の灯は消えても、売春の実態は消滅しない。

それらの女たちの多くは貧乏だった。無知だった。

貧乏と無知と、女に喰いついてはなれないダニのようなやくざと、それから、そのような女を漁る好色紳士どもが存在しているかぎり、この悲惨な現実はずつと。

しかし、白線もコールガール組織も、近頃ではあまり珍らしくなくなつた。富有な好色家たちは、また刺激に飢えはじめたのだ。

その要求に応じた悪徳業者たちは、ここに奇怪な「女奴隷市」を案出した。

女たちに全裸すれすれの衣裳を着せ、両手を縄で縛りあげて鞭で追い、ステージに立たせる。

嗜虐と好色の競り市にかけるのだ。

容赦もなく乳房にかかる縄、うしろ手にぎっちりとかくくりあげられた両腕。その無抵抗の肩に背に、ピシピシと打ちおろされる非情な皮鞭。

その苦痛と屈辱にあえぐ半裸の姿態を、むさぼるように、なめるように見つめる紳士たちの視線。

——こいつはまったくひでえ競り市だ。女の競売だ。まるで地獄だ……

京介は、またうなった。腹の底から憤怒が湧いてくる。

ミドリの言葉は、やっぱり嘘ではなかったのだ。これでは、ミドリが命をかけても脱出を計るはずだ。

そのミドリは、いまだどこにいろのだろう。このビルの内部に監禁されていることだけは確かだ。

「——はいはい、さあさあ、どうぞ、この縄尻をお受け取り下さい」ステージでは奴隷商人が愛想のよい声を張りあげている。

最初の女を競り落とした客が、その縄尻を受け取った。さすがに紳士だ。いたわるように女を抱きとめ、すぐに女の縄を解こうとする。

それを奴隷商人があわてて押しとどめた。

「ああ、もしもし。ここでこの女の縄を解いてはいけません。あちらに用意してある、あなた様のお部屋まで、その縄つきのままで引きたてていき、それからご存分に料理下さい。えへへ……。縛ったままで、いろいろとお仕置きを加えるのも、またご一興でございますよ。いえ、ちよつとでも反抗したり、いやな顔を見せたら、お部屋に備えつけの鞭で、ご遠慮なく叩いてやって下さい。煮て喰おうと、焼いて喰おうと、あなた様のお心次第。とにかくあなた様がお買いになられた女奴隷でございますからな。えへへ……」

奴隷商人は卑しげな声をあげて笑った。
つづいて二人目、三人目の女がステージにひき出され、競りに

かけられた。

女を求める客は、三十人も集まっているのだ。ということは、この温泉ビルの地階には、すくなくとも三十人の哀れな女奴隷が幽閉されているわけである。

奴隷商人は調子にのってますます声を張りあげ、額から汗を流しながら、馴れた手さばきで女を売りさばいた。

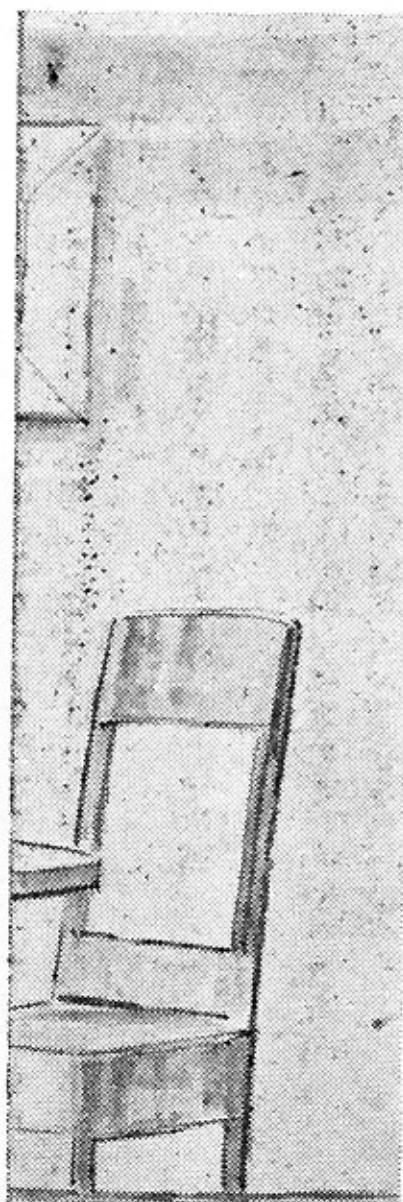
さすがに、金持ちの紳士客を相手にするだけあって、女たちの容貌も身体も、すべてかなりの水準を越えた美しさである。よくもこれだけ揃えたと思うほどだ。

若く美しいだけに、自由をいましめられた肉体の痛々しさは、見る者の胸に異常な迫力を与える。

鎖に縛りあげられてひきだされた裸女もいた。

足首にまで鉄鎖につながれた女もいた。ステージの床に、その鎖がジャラジャラと金属性の音をひびかせて鳴ると、このホールの妖しい雰囲気は、ますます凄惨なものになっていった。

中には、ごていねいにも白布で猿ぐつわを噛まされた女まで出てきた。



しかし、これは悪評だった。

「顔がよく見えないぞ。猿ぐつわなんかとってしまえ！」

と、紳士らしくもない、乱暴な口論でどなられると、奴隷商人もあわてて女の口から白布をはずした。

それぞれの自分の好みの女を競り落とした客は、縄尻をつかんで、このホールから一人ずつ、いや女奴隷と二人ずつ消えていく。

女の縄尻をつかんだ瞬間から、その女は翌朝まで確実に自分の所有物となるのだ。

その完全支配の魅力に、紳士たちは陶然と酔い痴れる。

あくまでも美貌をのぞんだ品のいい瘦身の紳士。

顔の出来よりも、実質的な肉体のポリウムに値をつける客など、各自の狙いに合わせて、八千円、九千円、中には一万円、二万円の高値を競った美女も出現した。

やがて——客のあらかたが、女奴隷とともに、別室に姿を消した。ホールに残ったのは、京介をふくめて三、四人になった。夜も更けてきている。

商売熱心な奴隷商人も、さすがに疲れたらしい。

これも残りすくなくなったらしい五、六人の女を、数珠つなぎにしてひとまとめにステージへ立たせた。

そして、残っている客にむかって、大負けに負けておくから、よりどりみどり、どれでも勝手に連れていってくれ、云った。

投げ売りだった。

京介はその中から、まだ十七、八才ともみえる、可愛らしい娘を選んだ。

「どうぞ、こちらへ——」



ボーイに案内されて、京介はその少女の縄尻を握ったまま、ホールを出た。

淡い照明の廊下を、二度ばかり曲がったところにあるベッド・ルームに、京介と少女は落着いた。廊下の左右には、数多くの小部屋があるらしかった。その室内には、もう女隷の呻吟がはじまっていることだろう。

この底深い地下室は、現代のハレムだ。東京の地底にある、陰惨で官能的な女体の宮殿だ。

——これは悪夢ではないのか……
と、京介は自分の意識を疑った。

脱出計画

案内されてきたベッド・ルームは、都会のどこにでもある連れ込みホテルの洋室だと思えばいい。ちやうどそんな装飾と調度の部屋だ。変っているのは、枕もとに皮鞭が置いてあることだった。

京介は、まずその少女に名前をきいた。

少女は弱々しい声で「美加」とこたえた。

京介は美加の縄を解いてやった。その縄目はひどく固く、なかなか結び目がゆるまなかった。

「ちくしよう、こんなに強く縛りやがって、なんて野郎どもなんだ！」

京介の腹の底は、煮えくり返っていた。

腕が自由になった美加は、ふうッと重い吐息をした。

乳房に左右の腕に手首に、縄目がアザになって紫色にしみついて

いる。

さぞ、つらかったにちがいない。

「ありがとう、おにいさん」

解放された礼をいうと、美加は倒れるようにベッドに身を投げだした。白い背中が荒い息をみせている。

「きみたちは、毎晩こんな商売をやっているのか。鞭でなぐられておもしろいのか！」

京介は、憤怒をみせていった。

「おもしろくてやってるんじゃないわ。仕方がなくやってるのよ。やらされてるのよ」

美加は、京介に背中をむけたまま、拗ねたようにいった。

「やらされている？」

「そうよ。あいつらのいうことをきかないと殺されるからね。死ぬのはいやだ」

「逃げればいい」

「アハハハ！……」

美加は、ヒステリックな声をあげ、泣きだすように笑った。

「逃げられやしないわ。わたしたちは、昼も夜もこの地下室に閉じこめられているのよ。厳重な監視つきでね。あたしたちは本当に奴隸なのよ」

「いままでに誰も逃げないのか？」

「逃げようと努力した人はいたわ。だけど、成功しないでみんな途中で捕まった。捕まったらひどいの。凄いリンチを受けなければならぬわ。半殺しよ。それがおそろしくて、ここ当分の間は誰もここから逃げようとはしない……」

美加は、ベッドに胸を伏せたまま、うつろな声でいった。

「ミドリという女が、きのう逃げたはずだ」

京介は、ささやくようにきいた。美加は、ギクリットとして、京介にふりむいた。

「あんたが、どうしてそれを知ってるの！」

京介は、無言のまま、意味ありげな微笑をみせた。

「あんた、警察の人？」

ミドリは、おそろおそろきいた。

「ちがう」

「じゃ、ブン屋さん？」

「まあ、そんなところだ」

「あんたがブン屋だということが、このボスに知れたら、あんたは殺されてしまうよ。ボスは警察とブン屋が大嫌いなんだ」

京介は、美加のその警告にはこたえなかった。

「ミドリは、いったんはうまくここを逃げだったが、城東公園の中で、また捕まってしまったんだ。いまミドリがどこに監禁されているか、きみは知らないか？」

「知ってる……」

美加は顔を硬くしてうなずいた。

「どこにいる？」

「この地下のはずれに、凄いリンチ部屋があるの。ミドリさんは、きつとそこに押し込められているわ」

「そうか……」

京介はうなずいた。ミドリの悲鳴が遠くからきこえるような気がした。だが、いますぐにあの女を救いに行くことは無謀だ。ここは

敵地の真只中なのだ。

京介は、あせる心を落着けて、美加の過去をききはじめた。

最初は語りたがらなかったが、京介の熱心さと誠意が通じて、美加はボツボツとしやべりはじめた。

おどろいたことに、美加はまだ高校三年の女学生だった。父親はかなりの実業家で、夜を家庭の外で過ごすことが多く、母親には若い愛人がいた。

美加は両親の生活に反抗して、ぐれた。

不良少女の仲間に入り、小遣い銭に不自由しないところから、いい顔になった。

それがやがて両親にみつかり、叱られ、喧嘩して家をとびだしてしまえば、器量もよく身体も大きい美加に男どもが群らがり、やぐざのヒモがつくのは、当然ともいえた。

気がついた時には、そのヒモのために、この秘密組織に売られていたというわけであった。

「——ここにいるほかの女の人も、みんなあたしと似たり寄つたりの過去なの。いくら家から捜査願いがだされても、こんな地の底みたいな所まで、警察の眼が届かないわ。東京は広いし、街も複雑だし……。誰が温泉ビルの地階の、もう一つ地下で女奴隷の競り市がひらかれているなんて気がつくものか」

美加は吐きすてるようにいうと、またベッドの上に突ッ伏した。

そして、かすかに鳴咽をはじめたのだ。身体は大きく成熟していても、その動作にはまだ少女らしいあどけなさがあった。

京介は、胸をしめつけられる思いだった。

「まだあきらめるには早い。すくなくとも、この悪の実態を知り、

きみらの味方になろうと思っている人間が一人はいるぜ。つまり、おれは、おれは、おれのペンでこの魔窟をかならず世間にあばいてやる。——きみだってまだ若いんじゃないか。ヤケになったり、希望を失うのは早いぜ。とにかく、ここを逃げだすんだ。ここから一歩外へとびだして警察へとびこめば、奴隷の生活から這いあがれるんじゃないか」

京介の説得に熱がこもった。

商売気をはなれ、京介はなおも、じゅんじゅんと美加に説いてきかせた。

俯伏せになってきいていた美加の眼に、やがて光りがともった。かすかな勇気の光りだった。

美加はまだ十代の少女だ。一時は自暴自棄におちこんでも、その決意さえあれば、這いあがることもできる。ズベ公の仲間に入らなければ、まだ前途の希望に満ちた明るい年令なのだ。

美加は顔をあげた。まろい、利口そうな瞳だった。

「逃げられるだろうか……逃げたいなあ……家へ帰りたいなあ……」

美加はうめくような切実な声をあげた。布団に手の指の爪をたて、身を揉むようにしてかきむしった。まろい頬が涙で濡れていた。

「逃げられるさ。おれが力を貸してやる！」

京介は力強くいった。

美加の肩に手をかけ、はげますようにゆすった。

——この地下の牢獄にあえぐ哀れな女たちを、おれはかならず救ってやる！……

京介は決心した。

ブン屋くずれのトップ屋にも、正義感はある。商売をはなれて、京介はこのときふと英雄の気持になった。

「そこでだ、監視の網をくぐって、ここから脱出するには……」

京介と美加は、脱出の相談をはじめた。

京介は腕時計をみた。

0時半である。あと三十分の間に、銀座の事務所で待っている妙

子に、今夜の成果の連絡をしなければならぬ。

だが――。

この温泉ビルに、秘密の高級売春組織を営むやくざどもは、京介が考えるよりも、一枚うわ手であった。

京介と美加がとりわした会話は、そのままそっくり、彼らに盗み聞きされていたのである。

『奴隷娘、悲しき十六才』

(黒奴被虐の一コマ)

赤 沢 英 生

広大な綿畠の中をヘンリーを乗せた駿馬は一直線に疾走していた。主人ヘンリーに続く奴隷監督二人の馬は心死にその後に従っていた。あちこちでは黒人奴隷達が強制労働させられていた。その奴隷労働の利益によってヘンリーは年に一度パリに豪遊し

ていた。今もその豪遊から帰ったばかりで自分の所有する農場を見廻っているのである。アメリカ南部の明るい太陽は広大な綿畠に照り映え、ヘンリーは満足だった。疾走する馬にまたがり綿の葉の香りをかきながらヘンリーは、パリで遊んだ数々の白人女性の姿を思

大きな組織をもって都会の真只中で堂々と高級売春経営をいとなむからには、この地下室を設備するときから、それだけの手だてが行われていた。女たちの個室は勿論のこと、客の控え室に至るまで、精巧な盗聴装置が蜘蛛の巣のように縦横に張りめぐらされていた。囁やきも溜息さえもが敏感にキャッチされる、この装置によって、今までに幾多の逃亡やそれらの企てが未然に発覚したことだらう。

この部屋の壁には、感度のよい隠しマイクがとりつけられてあり、京介と美加の計画は同じくこの地階の一隅にある監視室へ、一言半句も洩らさずに送られていたのであった……。

(次号は「第二章」処刑の密室)

い浮べていた。

ふと、第五地区の入口にさしかかった時そこには忘れていたのであるう、三人の黒人娘が黒人監督から半裸にされて木に吊るされようとしている処であった。こんな風景は農場のいたる所に見られるもので、今にも黒人娘達はきびしい鞭打を受ける所なのであった。しかし、ヘンリーにはこれは、これは久しぶりの風景であり、新鮮な印象を与えた。その中にひととき長身の混血美人がいた。「ストップ！」とヘンリーは叫んだ。黒人監督は地に平伏した。「その背の高い娘は何という名か？」

黒人監督は

「ビッグ・ピティでございます、御主人様」とインギンに答えた。

「処女か？」

「さようでございます、御主人様」

「その娘を後の馬に積んで、わしの部屋へ連れてこい！ よく洗濯してな！」

黒人女は体臭がくさいので、白人達は自分の身近かへ連れて来させる時は身体を洗わせるのが常であった。その日、ヘンリーは夕方迄農場を駆けめぐっていた。

夕食前にウイスキーを少々飲み、ヘンリーは上機嫌で食卓についた。ヘンリーはこの年になる迄独身であった。この農場の女は皆自分の妾——否女の道具に過ぎなかった。白人女はパリで充分だった。美しい黒人の妾たちは、さかんに媚を帯びた眼をヘンリーに向けたが、彼はこの誰にもウインクしなかった。彼は一人で自分の部屋へ行った。妾達から失望のためいきが起った。

ヘンリーが部屋へ、鍵を掛け、灯をとると、そこには先ほどの黒人娘が皮鎖で縛られたまま荷物のように置いてあった。彼は足枷をはずすと「立て！」と云った。

「はい、御主人様」豊かな乳房はヘンリーの眼の前であった。

「検査をする」

「はい、御主人様」

口の中、歯、耳、鼻の孔、毛、乳房と次々に検べられた。腰をおおうホームスパンは鉄で切られた。椅子へ乗せられ、黒人娘の長い美しい脚は高々と掲げられた。かすかに生えているスネ毛は二、三本指で抜かれた。「あー、うー」黒人娘はうめいた。

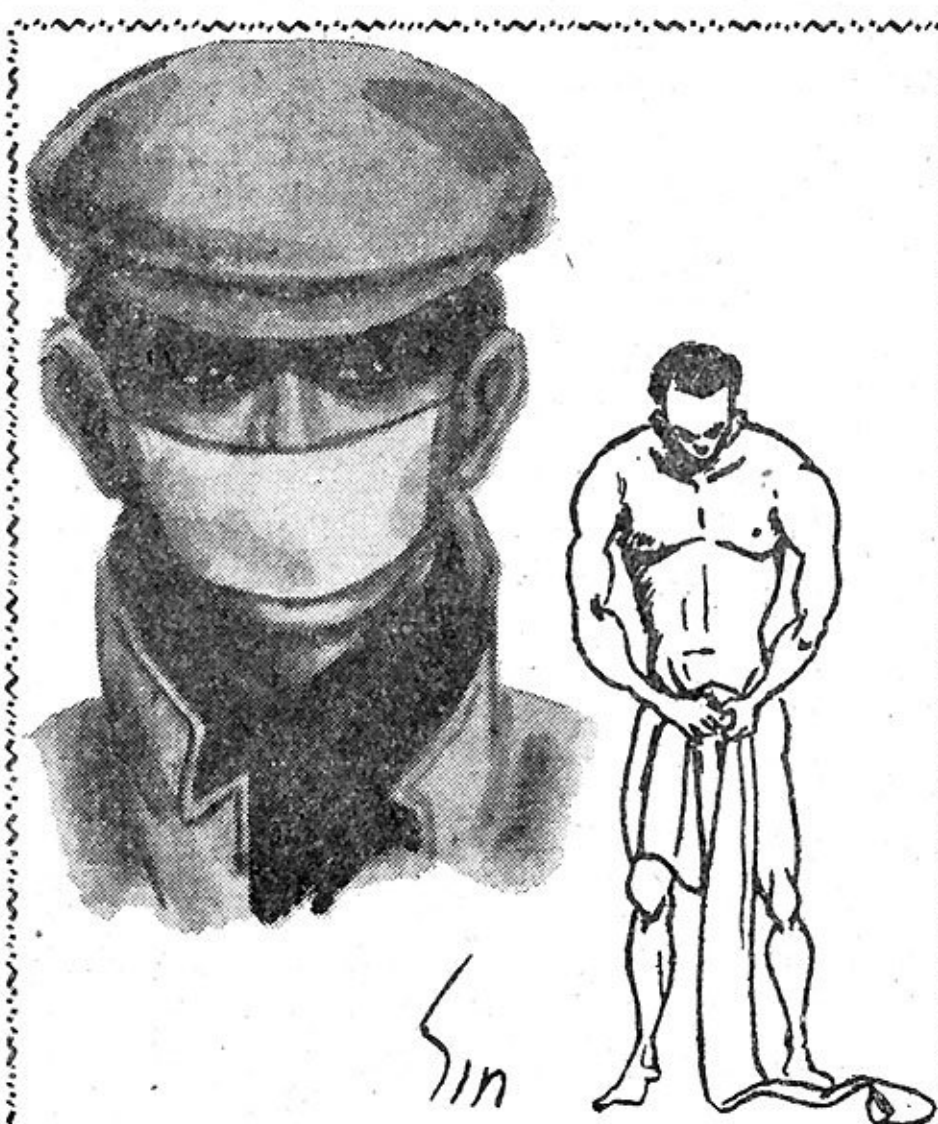
「ああー、うー、むー、むー、ひい、ひい」皮の首輪はヘンリーに持たれ、手枷足枷をはめられた犬のように、這いつくばってビッグ・ピティは尻を鞭打たれるのである。ヘンリーの皮靴が時々足げにする。白人が黒人を奴隷としていた社会で、白人が怠けた黒人娘（たとえ混血の美人でも）を罰するのは正当なのである。白人は黒人を対価をもって購入し、所有した以上、その対価をぎりぎり迄取り戻さなければならぬ。「ああー、うー」黒人娘を苛めるなど、ちょっとした楽しみに過ぎない。遂に今度は牛鞭が登場した。黒人娘ビッグ・ピティのうめきは益々大きくなり、黒い大きな眼からは涙があふれてきた。白人ヘンリーも少々汗ばんできた。ヘンリーは靴を脱ぐと、足底腺の汗のしみこんだ靴下をビッグ・ピティの口の中へ入れた。ビッグ・ピティは抵抗したが、手足を縛られているので遂にその白い歯で、ヘンリーの靴下をのみかんだ。ビッグ・ピティのうめきが止んだ。

〔後記〕

黒人達は、この小さな農場から一生出られなかった。売却された黒人も又どこかの農場で働かされるのである。逃亡した黒人は、逃亡しても、しょせん白人の国からアフリカ迄たどりつくことが出来ないのである。主人たる白人は黒人に対し、魂、肉体のみならず、貞操迄要求した。白人女性にウインクしただけで黒人男性は死刑に処せられたが、それに対し、白人男性は黒人女性の処女は必ずもてあそんだのである。

白人国アメリカで黒人奴隷は法律上全く家畜以下だった。奴隷は死ぬ迄働かされ、又虐待された。公然と競売市場で売買され、公然と公開処刑場で殺された。白人の家中では椅子にすわることも許されない。白人に口ごたえしても法律によって死刑である。こういう中で黒人奴隷娘の中で少しでも美しい娘が、白人男性からかけで、どんなにひどく苛められたか、想像もできないくらいである。

肌が黒いだけで黒人は全く道具にされ、一生、重労働させられ、虐待されるのである。サディスト（白人）対マゾヒスト（黒人）の典型であり、私は上記、寸描したような小説を、誰かが書かれることを期待している。



禪刑事捜査ノート

禪 ふんどし魔 ま

榎村 奏
青木 審・画

—

中田は一杯だけやったハイボールの酔が快く廻っていた。しかし、

「近道だ。城跡を抜けていこうや」と邦子に囁いたのには、何も下心があつてのことではない。

昔、野戦城だった小さな城は、今、石垣だけが残っていて、昼間は子供の遊び場だが、

氣候のいいときだと夜は専らアベックの占有地になる。

邦子は余り気が進まなかったが、ハッキリと断る理由もないので黙って頷いた。立春を過ぎたとはいっても、夜風の冷さはオーバールの衿を立てたいくらいだから、まさか、アベックとかちあうこともないだろう。二人が休日毎のデイトを悦しむようになってから、一年余りになるが、まだ唇を触れ合ったことも

ない。

「煙草が吸いたくなった。一休みしていこうか——」

と突然中田が云いだしたときも、邦子は、「こんなところで……?」

と呟いたが、反対はしなかった。

枯草に腰を下した中田がマッチを擦ると、一瞬赤く映えて浮かびあがった男らしい顔を邦子はチラと横眼で見たが、しらん顔をして

立ったままでいた。

石垣の上に櫓のような足場が組んであるのは、愈々復元工事が始まったらしい。

「鉄筋で建てるのネ。このお城——」

邦子は、そんな判りきったことを云うことで、妙に緊迫した気持をほぐそうとした。中田を信じていたし、警戒するほうが滑稽だとは思っても、やはりそうしないではいられなかった。

「お城ができれば、この辺遊園地になるんでしょう？」

「ああ。……」

中田の気のない返事は、邦子に、今にも何か起りそうな予感を与えた。

「寒いわ。帰りましょう」

中田は答えるかわりに煙草を揉み消すと、立ちあがりながら、いきなり邦子を抱きすくめようとし、二人は草の中に転倒した。

「ダメよ！ いけないわ……」

邦子はそう何度か叫んだつもりだったが、殆んど声にならなかった。

予測しない事態が突発したのは、その瞬間だった。

はじめに気づいたのは邦子で、「きゃッ！」というような悲鳴をあげると、激しい力で中

田を跳ね退けた。

いつのまに現われたのか、黒い影のような男の姿が、二人の眼の前に立ちはだかっているのである。

「誰だ！」と呶鳴ろうとして中田が躊躇ったのは、警官だったかと思っただけだが、男の右手に握られているのが、懐中電灯ではなくどうやら拳銃らしいと判ると、恐怖で胸が硬くなった。

「フッフ、命までよこせたア云わねえよ。俺の云う通りすりゃいいんだ」

男は押し殺した声でいって、拳銃をかまえたまま、もう一方の手でポケットから細目の麻縄をとりだした。

「オイ、こいつで、そのお嬢さんの手足を縛るんだ。それからこの手拭いでサルぐつわもしてな」

「しかし……」

「嫌か？」

「イ、嫌じゃない。する、云う通りするよ」

「よし、早くしろ」

中田は男から渡された麻縄をとると、邦子の顔を見ないようにして、

と小声で云い、彼女の手の前に合わせ、痛くないように気をつかいながら括った。

邦子は中田の意気地なさを恨みたい気持だったが、相手が飛道具を持っている以上、しかたがないと諦めるよりなかった。

「よし。すんだらこっちへ来るんだ」

男は何を思ったか、完全に自由を失った邦子を残して中田を連れ去っていく。

それを見送る邦子はもう生きた空もなかった。脳裏に浮かんでくるのは最悪の事態ばかりである。手足を縛られサルぐつわまでされていては、抵抗はおろか助けを呼ぶこともできない。邦子は殆んど半狂乱になり、死にもぐるいで縄を抜こうともがいた。中田も多少は加減して縛ったらしいのだが、容易にそれは解けそうになかった。

そう遠くへいった様子もないが、石垣の陰へ回った男と中田の姿は全然見えない。

それからかなり長い時間が経ったと思われるが、実際はそれほどでもなかったかもしれない。誰か近づいて来る足音を聞くと、邦子は絶望で気が遠くなった。

しかし、戻って来たのは意外にも中田だったのだ。邦子は眼を疑いながらも、一時に気が緩んで涙が溢れた。

「すまない！俺が意気地ないばかりに、君をこんな目に遭わせて……」

「いいのよ、もう……あなたも無事でよかったわ。あの男、どうして？」

「ああ、もういっちゃったよ。心配ない」

「いっちゃったって——？でも、よく——」

「ピストルなんか持ってやがったけど、案外だらしない奴さ。隙をみて飛びかかっていたら、逃げてしまいやがった」

「そう。本当によかった！一時はどうなることかと思ったけど……」

「うん。アベックとみての悪戯半分の嫌がらせだったんだろ。でなかったら無事ではすまなかったかもしれない」

「でも、一応は警察に届けたほうがよくなくて？」

「しかし、別に被害はなかったんだから、その必要はないよ」

「いいえ。やっぱり届けるべきだわ。こういうときに泣寝入りですましてしまうから、悪い奴がはびこるのよ」

邦子は無事だったので強気だった。それに、中田が彼女の為に危険を冒して暴漢に立ち向った勇気を、友達たちに吹聴したい気もあったのだ。

「アベック襲わる」という三面記事が翌朝の新聞にでると、

「中田。おまえいいところあるじゃないか」

「そうよ。断然頼もしいわ！」

等々、会社の同僚や、女の子にひやかされて、中田はすっかり辟易した。

終車のバスを下りると、小学校教師の山岡は、向い風の中を足早に歩きだした。郊外に近いその辺りにはまだかなりの耕地があり、××寺の裏の道も片側が野菜畑で、夜は殆んど人通りがない。六年担任の山岡は、私立の中学へ進学する児童のことがいつも頭を離れていなかったから、そのときも怪しい人物が尾けて来るのを全く気づかなかった。

「オイ！」と云われて振り返ると、男は拳銃の先をグッと寄せて、

「静かにしろ。騒ぐとためにならねえぞ」と凄んだ。

山岡は急いで懐を探ったが、二百円足らずの持ちあわせしかない。

「これだけしかないんだ。勘弁してくれ」

男はチラリと金を見たが、フンと鼻先で嘲笑った。

「そうだ。腕時計もあった。だが安物だよ」

「そんなこたアどうでもいい。サッサと裸になるんだ」

「頼む。オーバーだけで我慢してくれないか？この寒空に身ぐるみ剥がれたんじゃたまらない」

「ツベコベぬかすな。このハジキが眼に入らねえのか！」

（畜生！……）と思ったが、命にはかえられない。相手が素手なら山岡もおとなしく言う通りになどならないのだが、ピストルをつきつけられていたのではどうしようもなかった。山岡はオーバーを脱ぎ、上衣を脱ると、どうせ強要されると思ったから、靴も脱ぎ、ズボンも渡した。

「早くしろ。俺は気が短えんだ！」

「もう脱いだよ。全部——」

「焦れつてえな。裸になれてったら、すっかり脱ぐんだよ」

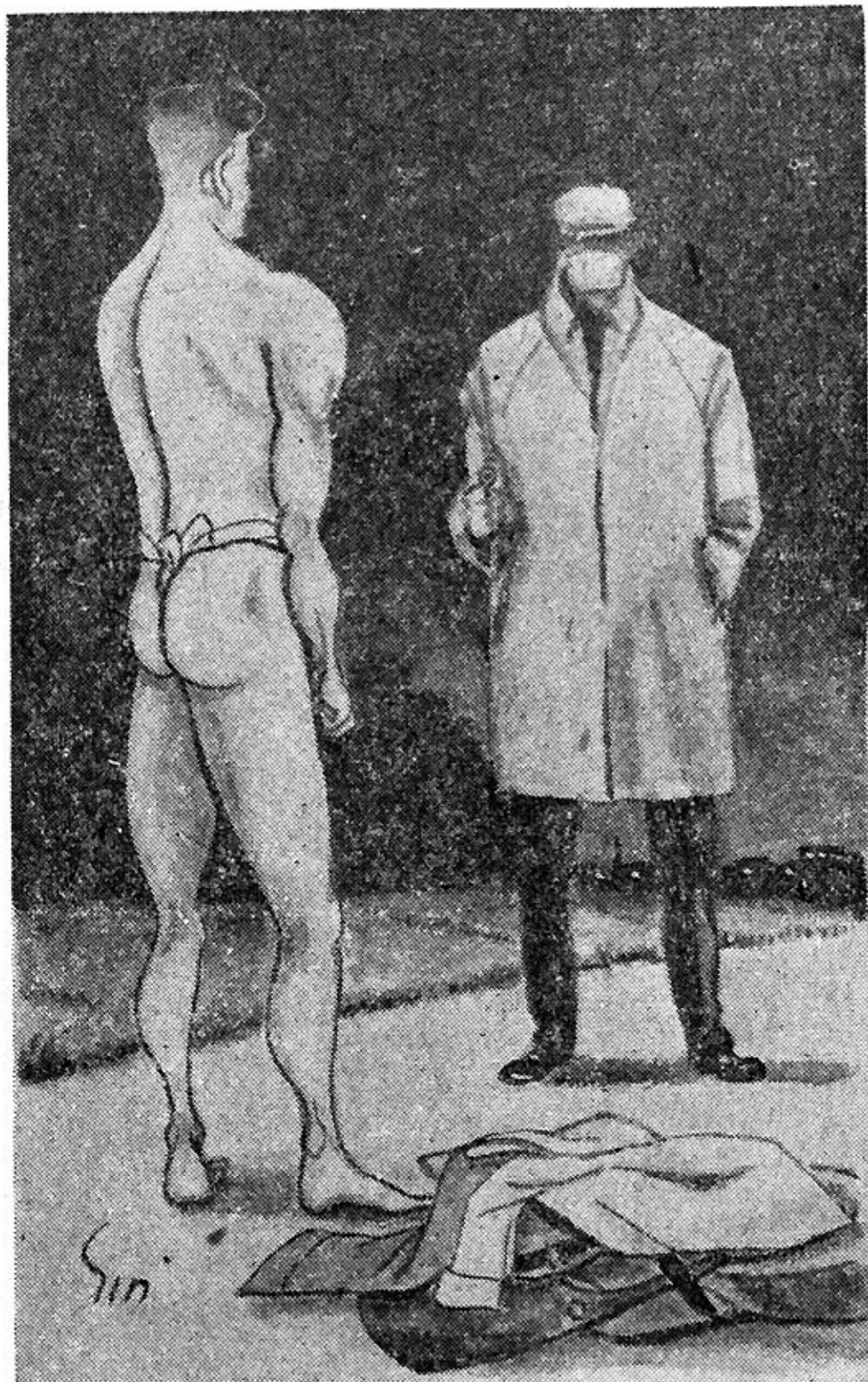
「すっかり？！そんなバカな……」

しかし、結局、山岡は着ているものを一切合切脱られ、寒夜の路上で顫えあがった。

「サア、これでおまえの云う通りしたんだ。もう赦してくれるんだろう」

「イヤ、そうはいかねえ」

「このうえ何をよこせと云うんだ？まさか



命までも……」

「フフ、そう情ねえ声をだしなさんな。俺にも多少の仏心はあるサ。こいつを締めナ」

男のさしだしたものは白い布だった。締めるというところを見ると六尺禪らしい。山岡は正直助かったと思ひ、急いで締めにかかったがヘンな気持だった。海岸の町で生れた彼は、漁師の子に混って禪を締めた経験があつ

たからよかつたが、もしそうでなかつたら、

まだまだ脅されなければならなかつたらう。

暗いといつても慣れた眼には、禪の白さが

クッキリと浮いて見える。男は暫く山岡の禪

姿を眺めてから、

「ご苦労さまだつたナ。感冒をひくなよ」

と云つて、クルリと向きを変えスタスタと

歩きだした。山岡の脱いだ衣類は地面に置か

れたままだ。急いで調べてみると、金も時計

も残っていた。小岡は一瞬狐につままれたよ

うに呆然としたが、突然大きくしゃみをす

ると慌ててシャツに首を通した。

当直の巡査は、いきなり交番に飛び込んで

来た山岡の陳述をどうもよくのみこめず、証

拠の六尺禪を見せられても、まだピンとこな

かつた。もう少しで山岡の精神状態を疑うと

ころだったが、名刺で職業を知つてやつと

信用し、ともかくも供述書だけはとり本署

へ送った。

二

「風間君。この事件やってみないか？」

高梨部長刑事にそう云われ風間刑事は少

々くさつた。いくら「禪刑事」と異名をと

つた彼でも、この「禪事件」はいただけな

い。友人の峰村なら、あるいは興味を持つ

かもしれないが、供述書を見た限りではま

ことにバカバカしい事件である。

拳銃を持っていたというが、果して本物

かどうか判つたものではないし、被害者と

いっても金品の被害はないばかりか、逆に

禪用の晒を貰っているのだ。寒中路上に於

いて拳銃のようなもので威し、むりやり裸に

したのだから脅迫暴行にはなるが、追剥ぎではない。

風間刑事はタバコを指にはさんで、気のない顔で書類を繰っていたが、犯人の特徴のところへくるとオヤと首をかしげた。

長身で瘦型、そして烏打帽子に白い大きなマスク、鼻にかかった低い声（但しこれはマスクのせいかもしれない）

それらの特徴はどこかで見た記憶がある。さてよ、そうだ、あれは確かに城跡のアベック暴行事件だ。

そのときの供述書を取りだして調べてみると、やはり思った通りだった。被害者の陳述によれば、女はただ縛られただけ、男のほうは別の場所へ拉致されて拳銃で脅迫され、金品を強奪されなかったが、隙をみて抵抗し犯人は目的を果さず逃走したとある。

もしこの二つの事件が同一犯人の仕業とすると、第一の被害者からはもっと訊きだすことがありそうだ。

「どうもご足労かけて恐縮です。実はあの事件で手懸りがえられそうなんですね、もう一度当時の状況をお伺いしたいわけなんですよ」

「はア……」

固い椅子にかけた中田は、上眼使いに風間

刑事を見て、またすぐ下を向いた。

「あなたは犯人から金品を強請^{ゆす}られたと云っています、実はもっと別のことを強要されたんじゃないありませんか？ これは重要な質問ですから、よく思いだして本当のことを云ってくださいよ」

「すみません。あのときはつい云いそびれてしまつて……」

「女性と一緒にだったから、それもしかたないでしょう。しかし、やはり供述は真実を述べていたかないと困ります」

「はい、実は、裸になれと脅されたんです。

私はすっかり奪られるものと覚悟して裸になりました。でもまさか下着までもとは思いませんでしたから、愕きました。しかし、もっと愕いたのは、六尺禪をだして私に締めると云ったときです。何のことか判りませんが、禪の締め方もよくは知らなかったんですが、ピストルをつきつけられているんですから、界の云う通りするより仕方ありません。私がどうやらまがりなりにも禪を締め終ると、男はそれで満足したようにサッサといつてしましました」

「それでその禪はどうしました？」

「一旦は家まで持って帰りましたが、気味が

悪いので捨ててしまいました。いけなかったでしょうか——？」

「証拠物件ですからね。勝手に処分しては困りますが、まあいいでしょう」

手口からみても、もう同一犯人であることに間違いない。あるいは常習犯で、未届の被害が何件かあることも考えられる。変質者の犯罪としてはいささか珍しいケースだが、別に身体に危害を加えるのでもなく、いわば質^{たち}の悪い悪戯程度のもので、当局としても余り気乗りのしない事件ではあった。

軽い朝食のあと、峰村はコーヒを飲みながら数種類の新聞に眼を通していた。その日に限り、彼の関心は大新聞ではなく、もっぱら地方紙の紙面に向けられている。

「禪魔^{ふんま}現る！」 変質者の仕業か？ 裸に

された小学校教師。スペースがいくらでもとれる小新聞だけに、どぎついくらいセンセーショナルな見出しは、思わず苦笑させられてしまう。『禪魔』とは、『何々魔』と呼ばれる変質者の犯罪にひっつけたものらしいが、一応ドキリとさせられるから、うまい言葉を考えだしたものだ。大新聞のほうは、地方版の片隅に、小さく『教員襲わる』として、簡

単に強盗未遂事件を報じているだけだった。

二日後の新聞には「禪魔」の被害者がぞくぞくと出てきたことを告げ、今後とも犯人の跳梁は続くだろうと書いていた。被害者が出たというのは、それまで届出なかった者が、新聞を見て警察に協力する気になったもので、会社員や工員、鉄道員もあれば、変り種では自衛官もいた。年令的には二十代、三十代が多く、中に一人だけ四十代も混っていた。届出の件数は七件で、一番古いものは去年の十月初旬に被害を受けている。全部が全部届出たとは限らないから、実数はおそらくもっと多いかも知れない。(とにかく面白い奴が現れたものだ)と思うと、峰村はついニヤニヤして、

「これだから世の中も退屈しないんだ……」と呟いた。

C町派出所勤務の藤井巡査は、警邏に出とけようとして帽子をかぶったとき、不意に駆け込んで来た男の姿を見てサッと緊張した。男は六尺禪一本だったのだ。

「やられたのか?」

「はい……」

「どこだ?」

「橋のたもとです」

「とにかく聞いてみよう。ああ、さて、こいつをはおるといい」

藤井巡査は、私服のオーバーをとって渡すと男と一緒に外へ出た。

現場は交番から百米とは離れていない小さな橋のそばだった。その辺には小住宅が建ち並んでいるが、どの家もとうに寝静まっていた。人通りは全くない。地面には被害者の脱がされた衣類が、そっくりそのまま残されていた。

「アノ、服を着てもいいでしょうか?」

「いいとも、寒いだろう。早く着なさい」

親切のつもりで藤井巡査が懐中電灯の光を向けると、

「結構です。暗くても着られますから……」

そう云って男はヘンにもじもじしている。

藤井巡査が苦笑して懐中電灯を消すと、男はむこう向きになって手早く禪を脱しパンツとはきかえた。

(畜生!……)

腕ぐみをした藤井巡査が心の中で舌打ちをしたのは、交番から目と鼻の距離で犯行を演じた犯人に対する憤りと、警邏の時間がもう少し早かったら犯人をあげられたかも知れない

という口惜しさからだった。

藤井巡査は再び男を伴って交番へ戻ると、インキの出の悪い万年筆をガリガリいわせて供述書をとった。

被害者の男は森島といって三十才。ある電機会社の社員だった。勿論被害状況も犯人の特徴も、数件にのぼる「禪魔事件」と全然同じである。

「チェッ。実際イヤな野郎が現れたもんだよ。これが女の子を狙うってんなら話は判るんだが」

あくびまじりに同僚の刑事が云うのを聞きながら、風間刑事は憂鬱を隠せなかった。この種の犯罪がもっぱら聞込み捜査に頼るしかないのは仕方ないとしても、当局のもたつきぶりを嘲笑うようにこう次々と事件が起こっては、市民の不信を買うのは明らかだ。幸い(?)犯人の狙うのは男ばかりだから、うまいぐあいに私服警官が被害者になれば、うむを云わさず逮捕してしまえるわけだが、また、事実、狙われそうな青年の後を尾行してチャンスを待った根のいい刑事もあるが、結局は徒労だった。

会社員森島の被害で「禪魔事件」は遂に十

件になり、それから一週間経って十一件目の被害がでてしまったが、それによって事件は意外な方向に発展したのである。

今度の被害者は無残にも死体となって発見されたのだ。兇行現場は私鉄の無人踏切付近、殺されたのは自動車会社の社員浜崎という男で、「禪魔」の犠牲を物語るように六尺禪一本で仰向けに転がっていた。死因は扼殺で、駄の敷力所に擦り傷が見られるのは抵抗したためと推われる。例によって被害者の衣類、金品はそっくり残されており、犯人は新品の晒布でつくった六尺禪を遺留していた。

殺人を全く予想しなかった当局は俄かにいろめきたったが、おそらくは犯人にとっても予定していなかった兇行は、いわば偶発的な殺人だから、容疑者の割りだしは相当に困難だった。

「禪魔」は今までの経験から相手の抵抗を計算に入れていなかった。拳銃で威嚇すれば、相手は温和しくこっちの思い通りになる筈だった。ところが今度の男は不意にむかってきた。愕いて争ううちに夢中で扼め殺してしまった。兇器に拳銃が使用されなかったのは、脅しのための玩具だったとも考えられる。

不慮の事態が起こったからは「禪魔」もこ

れ以上の犯行は重ねないだろう。少くとも当分はなり、をひそめるに違いない。だがいたずら者「禪魔」はいまや殺人犯である。本署の刑事係には「禪魔殺人事件捜査本部」が設けられ、強力な捜査陣をもって活動を開始したが、初動捜査の遅れは否定し難く、見通しは暗かった。

犯人の遺留した晒は新品であるために、直接には何の手懸りにもならず、出所を追及しようと、改めて市内の呉服店、デパート等を調べたが、昨年の暮から現在までに同質の晒が二百三十七反売られていることが判明しただけで、それ以上は進展しなかった。特にめだった現象、たとえば一度に数反まとめて購入したとか、犯人の人相風態に酷似した人物が買っていたとかの事実は掴めなかったのである。二百数十反の晒は買った人によって用途は色々だろうし、その中に犯人が含まれていないとは云いきれない。風間刑事は自分が禪用に買った晒も同質のもので、正月に新調したことを思うと苦笑がでた。

被害者が女性ならチンピラや痴漢のリストを洗う手もあるが、同性を狙う変質者となつては見当もつかない。

捜査は全く停頓したまま、時日のみが経過

し、係官達の不気嫌が眼に見えてくると、お定まりの「迷宮入り」の声が囁かれる。

風間刑事は、二、三日前から峰村に逢おうと考えていたことを今夜は実現しようと思に決めた。友人というよりは兄弟のように交際（つきあ）っている峰村の顔を見れば、それだけで心労は和らぐし、もしかしたらまた何か助言が得られるかもしれない。

三

「ヤア、来たナ。大分参ってるようじゃアな
いか。『禪刑事』『禪魔』に翻弄さるか」

言葉は乱暴だが、峰村司の眼は労わるように風間建太郎を包んだ。

「その通りですよ。情ない話ですが正直クタです。変質者の犯罪はある意味で一番難物ですね。神経がこうへんに疲れるんです」
「そうかもしれないな。ところで容疑者は浮かんだのかい？」

「とてもとても。我々は、今、禪マニアの変質者を探し回っているんです」

「なるほど。それがまあ妥当な線だろうな」

「と云うと——？」

「いやネ、俺一流のひねくれた推理によると別の線もでるということサ」

「話してくれませんか？それ……」

峰村は余技である小説のプロットをたてるように、実際の事件にも突飛な推理を試みたりする。それがまた往々にして当たるのだから恐いのだ。

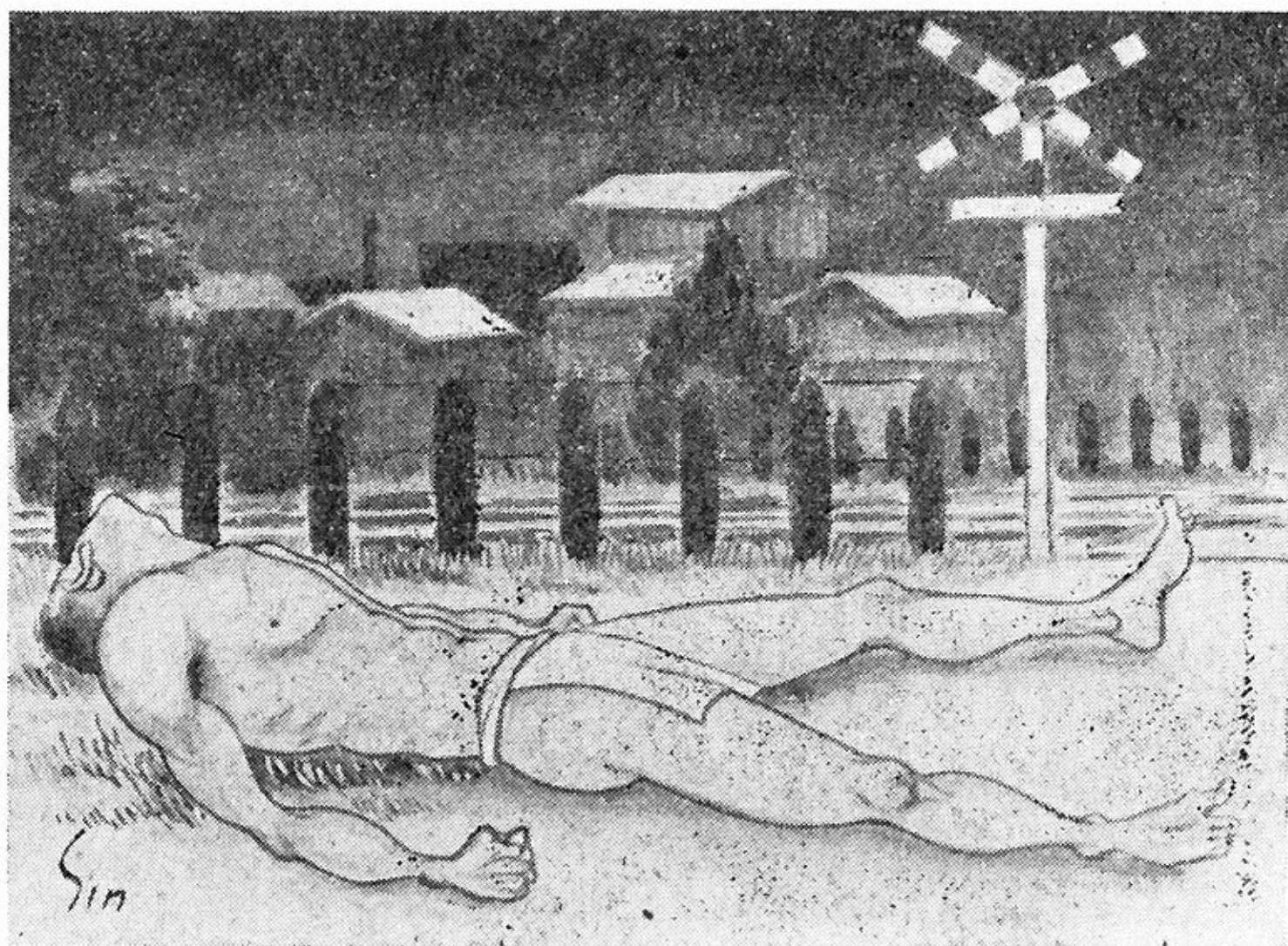
「話すよ。だがこれはあくまでも俺の自由な推理で、いわば遊びだ、そのつもりで聞くんだぜ」

「判ってます。早く話してください」

「さてさて、コーヒーの用意をしながら話そう」

峰村は眼の前でコーヒー豆を挽きながら、

「この事件は一見変質者の犯罪のように見える。しかし、それが犯人のトリックだったらどうだろう。結論から云うと、犯人は最初から、ソレ殺された男、浜崎か、浜崎を殺すのが目的だったんだ。犯人の計画ではまず一連の“禪魔事件”を起こして、警察の眼をそちらへ向ける。つまり変質者という犯人を想定させるのだ。そして時期をみて浜崎を殺害



する。警察は“禪魔”を信じているから、偶発的な殺人として被害者の身許を洗おうともしない。もう“禪魔”は現れないだろう。それは不測の事態を起したからではなくて、所期の目的を果したからさ。どうだい、面白いかい？」

「え？ええ、面白いですね」

「ハッハハ、そう真剣な表情をするなよ。はじめにも断ったように俺の勝手な推理だ。サア、コーヒーが入ったよ。飲みたまえ」

確かに峰村の推理は小説家の想像力の産物かもしれない。しかし、一つの可能性ではありうる。いや、むしろ、“禪魔”などという奇想天外な変質者が犯人のトリックだったとしたほうが、現実に近いといえそうだ。

風間はコーヒー・カップを手にしたが、これが事件の解決した後ならどんなに美味いだろうと思わずにはいられなかった。

「どうだ、風呂へ入らないか？ 久しぶりに一緒に入ろうじゃないか」

「そうですね……」

風間は余り気が進まなかったが、もう何日も入浴していい駄をサッパリさせたい気持ちもあった。

贅沢にタイルを使った浴室は、さほど広くはないが明るくて清潔だった。風間刑事がはじめてこの家で風呂に入ったとき、峰村は、下海の風呂屋の個室ではボーイが洗ってくれるという話をして、その通りに流してもらったことがある。そのときは何だかぐあいが悪く、といって恥しがるのもヘンなので仕方なくされるままになったものだが、今では馴れてしまったし、むしろ妙に快くさえあった。

「新しい禪をだしといた。替えるといい」

「へえ、峰村さん禪をもってたんですか？」

「イヤ、君のために用意しといたんだ」

「そいつはどうも……」

汚れた下着もとりかえたかったところだけに、風間は喜んでできりたての晒を手にとって締めはじめたが、不意に「アッ！」と小さな声をあげた。

「どうしたんだ？」

ガウンの紐を結ぼうとしていた峰村が風間の顔を見る。

「イエ、今、急に思いだしたことがあるんで

す」

「何だい？」

「浜崎の死体の禪の下に草の葉がまぎれ込んでいたんです」

「ホウ……」

検死のとき禪の下に翦えでたばかりの柔らかい雑草の葉がちぎれて入っていたのを見たのは、風間刑事一人ではなかったろう。しかし、死体のあった場所が藪であつたために、それは一種の盲点になって誰も不審をいだかなかったのだ。

「つまり、あの禪は死んだ後で締められたことになる。犯人がもし過って相手を殺したのなら、その後で禪を締めるだけの心の余裕があるでしょうか。イヤ、それよりもワザワザ“禪魔”の殺人だという証拠を残す愚を敢えてするでしょうか。別の云いかたをすると、犯人が本当の変質者なら浜崎の駄に禪を残さない筈だし、“禪魔”がトリックなら死体には絶対に禪を締めておく必要があつたわけですよ」

「なるほど。どうやら俺の推理が裏づけられたようだな」

「そうなんですよ。とにかく浜崎の身許を洗ってみます」

風間刑事が服を着るのもどかしく飛びだしていくと、峰村はおき忘れられた脱衣室の禪を眺めて、

「奴さん。大分慌ててるナ」と呟き、悪戯っぽく笑った。

捜査にいきづまっていた当局は、風間刑事の進言で一応怨恨説を採ることに決め、浜崎の交友関係を洗うと、意外にも“禪魔事件”の被害者の一人森島が、旧い友人で最近絶交状態にあつたことが判った。

「ふうム。しかし、森島は“禪魔”の犠牲者なんだからナ」

高梨部長刑事が残念そうに云つたのは、もし森島が被害者でなかったら、重要参考人として取り調べることもできると思つたからだった。

「一寸待ってくださいよ。確かに森島は被害届をだしています。そのときの状況なんです。禪一本のまま、交番へ駆け込んでいます。恥ずかしさはともかくとて、いくら慌てていたとはいえ裸で交番へくるのはおかしくありませんか。衣類はちゃんと残っていたんですからね。森島は禪を締めさせられた姿を証拠として警官に見せたかったのかもしれない

ませんよ。口で述べるだけでは不安だった。自分を完全に被害者だと思い込ませる必要があったからです。と、これはまあ仮定なんです——」

考え深かそうにゆっくりと喋る風間刑事の口許を覗いていた高梨部長は、みるみる顔色を輝かせて、

「ううム。ありそうなことだ。つまり、自分を被害者に疑装して、容疑の圏外に置くことを謀ったわけだな」と頷いた。

取調室に入った森島は、

「おまえがやったな！」

と高梨部長にきめつけられると、ブルブルと顫えだし、

「申しわけありません……」と頭を垂れた。

「“魔魔”は私です。お恥ずかしいですが私は魔に異常な関心をもっていました、それで、あんな悪戯を思いついたんです。危害も加えず物も盗りませんから、大した罪にはなると

いと思って、ついつい数を重ねてしまいました。今度の殺人事件が“魔魔”の仕業だと新聞で読んだときは、息が止まるほど驚き大変なことになったと思いました。すぐに自首したほうがいいかとも考えたのですが、それも

恐ろしくてできませんでした——」

「待て。じゃあ殺人はおまえじゃないというのか！」

「違います。決して私じゃありません。信じてください！」

森島は眼に涙を溜め、必死の表情で訴えるのだ。

「森島。裸になってみる」

突然云いだした風間刑事の主旨は、森島ばかりでなく高梨部長をも愕かせた。

「オイ、早くするんだ」再び云われて森島はオズオズ着ているものを脱ぎはじめた。

最後にズボン下を脱るときになると、森島は明らかに逡巡を示したが、風間の視線に逢って観念したように脱ぎすてた。その下から現れた六尺魔を見ると、風間刑事の面には失望の色が浮かんだ。それでも諦めきれないように風間は高梨の承諾を得ると、森島を連れて別室へ入り、不安そうにしている森島の前で自分も服を脱ぎかかった。

暫くして取調室へ戻った風間刑事は、

「やはり殺しは白のようです」とすっかり元気をなくした声で云った。そして、森島のアリバイが証明されるに及び、捜査はまたまた壁につきあたってしまったのである。峰村の

推理は半分あたって、半分あたらなかったのだ。浜崎殺しが“魔魔”を利用したことは間違いない。だが“魔魔”は浜崎を殺害した犯人の計画したトリックではなかった。偶々魔事件が発生し、変質者が犯行の果てに過って殺した如く見せかけることを思いつき、かねてから抱いていた殺意を行動に移したのだろう。捜査方針は怨恨説一本に絞られ、新しい段階に入ったものの、依然として壁は破れない。しかし、とうとう、思いがけぬ方向から希望の曙光が見えてきた。谷口刑事が有力な情報を掴んできたのである。浜崎殺しの五、六日後、市内の「四季洋品店」に晒のは、ぎれを持参して、「これと同じ質の品はないか」と訊ねた客があったというのだ。洋品店で晒の反物は扱っていないので断ると、きまり悪そうに出ていった青年は一寸ハンサムだったので女店員はよく憶えていた、映画俳優のKによく似ていたと彼女は確信ありげに証言した。Kと聞いて風間刑事はある男を思いだした。“魔魔”の被害者の一人中田である。中田の殺人動機は不明だったが、面通しの結果は有望だった。

「中田。おまえが『四季洋品店』へ晒を買いにいったことはもう判っているんだぞ。おま

えが『捨ててしまった』と云った禪のきれはしを持ってな」

それだけ云えば充分だった。中田はスララと犯行を自供した。

中田と浜崎は表面的には交際はなかった。

それまではあかの他人だった二人に秘密な関係ができてしまったのは、浜崎がフトしたことで中田の弱点を握ったからだ。中田には過去に女性問題があった。彼が近く結婚する邦子はオフィス・ガールだが、遊び半分に就任している金持の娘だ。そこへ養子に入れば一生の生活が保証される筈だった。浜崎の

蛇のような脅迫は、いつか中田に殺意を抱かせるにいたった。偶々「禪魔」に襲われた中田は、しかし、そのときすぐにそれを利用する犯行を思いついたのではない。森島が自分で被害者をよそおって交番に駆け込み、十人目の被害者の出たことを新聞が報じたのを見て、急に計画が浮んだのだ。「禪魔」に締めさせられた禪は嘘を以って持っていたが、新品を使うほうがいいと思って洋品店に買いにいった。そこで洋品店には売っていないことを知ったが、ヘンな顔をされたので市内で買ってはまずいと気がつき、用心深く他県まで

いって手に入れた。約束の金を渡すと浜崎を呼びだし、隙をみて扼殺すると、用意の禪を締めさせて「禪魔」の犯行と見せかけ、何食わぬ顔をしていたのである。

事件は解決した。小ざっぱりと身なりを整えた風間健太郎は、ようやく春めいた陽射の中を峰村の家に向かって歩きながら、今日のコーヒはさぞ美味いだろうと思い、口笛を高く吹き鳴らした。(完)

【通信】

哀れな女、秀緒の手記

藤 山 秀 緒

……夜毎に、妖しく乱れる倒錯への憧れ。そこには、云いしれぬ歎びと、底知れぬ寂しさが待っている……。宴果てた時の、かぎりないわびしさ。しかも、完全武装の乗馬ズボン姿で横たわる己の肉体の空虚な物々しさ、勇ましき。

私の体は、病に蝕まれ、その病ゆえに、一層激しくなってきた肉体の欲望に操られて、日毎夜毎、物狂わしい生活がつづいていくのです。こんな恥しい事を、書かずには居られない秀緒は、きつと露出症の女なのですわ……

……とうとう、いただいたお便りは、三百通を超え、悪質ないたずらもまざるようになり、這々の態で郊外へお引越しをいたしました。

それは、秋雨のけふる宵でした。いつものように、乗馬靴、乗馬ズボン姿の上から、ベージュのトレンチ・コートで武装した秀緒が自室へ帰って鍵をしめた途端、激しくノックする音。はっとして、マジックグラスの覗き窓から見ると……ああ、今でもはつきり覚えています。あの眼、あの口もと。眼を血走らせ、肩で息をしながら、扉の

あくのを待ち焦れている姿の怖しさ。

私は声も出ず、ベッドルームへ走って行って、もし扉をこじあけられたら……と逃げ道を考えたり、ベッドに、ずぶぬれのトレンチコートのまま、意味もなく身を悶えたりして取乱してしまいました。

また二、三日すると、その人の声がしました。その時も、応待には出ず、そつと様子をうかがっていました。何か扉に書いてある音。帰ったあとを見れば、マヂックインクで扉一杯の落書きです。

それきり、その男は来ませんが、痴漢は後を断たず、女装して、レインコートの襟を立て、私の好みそうなスタイルをして訪れる男性さえ現れました。その人は、マヂックグラスを通して見た処では、薄暗いせいもあってか、ハンサムでしたけれど、扉をあけるわけには行きませんでした、放っておきました。

女性でも、一緒にプレイしたい、というお申込みが多く、中には、三人位で、ひやかし半分に訪ねて来る人。

でも、真面目なお便りも少くありませんので、此の為に、奇クの存在がどうの、とかは云うつもりはないのです。

毎号、詳しい批評を寄せて下さる方もあります。中には、テーマや、ヒントをお書

きになって、これを材料にして書いて見ては、と云われる方もあります。いま、私がすごく気に入って、書いてみようと思っているテーマもあります。くわしいストーリーをお送りになる方さえあるので、これをそのまま奇クへお送りになったらと思うことも屢々です。きっと、このようなアイデアの中から、幾つかの作品が、気力のあるうちに発表されて行くことでしょう。

私は、手術をしました。これが私の生きる最後の機会だと思って。

先生にお見せしたら、先ず体力をつけてから、と仰言り、注射、ビタミン服用、食事療法、輸血など、各種の治療をうけるように云われましたが、先生の思っ居られるような体になるまでには一ヶ月以上かかりました。その筈です。この手術で、私の運命がきまるのですし、下手をすれば、手術が命とりになってしまうかもしれないのです。私は今まで怯えに怯えていたプレイを、お別れのつもりで日毎夜毎につづけたのですから。

鞍くらを買い、木製の台に装着して、馬乗りになってプレイしました。死を覚悟したプレイは、毎日つづき、食事のための外出さえ、三度のうち一度は有合わせですませる、といった徹底したものでした。一つに

は食欲もなかったからですけれど。

メイキャップは、濃く、派手にし、口の中に綿を含んで面やせをかくして外出するのです。苦しいが、妖しい悩ましさに、心のはずむ毎日でした。

手術は、切腹のような劇的なものを想像していた私には、物足らぬほど事務的でした。手術後幾日も痛み、むしろ此の間が、切腹の実感を喚び起こしてくれました。兄にも知らせず、菊枝と二人きりで病室に何日かを送りましたが、もう、元のアパートへ帰る気がせず、菊枝に探して貰った郊外の家へ、退院と同時に移りました。ここはお隣の角が交番で、女の一人暮らしには持つて来いの処。

傷が痛むので、プレイも、馬装もやめ、ネグリジエで、刺激を避けた生活です。手術が無事にすみ、生きる望みが出来ると、いままでのようなことが出来なくなります。でも、此の一年間がヤマです。今度もう一度手術をする時は、もうすべておしまいです。その可能性もあるとのことなので、心残りのないように、準備はして置かなければならないでしょう。

病院でも恥しい思い出をのこしてしまいました。それは、うわ言に「乗馬ズボン、乗馬ズボン！」とか、「お、女中らも、は、腹を切って！」とか口走ったのだそうです。いまは、自制しながら、全快の日に備えております。では、又……。

体 験 記

病 院 に て

△浣腸の羞恥にもだえ苦しんだ入院生活▽

山 岸 悠 子
北 原 純 子・画

「山岸さん、お浣腸致しますから、すぐ処置室へいらして下さい」

看護婦さんはドアを半開きにしたまま大きな声で呼びかけると、そのまま踵を返してしまいました。同室六人の眼を一瞬私は全身に感じて耳まで真赤になるのを禁じ得ませんでした。とうとう来るべきものがきたのです。それでも、皆に聞えよがしに——いいえ、こうした事に馴れ切っている看護婦さんは、ただ事務的にそう言っただけなのでしょうが——まだやっと二十を越したばかりの私にと

っては、好奇心に満ちた六人の眼を意識して——勿論皆は当り前の事として受取ったのかも知れませんが——しばらくは、じっと下を向いたままでした。

「こんなことをしていたら、かえっておかしい。何でもない顔をして早くゆかなければ」そう心に言い聞かせながらも、いよいよこれから、あのいやな浣腸をされるのかと思うと、ともすれば足がすくみ、もじもじするばかりでした。

「山岸さん、山岸さん、お浣腸しますから」

今度は別の看護婦が呼びにきました。

「ハイ」

私は蚊の泣くような声で答え、そっと伏目に勝ちに皆の様子をうかがいました。おお、六人の眼が、十二の眼が一斉に私の方を見つめているわけではありませんか。

「早く行ったらいいのに」

「何をぐずぐずしてるんだらう」

「恥かしがる年でもないだらうに」

「浣腸される位、分ってることだわ」

眼が人々の口々にそう言っているように感



ぜられ、私は裸で拷問台に立たされ、衆人環視の中に鞭打たれているような錯覚にとらわれるのでした。

その日、分娩予定日を一週間前にして、私は朝から断続的に起る腹痛を感じ、いよいよその日であることを昼頃にははっきりと感じ取りました。新しき生命の誕生、喜びと怖れの交錯した複雑な感情に支配されながら車上の人となり午後三時、日赤産院に入院したのでした。

ここ、郊外の一劃は、まだ田園の風格を残し、雑木林に囲まれた一万坪の敷地に、三棟の鉄骨コンクリート四階建のクリーム色の建物が、西日を浴びて真紅の赤十字のマークも鮮かに安心して入院なさいと言っているかのようでした。

産科は最も南側病棟、入ると中央がロビーでピカピカに磨き上げたガラス戸の向うには青々とした麦畠が広がり、その向うには団地のコンクリート建が点々と連なっています。ロビーには真新しいセット、出産を待つ家族の心配そうな顔が一人二人。右手は分娩室で部外者は一切入室禁止の札がはっており、左側は中央廊下をはさんで看護婦室、隣が問題の処置室、次がトイレとなっており、右側が準備室で、出産予定者はここに一旦落ちつき分娩開始を待つ訳です。従って準備室には予定日前後の人が、大事をとって前もって入院しているのです。私のように陣痛を可成り感じてから入院する人は割合少いでしょう。皆待ちくたびたような顔をし、新入りの姿を認めると、皆一様に身体の隅々まで点検するかのような、好奇の眼差しで穴のあく程ながめ廻すのでした。そこへもって来て、入室するなり、すぐ浣腸を宣言され、赤くなって

もじもじしている私などは、恰好の慰み者でなくて何でしょう。

観念した私は、おずおずと処置室の扉を開きました。おお、何たる光景でしょう！処置室とは婉曲な名前をつけたものの、ここは正しく浣腸室なのでした。真中の医療用ベッドの向うには、二〇〇〇も入ろうかという巨大なイルリガートルが二つ、その一つには今や私を待ち構えるかのように、真白い石鹼液がなみなみと入っています、又左手のガラス台には、グリセリン浣腸器が大小三本、五〇〇CCグリセリンが二本、一本は既に使用されて半分位。ああここで、毎日、何人かがと、私は思わず寝巻の前を押さえて、足が辣むのでした。

「パンティお取りになって、ベッドに横になって下さい」先刻の看護婦さんです。いよいよ施薬、私は眼をつぶりました。恥かしさに膝がふるえてくるようです。陣痛を妨げないために浣腸するとは、生理の本で読んで知っておりながらも、現実ともなればこんな苦痛なものなのでしょうか。でも、なかなか注入が始まりません。変に思い、そっと薄眼を開いてみれば、看護婦さんは、嘴管を持ったまま、イルリガートルをのぞき込んでいます。

「金子さん、金子さん、これ違つてやしない？」

「ハイ」呼ばれて入つて来たのは年の頃十六七の見習看護婦らしい、まだ幼さのとれない少女でした。

「金子さん、この石鹼液何だか薄いわよ、小児用と間違えたんじゃない？」

「あッ、そうかも知れませんが、どうもすみません」

「駄目よ、小児用の薄いのか、三四階が小児科でしょ、薬局にはこの病棟用として、産科のと、小児科のと一緒に置いてあるんだから気を付けてね、早く取つて来てよ」

「ハイ、すみません、すぐ行つて参ります」

「山岸さん、すみませんね、今お薬取り替えますから、一寸お待ちになつて下さい」

そうでなくてさえ、恥かしさに一刻も早くと念ずる時、石鹼液の取り替えを待たされる数分は、一時間にも二時間にも感ぜられたことでした。

「お待ち遠様、すぐ終わりますから、気持を楽にして、下腹に力を入れないように、ハイ」ズズと来る冷いやな感触、今私は浣腸されている、この観念が私をみじめな虐げられた者と感ぜさせるに充分でした。長い長い

数分、やっと施薬が終り、早くも迫り来る便意を押さえながら許されて隣のトイレに駆け込もうとして、私はハッと我に返りました。

「そうだ、チリ紙を忘れた」何という愚かさでしょう。用意しておけばよかったものを、

さっき、恥かしさで我を忘れたばかりに、今又準備室に取りに行かねばならないのです。

一瞬私はためらいました。でもぐずぐずしては居られないのです。ああもう我慢ができません。顔がほてつて来ます。意を決して準備室の扉を開けました。皆の眼が一斉にドアの方を注目しました。私は下を向いたまま自分のベッドの枕元から、チリ紙をわし握みにすると、一目散にトイレへ走りしました。

「今私は浣腸されました」そう背中大きく書いてあるのを、皆に見られているような羞恥に身も心も苛まれながら。

可成り難産ではありましたが、どうやら無事女児を分娩して私は二階の病室に移されました。二等室を希望していたのですが、今年例のベビーブームとやらで一二等とも満員で暫時という約束で一応三等室に落着きました。

三等といつても、一室に四人、新築間もないだけに、大正から昭和にかけて建てられた

病院の一等室以上の素晴らしさです。

クリーム色の壁には粗末ながら風景画さえかけられ南面した窓は二重ガラス防虫網付き、さして広くはなくとも一応テラスもついて、三段切り替えの螢光灯の外に、各ベッドにはスタンドが外の人の邪魔にならぬよう、深い笠をつけて取りつけてあります。付添人を許可しない完全看護だけに、枕元のベルを押せば即刻看護婦さんがとんで来て呉れるのです。

ベッドも真新しく、マットのスプリングもまるでホテルのその如く、羽根ぶとんは一寸普通家庭では望めない程のものでした。而も産婦の健康回復のために、新生児は全部新生児室で哺育され、授乳の時にだけ連れてくるという、正に近代性を余すところなく取り入れた完全な態勢でした。

同室四人はすぐ馴染みになり、夫々我が子を謙遜しながらもその特徴を自慢するのも母なればこそでした。皆概して安産の様子、ここ一二日母となった方ばかりでしたが、大体一週間もすれば退院というわけで、中には二日目で、看護婦さんの目を盗んではそっとト



イレへ歩いてゆく元気な方もあるのでした。ところが、私は可成りの難産の上、回復がおそく、数日の安静が要求されました。従って皆さんは三日目頃から自分でトイレへ行けるのに、私だけは三日たっても、四日たっても看護婦さんに下のお世話にならなければ

なりません。ああ、その恥かしい事、つらい事、早く二等室にお願いするのですが、二等はやはり肥立ちの悪い方が多いとかで、一向あく様子もありません。元来が便秘勝ちの私は、下の世話をしつづけるのが恥かしいだけに三日たっても四日たってもお通じが

ありません。とうとう五日目の回診の時です。カルテを見ながら医長は、

「まだ一度もお通じがありませんね。便秘しますと収縮に影響しますから。君、（看護婦さんを返り見て）あとで浣腸を」

ハッとして私は皆の方を盗み見ましたが、誰も知らん顔をしています。でも今の医長の声が聞えない筈はありません。「気の毒がって知らん顔してるんだわ」そう考えただけで、私は真赤になって窓の方を向いてしまうのでした。

コツコツ、ドアをノックする音、ああもう来た、グリセリン浣腸だろうか、イルリガートルだろうか、私はドアの方を見るのが恐ろしくて目をつぶっていました。

「今日は、お目出とう、坊やだったんですってね、よかったわねえ」

なんとお隣さんのお見舞の方でした。ああよかった、とホッとする間もなく、私は別の考えで頭が一杯になりました。私はこれから浣腸される、早く帰って呉れないかしら、同室の三人に見られるのだけでも恥かしいのにお見舞の人にまで知られちゃったらしう。お願い早く帰って。拝まんばかりにそう念ずるのですが、女のおしゃべりは長く、世

間話にあく事も知らぬ有様、遂には、

「やがて授乳の時間よ、もうすぐ連れて来るから赤ちゃん見ていらしてね」

お隣さんは私の気も知らないでお見舞の方を引き留めているのですもの、ああどうしたらいいいでしょう。

と、ノックもなくドアの開く気配がして看護婦さんが二人、一人は小型衝立を、一人はおおイルリガートルを持って、ああ又もイルリガートルです。病院とはどうしてこうイルリガートルがすきなんでしょう。

「お見舞の方、今浣腸がありますから、一寸外に出ていらして下さい」

看護婦さんにそう言われて

「あ、どうも失礼致しました、では一寸」

私の方を返り見て会釈して出てゆかれるお見舞の方の口もとに、何か軽侮のようなものを感じたのは私の僻目でしょうか。

一瞬室内はシーンとなりました。誰も一言も口を開かない。その静けさが限らない圧迫となつて私の全身にのしかかります、小型衝立がリノリュームの床を引張られて僅かに軋む音と、看護婦さんが蒲団をめくり、手早く私の下着をぬがせる音だけが、妙に大きく壁に響くように感ぜられ、私は耳元まで真赤に

なつて思わず身を縮めるのでした。

「楽な姿勢で、お腹に力をお入れにならないように、もう一寸横をお向きになつて」

そんなこと言わなくてもいいのに、うらめしくても仕方がありません。衝立は小型で、僅かに腰部が皆の視線を遮るのみ、私の上半身は勿論のこと、高々と差し上げられたイルリガートルは皆からもよく見えるのです。石鹼液の液面が次第に下つてゆくのを、皆は一樣に好奇の眼差しで見守っている事だろうと思つと、私は全身がカッと熱くなって、止めてと叫びたい衝動にかられるのでした。

長い長い数分がすぎて施薬は終わりました。でも、もっともつと恥かしい事が私を責めつけるのです。始めに書いた通り、安静を要求されている私は、今日も差込み便器のお世話にならなければなりません。お恥かしい事ながら、音を立てないように、音がしないように少しずつ排泄する苦しさ、でも進み出ようとする石鹼液は私の意志に反して――

何時しか私の目には涙が滲んでいたのを気づいた人は恐ろしくなつたでしょう。

いよいよ今日は退院の日です。誇らしげに我が子を抱いて、お世話になつた看護婦さん達にお礼を言い、私は一階の看護婦室に下

りてゆきました。

「いろいろお世話になりました。お蔭様で退院させて戴きます、どうも本当に有難うございました」

「いいえ、お役に立ちませんで。まあ、可愛い赤ちゃん、一寸抱かせて、おお、よしよ

し」

見るともなしに向うを見れば、緑色のカーテンの向うは、あの処置室です。折しも、「すぐ済みますから、あ、そんなにお腹に力を入れないで」

看護婦さんの声は、まごうことなく、誰か

出産前のあの流腸をされている所なのです。私は忘れかけていた流腸の恥かしさを思い出し、今流腸されている方に「お気の毒に」と心の中でつぶやきながら、倉皇として病院を後にしたのでした。

(おわり)

〔新版〕女体緊縛フォトオンパレード

各組一枚一組(全部送料共)

R組 百花撰

大手札判(印画紙9×13寸)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

R 9	股間しぼり	(須川令子)
R 8	鏡に映つた後手	(伊吹真佐子)
R 7	後手足しぼり	(村田那美子)
R 6	後手猿ぐつわ	(須川令子)
R 5	海老責しぼり	(萩千恵子)
R 4	高小手猿ぐつわ	(花坂道子)
R 3	床間の飾り物	(佐賀美智子)
R 2	海浜に於ける緊縛	(萩千恵子)
R 1	柔肌に強烈な荒縄	(須川令子)

R 32	鎖しぼり晒責	(萩千恵子)
R 31	股間しぼり正面	(伊吹真佐子)
R 30	女学生制服しぼり	(須川令子)
R 29	尻立後手しぼり	(萩千恵子)
R 28	開股しぼり	(川辺砂登子)
R 27	猿ぐつわの魅力	(伊吹真佐子)
R 26	トイレでの縛り	(須川令子)
R 25	立木野外しぼり	(村田那美子)
R 24	緊縛横臥	(厚狭春江)
R 23	足場梯子セメ	(伊吹真佐子)
R 22	いたぶり	(春日ルミと伊吹)
R 21	帆立しぼり	(萩千恵子)
R 20	強烈な梯子セメ	(伊吹真佐子)
R 19	逆さ本吊りセメ	(佐賀美智子)
R 18	逆手吊りセメ	(伊吹真佐子)
R 17	股間しぼり後手	(中塚文子)
R 16	逆エビ責め	(伊吹真佐子)
R 15	高小手しぼり	(加賀利江子)
R 14	変型足しぼり	(萩千恵子)
R 13	松樹後手しぼり	(村田那美子)
R 12	くさりセメ	(伊吹真佐子)
R 11	薄羅の後手緊縛	(加賀利江子)

R 71	股間タテしぼり	(中富綾子)
R 70	首縄股間しぼり	(坂口利子)
R 69	手足逆吊り	(伊吹真佐子)
R 68	和服の後手しぼり	(藤田節子)
R 67	仰向全裸晒責	(川端多奈子)
R 66	後手首縄シメ	(加賀利江子)
R 65	乳房下しぼり	(村田那美子)
R 64	肉体美への折檻	(伊吹真佐子)
R 63	お灸セメ	(春日)
R 62	後手猿ぐつわ	(萩千恵子)
R 61	松樹縛り晒責	(村田那美子)
R 60	コルセット縛り	(中塚文子)
R 59	股間しぼり	(萩千恵子)
R 58	手と足と緊縛	(加賀利江子)
R 57	後手しぼり	(萩千恵子)
R 56	御開帳	(川端多奈子)
R 55	くさりセメ	(須川令子)
R 54	折檻の魅力	(愛川悦子)
R 53	全裸の股間しぼり	(大塚啓子)
R 52	逆立の折檻	(須川令子)
R 51	開股椅子セメ正面	(花坂道子)
R 50	振袖の緊縛	(村井知可子)
R 49	腰元の吊り責	(愛川悦子)
R 48	ヌードしぼり	(田中芳代)
R 47	本縄しぼり	(川辺砂登子)
R 46	股間しぼり	(益田房子)
R 45	落花狼藉の緊縛	(川辺砂登子)
R 44	樹間のハリツケ	(益田房子)
R 43	帆立舟のセメ	(益田房子)

R 100	逆エビ責め	(愛川悦子)
R 99	変型全裸股間縛	(花坂道子)
R 98	ヌード縛り	(村田那美子)
R 97	全裸横臥緊縛	(萩千恵子)
R 96	ビクニツク	(須川令子)
R 95	ハイヒール	(大塚啓子)
R 94	湖畔の宿にて	(田中芳代)
R 93	尻立逆しぼり	(愛川悦子)
R 92	下着の色模様	(花坂道子)
R 91	目隠し開股縛り	(愛川悦子)
R 90	後手高小手	(大塚啓子)
R 89	乳房しぼり	(須川令子)
R 88	開股ベツド縛り	(愛川悦子)
R 87	全裸床柱縛り	(花坂道子)
R 86	亀ノ甲縛り	(愛川悦子)
R 85	ヌード股間縛り	(大塚啓子)
R 84	全裸乱れ髪	(須川令子)
R 83	ガンシガラメ	(愛川悦子)
R 82	臀部丸出し猿轡	(中塚文子)
R 81	破れたシユミーズ	(伊吹真佐子)
R 80	女学生のしぼり	(須川令子)
R 79	仰向開股しぼり	(萩千恵子)
R 78	乳房くさりセメ	(川辺砂登子)
R 77	野外バンド責め	(村田那美子)
R 76	トイレ正面排泄縛	(中塚文子)
R 75	開股正面しぼり	(伊吹真佐子)
R 74	乳房縛りセメ	(佐賀美智子)



『手記』

赤い羽根

(瑠美子の告白から)

須藤 律夫

私がふとした事から、その店に働いていた瑠美を知ったのは、もう二年近くも前の事である。風薫る或る初夏の宵であった。私は従妹に余り似通っているその女に、先ず度胆を抜かれて仕舞ったのである。

『君は僕の知り合いの人に、とてもよく似ているよ』

『あら、そうお』

『何時からこの店に?』

『今日からよ……』

そんな月並な会話から、しかし話の糸口は徐々にほどこけて、二人は相当晩く迄語り合った事を覚えている。それ以来、銀座並木通りのはずれにあるバー「ジョコンダ」に、私は毎日の様に出かけた。と言うよりは仕事の関係か、妙にそんな機会が出来上って仕舞うのだった。自然彼女とも親しくなるし、二年近くもつき合っている中におきやんな彼女は、

かなりの秘事迄も打ち明けて話すようになった。

これからの手記も、実は彼女——対馬瑠美子——が、私に語った事をそのままなのだが解り易く一人称を用いて書く事にした。猶、彼女は北海道、函館の生れで、年は二十五歳弟と上京して働いているのだが、看護婦の経験もあると言っていた。

× × ×

私は自分でも妙な癖だと思い、何時も夢中になったりあとでは馬鹿馬鹿しくすらなるのですけど、矢張り盛り上って来る或る欲求には、とても押え切れないものがあるのです。私に、そんな自虐的な、危険な遊びを教え込んだのも、もとはと言えば偶発的な出来事だったのです。

去年四月の或る日——その日は遅番でしたので、私は洋裁の材料など買ってお店に出たのでしたが——私の番に当たったのは或る洋画会社のセールの人でした。身なりは勿論きちんとしていましたし、好みも流行に後れず仲々モダンでしたけど、その人は今どき珍らしく真珠のネクタイピンを刺して居りました。

お店に来る前に、近くのお店で打ち合せがあったとかで、相当の御機嫌で止り木に座ったのです。バーテンのJさんと朋輩のKさんはカウンターの所でダイスを弄んでいたのですが、しばらくするとそのダイスを取り上げ『どう？ 賭けをしないか？ 君が勝ったら好きなものを御馳走しよう。若し僕が勝ったら……』

『貴男が勝っても……私……困っちゃうわ』

『じゃあ、僕が勝ったら、君のその乳首を当てさせて呉れないか？』

『乳首を当てるの？』

『うむ、このネクタイピンで、どの辺かドレスの上から刺すのさ』

『いや、止してよ、そんな野ばんな事……』

私は真向から反対したのですが、その人はもうネクタイピンを擬して私の胸を狙っているのです。

『止してよ、止して！』

私は夢中で椅子の上に起ち上ったのですけど、それが却っていけなかったのかも知れません。胸を狙ったその人のネクタイピンは、私の腹部の中央へ、そうです、私のお臍の辺へ軽く突き刺さって仕舞ったのです。夢中でそれを抜きとると、

『悪趣味ですわ、こんな事』

そう言っってピンを返したのですけど、初めてのお客にしては幾ら冗談にしても余りにも度の過ぎた悪戯なのに驚きました。

× × ×

今想い返しても、それは春の夜の、それ私も私達にとってはささいな戯れの出来事ではないのかも知れませんが、何故かその事は

数日の間、私の脳裡にこびりついて離れませんでした。それは曾って経験した事もない強い衝動が感じられたからかも知れません。

二、三日してお風呂から上った時、ふと又その事を想い浮べ、私は自室に籠ると、そつと、お臍を覗き込んで見るのでした。体重五〇匁の私は、腹部もわり方豊満の方で、皮下脂肪もかなり厚く、お臍の奥迄見るのには首が痛くなります。その時ふと先日 of 出来事など思いだし、毛ピンを一本とり上げると、この前刺されたと思われる辺りを、そつと突いて見たりしました。初めは「痛さ」と言うよりも寧ろ擦たく感じましたけれど、力を加えると段々擦たさも無くなり、熱さにも似た快い痛みと、痺れるようなうずきとを味う私でした。痛さとは、或る種の快感だと誰かが言いましたけど私には先天的にこうした自虐的な倒錯趣味が内攻していたのでしょうか。

それから四、五日して、私の奇癖は毛ピン等ではとても満足しなくなり、二回目は裁縫に使うまち針を用いました。その日は弟も早くから学院に出かけ、明るく陽の差し込む二階の私の部屋で、先ず鏡台の前に座布団を敷いて端座しました。そしてスカートをずらし

徐々にシュミーズを寛ろげると、ポツカリとした腹部が露われ、その中央は稍、小高くなつて、お臍はこと更に深く引込んでいます。鏡を見乍ら左手で、その周囲を柔かく押えた時、私には昔の人の切腹が連想されるのでした。

消毒用のアルコールも無かったので、咄嗟にマッチを取り上げると、私は先ず針の全体を焼いて消毒しました。その熱が未だ冷め切らない中に、静かにお臍へあてがい、一瞬息を止めて指先に力を入れて見ました。お臍の皮膚は比較的、薄いのです、暫くためらった後、もう一度、息をつめてグツと押し込むと『ブツリ』とした鈍い感覚と共に半糲程も入りましたでしょうか。針が皮膚を貫く時は一寸痛さも感じたのですが、それ程でもなく、それ迄胸の鼓動と共に波を打っていたお腹の動きが鎮まると、今度は静かに少しずつ指先に力を加え、一糲、一糲半と徐々に刺し込んで行きました。一糲半も過ぎると、もう殆んど痛みは感せず、まるで針に油でも塗ってあるかの様になめらかに、音もなく沈んで行きます。これは後で考えた事ですけど、皮下脂肪のためかも知れません。そうして、とうと

うマチ針の根元の球迄突き刺して仕舞いました。針の長さは三糲位もありますので、かなり奥深く突き刺した訳ですが、鏡に映った自分のお腹を見ますと、深く凹んだお臍の奥には黄色の円い球（マチ針の頭）が、にぶく光っているのです。

実際に刺して見て判った事ですが、三糲も突き入れると、少しお腹を動かしてもチクチクと痛みを感じますし、気がついてみると何か私の額には脂汗すら、にじみ出ているのでした。

さて、此処迄はよかったですけど、いざ抜き取る段になつてはたと当惑して仕舞ったのです。その訳は、夢中で突き刺しては見ましたものの、元来、私のお臍は大きさはそれ程でもないのですけど、とても奥深く凹んでいるのです。そんな訳で針の頭を指で摘む事が出来ず、止むなく西洋鉄を使って刃先の交又で針の頭を摘むと、辛うじて抜き取りました。

こんな危険な悪戯も、私には何故か仲々忘れられず、それから機会ある毎に、否、自分でそうした機会をこしらえても続けられて

行くのでした。

最初の経験にこりて、二回目からは容易く抜けるように針の頭に糸を結びつけ、又、針の頭の色も血汐を想わせるような真紅の色を選びました。そうしてこの遊戯を四、五回も続けますと、マチ針では余り容易く入って仕舞うので、何かつまらなく感じるようになりしました。もっと強い刺激が欲しかったのかも知れません。

次に思いついたのは何処にでもある安全ピンです。そのピンの針の方を水平に伸ばし、矢張り二糲から三糲位突き刺すのですけれどこの方が痛さも強かったようです。然し、それにも麻痺して仕舞うと、半ば錆びついた一寸釘を見つけ、何時ものようにお臍に刺し入れたのですが、流石にこれは刺さらず、僅かの出血を見ただけで終わりました。

妖しい自虐の愉しみを見つけてから半年も過ぎると、私は感覚帯が少し違つて来たのに気づきました。それ迄は秘められた欣びのために夢中だったのかも知れませんが、その頃から針を刺すのは或る一点に限られて仕舞ったのです。

「女性長靴フェチに於ける二つの型」^{タイプ}

——映画女優を例にとって——

一ノ瀬悦子

ウィーン性問題研究所の調査に依れば、女性の靴フェチシズムの傾向は、その対象がハイヒールになくて、その殆んどが長靴にあるという。由来、西洋では、長靴は短靴以上に古来より重要視され、好んで着用された故でもあるが、女性の長靴愛好癖には、もっと深い性的コンプレックスに基づくところが多い。つまり女性にとって脚、乃至、肢は男性の性器に代るものであり、それを密着した長い靴で蔽うことは、とりも直さず、女性自身の性的コンプレックスを慰やす手段ともなるのである。こういう私自身、こうしたコンプレック

スを長靴フェチで慰めている一人であり、現にこの文章も、プレイ用のビニールのパンツに太股迄ある皮長靴を穿いて書いている。さて女性の長靴フェチには二つのタイプがある。前者はサド、後者は勿論マゾである。前者の特徴は、主として乗馬のような荒い運動を好むし（勿論これには、弱者を苛める悦虐本能が働いている）、着用する長靴は固胴の七分長靴乃至膝下のハイブーツが多い。マゾ型になると乗馬等は余り好まず、専ら長時間の雰囲気を楽しむようである。だから着用する長靴も活発な運動に適さない、軟い皮の

びったりした拘束感の強いものを要求する。この傾向がひどくなると私のように膝上迄ある大長靴（これは歩行に困難だし、坐ることも窮屈である）を好むようになる。然し両者の共通する点もある。それは、共に黒い強い光沢ある長靴を愛好することである。茶、赤の長靴は殆んど長靴フェチにとって意味はないし、又バックスキンとかセーム皮の長靴など問題でない。飽迄牛皮の重々しい重量感と強い黒光りのする長靴がウェチステインの欲望の対象なのだ。こうした長靴フェチのタイプから私達が日常スクリーンに見る女優達



西部の女勇者「厄病神ジェーン」に扮して颯爽とムチをふるうドリス・デイの勇姿。

のフェチ傾向を見よう。

先ずサド型としてエリザベス・ティラー、ジーン・シモンズ、スーザン・ヘイワード、を挙げることが出来る。この例は意外とされる向がある。それは彼女達は何れも可憐な娘役で虫も殺さぬ女であるからだ。然しよくよく観察して見ると、彼女等は中々芯のしっ

かりした女であり、或る種の底意地の悪い女なのである。真の意味での悪女なのである。この中でもティラーが一番サジステイックな傾向が強く、少女時代、既に長靴姿を見せた（註、「緑園の天使」）が、最近になると、性生活の乱れと共に私生活を地でゆくスクリーンの彼女の姿である。ジーン・シモンズは

ティラーに比べれば遙かに清純型ではあるが長靴フェチはティラーよりひどく、サジステインとしても、その乗馬のうまさからも想像される、スーザン・ヘイワード位長靴姿の好きな女性はいまい。「蛮地の太陽」の如く、丁寧に長靴をいじくり廻す場面から終始、彼女の全身像を映つさせ、その長靴姿を誇示していたのである。

長靴マゾ型の女性は、比較的骨格型の大柄の女性に多いのである。例えば、リタ・ヘイワーズ、ドナ・リード、モーリン・オハラがそれだ。リタは、傑作(?)「ギルダ」で長靴を穿いた。リオのカーニバルの仮装である。長い絹靴下の上に軟かいエナメル仕上のハイヒール長靴、その姿は優美で且つエロチックでさえあった。多分の此の姿はアリ・カインを悩やませたであろう。最近では、「コロラドへの道」で完全なマゾ女性として終始長靴姿を見せた。私は注意して観ていたが、彼女の長靴は余程長いのか、クライマックスのトロッコを身体ごと押して坂を登る場面すら、長靴の端を見せなかった。この時の彼女の長靴は細身の軟皮の如何にもぴったりのものであった。

知的女優ドナ・リードが魅力あるブーツ・

毎日こんなに

浣腸されている！

川崎 進一

毎日一万三千人が浣腸されていると言ったら驚かれるだろう。しかし一万三千人は極く内輪な数字であって事実には二万、或は三万人といっても過言ではないかもしれない。どこにそうした根拠があるのであろうか。

ここに厚生省が発表した統計「厚生指標、昭和三十四年度版」がある。それを繙けば、医薬品の項に次のような数字がのっている。

下剤及び浣腸剤（単位 100万円）

	昭和31年	昭和32年	昭和33年
軽便グリセリン浣腸剤	372	362	164
ヒマシ油	14	16	7
硫酸マグネシウム製剤	13	12	13

即ち、昭和三十一年には、軽便グリセリン

ン浣腸剤、つまり、イチジク、ハート十字東宝等のポリエチ容器入りの軽便浣腸剤が三億七千二百万円生産されたのであり、同様に三十二年には、三億六千二百万円、三十三年には生産額は大幅に減ったとはいえ、一億六千四百万円も生産されているのである。そしてこれが、一般に下剤として用いられていると言われるヒマシ油の七百万円（三十三年度）硫酸マグネシウム製剤の一千三百万円（三十三年度）に比し、実に十数倍から二十数倍もの生産額であることに注目して戴きたいと思う。毎日の新聞広告にビタミン剤と共に数多くの緩下剤の広告をみるにもかかわらず実に多量の軽便浣腸が使用されている事実が数字を以て語られているのである。では筆者の作製した次表をみて戴きたい。

スタイルになったのは「六番目の男」であった。彼女はあの映画の三分の二は長靴姿で押通したが、その長靴は、黒色の端を折返したものであった。あの長靴は多分膝頭の上迄くるのではないか、恐らく彼女は本番以外は長靴をそうした形で穿いていたのだろう。

モーリン・オハラになると更に極端である。私が彼女の長靴姿を見たのは「西部の王者」であった。この時は、おとなしく、スタンダードな西部ブーツ（七分長靴とでもいうべきか）を穿いていたが、真骨頂を見せたのは、「劔豪ダルトニヤン」であった。この映画中殆んど長靴姿であり、しかも長靴は、太股迄あるジャック・ブーツであった。最初の騎士長靴は穿くところから丁寧に見せだし、最後に穿いたエナメル仕上のピカピカ光るジャック・ブーツは長靴狂を狂喜させる程魅力的であった。しかも彼女はあの重い長靴を穿いて、猛烈なチャンバラをするのである。長靴マゾ・フェチの所以はここにある。彼女の長靴フェチは次作「凡ての旗に背いて」に至って一段と輝き増した。題材が海賊物のせいでもあるが、彼女は丸腰でジャック・ブーツだけ穿いて街をカッポするのである。長靴は前作より一段と優美となり（コスチュームを

	31年	32年	33年	備考
軽便グリセリン浣腸剤 生産額	3億7200万円	3億6200万円	1億6400万円	厚生省発表
同上生産数	1062万個	1034万個	467万個	1個35円平均として
同上1日当使用数	29,100個	28,300個	12,800個	1年365日として

厚生省発表の軽便浣腸生産額を生産個数に換算したものである。即ち、軽便浣腸には一個二十五円の小児用から、大人用三十五円、強力四十五円とあるが、平均をとって一個三十五円とするならば三十一年には一千六十二万個、三十二年には一千三十四万個、三十三年には四百六十七万個が生産されている訳である。

さて、年間の生産個数が判明するならば一年三百六十五日として一日の使用個数は自ら明らかとなる。即ち、三十三年には一万二千八百個、三十二年には二万八千三百個、三十一年には、実に毎日二万九千百個が使用されているのである。言いかえるならば、毎日一万三千人もの人が、浣腸の苦責にあえいでいるのである。

だが、賢明なる読者は既にお気づきのことと思う。軽便浣腸のみが浣腸ではない。軽便浣腸は、その極く限られた一部である

という事を、即ち、一般家庭においてこそ軽便浣腸が使用されるけれども病院では殆んどがイルリガートル浣腸、或は卿筒式グリセリン浣腸であり、医者が往診等にて施す場合は、まず卿筒式グリセリン浣腸であること。更に一般家庭でも、このガラス製のグリセリン浣腸器を常備する傾向が多くなつた事を思いあわせるならば、この厚生省発表による毎日一万三千人は、ほんの極く一部の限られた数字である事が分ると思う。浣腸は秘め事である。通常は浣腸の場面に遭遇することはまれであり、又口にする人も少い。しかしながら、この数字が示す通り、今日も、何万人かの人、幼児も居る。老人もある。産婦も、又年若き女性も羞恥に身もだえしているかも知れない。或はマニアのプレイも少くないかも知れない。何れにせよ、今夜も、たったこの今の瞬間にも、便意の苦痛を懸命に我慢している数多くの人々がいる事が想像されるのである。

担当したのは、前作と同じエドワード・スチブンスンだったが、下半分は軟胴仕上の乗馬靴のようにぴったりし、上半分は、固い皮で毅然として、彼女の太股の附根迄蔽っていた。多分、彼女自身、此の長靴のスタイルを考え、製作させたのだろう。この映画では、前作のような活発な場面が少くて、彼女が恋に悩む場面が多く、女性の弱い面を見せているのが、その長靴姿と対照的であった。殊に愛する男に裏切られたと思って、酒を啜り、嫌いな男に長靴姿のまま身を委せようとするシーンなど長靴マゾとして、永遠に記憶されると思う。

今上げた例など、マゾ、サドのはんの一例だが、外国女性には、とても長靴フェチが多いと思う。ひるがえって我国を見ると長靴の歴史が新しいせいか、誠にそうした人が少ないのがっかりする。近頃、女性間にとっても乗馬が流行しているが、もっと深く考えて、長靴フェチになって頂きたいと思う。長靴の魅力は無限で尽きることはない。それはマゾにとっても、サドにとっても。(終)

次号

一ノ瀬悦子

一悦虐者の回想 「狂宴」

連載小説

『宇宙のどこかで』

Ⅱ 無期懲役囚の手記より Ⅱ

佐 治 麻 造

四 馬 孝 画

減 刑

意識を回復してから十日近く経ちました。午前十時頃でしょうか婦人看守がつかつかと入って来ました。あのやさしい方の看護婦も一緒です。久し振りで見る看守の制服に心も凍る思いがして震え乍ら上半身をネジ起し両手を合わせて挨拶をしました。

「横領、強盗、暴行及び傷害致死罪にて無期懲役の判決を受けました九二五号囚は……」

「フン。どう？天国みたいだったろう」

「ハ、ハイ、ほんとに勿体ない位でございます。」

「うまくやったわねえ。命が助かったわねえ。これから言渡しをして頂くのよ」

慣れた目と手付きで鼻環と抱束錠の検査、そしてベッドから解かれました。

「ベッドの下の引出しに、お前の戒具があるから、さっさと嵌めるのよ」

顎をしゃくられて、大きな引出しをあけますと、あのきびしい戒具が重量感を示して鈍く光って居ます。情なく思いましたが、看守

の命令にそむく訳にはまいりません。先ずあの重い第三種足錠を両足首に嵌め鎖で結びます。

手錠を外して貰い、腰枷を嵌め足の鎖を腰に吊り、両手に手錠の枷だけ嵌めて首枷を取上げて自分の首に仮に嵌めて跪き、錠を下ろして貰いました。両手を水平に挙げて両腋に腋鎖を締められます。もはや身動きする度に首枷が音を立て、腰や足の鎖が鳴ります。

看護婦は眉をひそめて、そんな哀れな私の姿を眺めていました。胸の両側に喰い込む腋鎖の痛さに齒を喰いしばり乍ら、自分の両手を後手に固定します。

「戒具をつけさせて頂きました。有難うございます。嵌口具を御願ひ申上げます」

ガッキと頑丈な嵌口具が嵌められ鼻に鎖がカチリとつきました。

「お歩き」

ピシリッと背中に革鞭が炸裂します。

「ぎゃお——っうっうっう……」

久し振りの革鞭に思わず身もだえして嵌口具の中で呻きました。

「あ、あっ看守さん、余り鞭打たないでやって下さらない？未だ……」

「分ってますよ。けど、少しはシャッキリさせないとね。つけ上るわよ」

此れが囚われの身の当然の姿とは云え、腰をかがめ膝を曲げ、重い戒具の拘束感をひしひしと感じ乍ら曳かれて行くのは、本当に情ないものです。浅間しい戒具姿を社会の方々の目に晒すのは久し振りでです。恥かしくて身のすくむ思いです。執行課へ連れて行かれ課長の前に正座平伏します。

「九二五号囚。其方の刑を特に一等減じ終身懲役刑とする。なお此の減刑には被害者の方の御慈悲が大きく影響している故、決して御恩を忘れない様にしろ」

ついで例の鉄格子の中で首枷の鉄札がつけ替えられ額、背中、胸の赤いマークが刷直されました。今度の囚人番号は二五〇号です。曳かれて執行課を出る時、入れちがいに六、七人の囚人が鉄格子の中へ追い込まれました。

今、刑の宣告を受けて来たばかりの囚人達が既決囚として処理されるのです。

婦人検事の調室へ連れて行かれ平伏して待ちします。

「横領、強盗、暴行、並びに傷害致死罪により……死刑の御宣告を受けました二五〇号は……有難い御慈悲を以て特に減刑して頂き……終身懲役刑に……処せられました。……ありがとうございます。神妙に刑を受けさせて……」

「ああ、もういいわよ。どお？絞首台の上に坐った気持は。え？死刑囚だった時の心持を忘れるんじゃないよ」

「ハイ。決して忘れません。死刑にして頂いた気持どの様な……取扱いを受けましょうとも、喜んで……刑に服させて頂きます」

「ではね。あと五、六日、病監で休んで、それから神妙に刑を受けるのよ。」

ああ、未だこれから数日間病室での天国の様な生活ができるのです。再び嵌口具を嵌められ平伏して身を起した時、扉が開いて一人の女囚が引立てられて入って来ました。赤い禪一本の裸、頭は勿論、短く刈り取られ、背と胸の番号は四二号の黒文字です。後手錠と足錠は第一種です。先程、刑の宣告を受けた女囚だと思いまし

た。スラリとした長身で白い肌には鞭の痕が幾条もむごたらしく、脂汗を全身に浮べ乍ら。膝行して来て検事の前で崩折れる様に平伏します。婦人看守に首枷を纏んで引起され嵌口具を外された女囚の顔には、見おぼえがありました。

「挨拶しないの？」

恰好のよい尻に鞭が鳴ります。

「ヒーツヒーツ、申し…申上げます。………」

……文書偽造罪で起訴して頂きました四十二号囚……懲役五年、執行猶予三年の御宣告を頂きました。……いろ／＼と…ありがとう…ございました…」

「それだけかい？」

「……ハ、ハイ、それから……猶予期間中は…公民権を剝奪され…して頂き……検事様の定められる期日毎に…定められた場所に出頭して……御調べを受けさせて頂く様に……と申渡されました…」

私は女囚の屈辱に途切れ勝ちの声を聞いて居る中にずっと前、やはり此の室で私が死刑囚として宣告された際、私の眼前で逮捕状を執行されたあの若奥様風の変り果てた姿であることが判りました。あれ以来、拘留され未決囚として屈辱に満ちた日々を過ごして来たであります。此の女囚は執行猶予の恩典に浴して一応、拘束を解かれる前の最後の辱かしめを受けているのです。

「ウン。ではと。毎週一回、そうね、今日は火曜ね、じゃ毎週火曜



日の朝八時迄に当拘置所の執行課へ出頭しなさい。毎日、日記をつけること。出頭の際は、あとで渡す猶予囚手帳と、戒具と禪と二食

分の弁当を持って来るのよ。夜の八時迄、みっちり調べてやるからね。遅れたら懲戒よ。詳しいことは手帳に書いてあるけどサボッタ直に監獄行よ。分った？」

「ハイ、よく、判りました」

「渡して貰う戒具なんかはよく手入れするのよ。大きな顔して暮すんじゃないの。いい？」

女囚は口惜しそうに唇を噛み乍ら身悶えします。

「よくよく分りました。御願いです。早く自由にして下さいまし。…手錠も足錠も締まってしまつて…ほんとに痛くて…ああ…切ない…早く外して下さい…」

「フ、フ、フ、まあそうあわてないでね。ゆっくり手錠の味を味うがいいね。しかしお前の旦那さんて本当にいい人ね。罪人のお前を温かく迎えて下さるんだから。午後、迎えに来るそうよ。それ迄そうしてなさい。そして旦那様に外して頂くといいじゃないの？フ、フ、フ、フ」

「あっあっ、それだけは…そんな…御慈悲です…あんまりです…（あーん）」

女囚は身をもんで大声で泣き始めました。

「うるさいわね。じや外してあげようか…」

眼配せを受けた婦人看守によって首枷以外の戒具が次々と外されました。微かに嗚咽し乍らも嬉しそうに手錠の痕をさすって居る女囚に冷酷な言葉が与えられます。

「御望み通り手錠も足錠も腰枷も皆、外してあげたわよ」

「ハイ、ありがとうございます」

「じや今度は御縄を受けなさい。看守さん、捕縄使える？」

「検事さん、自慢じゃありませんけどね。捕縄術は優等ですよ。何と云つたって囚人には縄を掛けるのが本来なんですからね」

中年の婦人看守は、捕縄の束を取出して女囚に近寄ります。

「ま、参考迄に縄の味も教えといてあげる。手を後へ回して…」

全身に悲哀を表わして哀願する女囚は看守の一睨みに縮み上って後を向き、改めて両手を後へ回してうなだれました。

婦人看守は縄捌きも鮮かに、ひしひしと本縄を掛けてゆきます。

胸縄がぎゅっと締められました。

「…捕縄、ありがとうございます…」

上半身を前に倒すと、ぎゅっと締まる首縄と股縄の苦しさ痛さに声を途切らせ身もだえし乍らも、骨身に叩き込まれた囚われの身の慣わしで、女囚は捕縄を掛けて貰った御礼を申上げるのでした。

「どお？捕縄の味は。午後三時迄はお前は未だ拘束中なんだからね。じや看守さん、執行課の前の廊下に繋いどいてよ」

「承知しました。これ四十二号。声を立てるとこれよ」

嵌口具を眼の前で振り回された女囚は情けなさそうにあえぎましたが、検事に挨拶してよろよろと曳かれて行きました。

「アラ、九二五号…じやない二五〇号、まだいたの」

嵌口具をガッキと嵌め直された私は鎖を鳴らし乍ら引立てられます。執行課の入口の廊下には既に女囚四十二号が繋がれて立ちすくんで居ました。両膝に短い鉄の棒を挟まされ、出入される職員や廊下を通る人々から辱かしめられ、気の向いた方からはビンタをくらわされて御礼を申上げています。きびしい戒具の我が身も忘れて「辛いだろうな」と同情してしまいました。

病監へ帰り重い戒具を外して貰い、自分で前手錠を嵌めさせられ

看護婦に引き渡されます。「戒具の手入れをときなさい」

立去られる婦人看守を合掌して送り、床に正座して油布で戒具を磯きます。

「ずい分と頑丈なものねえ。こんなもの嵌められて毎日、暮すのね。ほんとに辛いだろうと思うわ。それやそうと、どうだったの？」

「ハイ、終身懲役でございます」

「やっぱりねえ。可哀想だけど諦めるのよ。どうともならないんだから」

戒具を磨き終えて引出しに納めベッドに横になりますと、看護婦が鼻と右足首に鎖をつけてくれます。前手錠ですから当然、自分でしなければならぬ訳ですが、やさしい看護婦の綺麗な御手が肌に触るのが嬉しくて甘えてしまいました。きつい方の看護婦の時でも既決囚監房の扱いに較べれば物の数ではありません。天国の様な五日間は、あつと言う間に過ぎ、六日目の朝、女医の診察後、看護婦から申渡されました。

「あんた。可哀想だけど明日、退院よ。神妙にして余り痛い目に遭わない様にするのね」

「ハイ、看護婦様。二五〇号囚は、あなた様のお慈悲は死ぬ迄忘れません。本当にもう、何と御礼申上げたらいいか……此の通りでございます」

手錠の嵌った両手を合わせて伏し拝みました。

「そう。そんなに有難がってくれると嬉しいわ。ちょっと手を出して」

鍵で手錠を外して下さいました。

「これからは、もう手錠を嵌められっぱなしだろうからね。今夜ま

で外したげるわ」

「あつ、そんな……勿体ない、御迷惑が掛るといけませんです。こんな前手錠位、もうそんなに辛いとは思って居りません、どうぞ嵌めと言って下さりまし……」

「まあ、いいじゃないの」

美しい微笑を浮べて出て行かれ食事を持って来て下さいました。

私は嬉し涙にむせび乍ら自由な両手で食事をしました。自由な両手を体の両側に伸して仰臥していますと、このままで、せめてもう三、四日、過したいものだと考え、明日から此の身に加えられて外されることのないきびしい戒具を思って胸が塞がる思いでした。

夕食後、暫くすると帰支度を整えた看護婦が入って来ました。薄化粧をしてブリーツスカート、ハイヒールの姿は本当にまぶしい程です。

「じゃ、さよなら。もうこれで御別ね。おとなしく罪の償いをするのよ。分った？」

「ハ、ハイ、御恩は忘れません。どんな辛い刑も御言葉を守って……受けます……」

できることなら床にひれ伏して御礼を申上げたい位です。涙が止めどなく出ます。

「それからね。知ってるかも知れないけど、あんた終身刑でしょ。

けど自由になれる道もあるのよ。早く奴隷の資格を取るの。そうすると奴隷にして貰った時、残ってる刑期は半分位になるらしいわ。終身刑だって有期になるのよ」

そう云うことも聞いては居りましたが、今このやさしい看護婦からうかがって希望が湧きました。

「お前だって自由の身になりたいでしょ。本当に神妙にしなきや駄目よ。お前みたいな者が、あんな怖しいことする様には、私には思えないけど、そんなこと云っても仕方ないものね。どんなに口惜しくても情なくとも辛抱するのよ」

扉が開いて若い男が入って来ました。

「おい、何ぐずぐずしてるんだい。早く行こう」

若い男は看護婦の首筋にキスしました。

「あら、そんなことしちゃいや」

恋愛の相手なのでしょう。看護婦は忽ち溶ける様な表情を浮べました。

「あ、そうそう。手をお出し」

両手首に手錠が冷く嵌まりました。気が滅入ってしまいそうです。

「こんな懲役囚なんか、どうなったっていいじゃないか」

「そんな訳にも行かないわ。これ終身懲役なのよ。」

「へええ、ちよっと気の毒みたいだな。まだ若いのにね。おうおう、こんなもの嵌められてさ」

私の錠を指さして嘲けます。

「…ねえ、あなた、こんなもの嵌められて辛抱できる？」

「冗談じゃないよ。二日で気が狂っちゃまう」

「……ホ、ホ、ホ……」

二人は私の目の前で軽くキスして、あとも見ずに出て行きました。扉に錠の掛る音。楽しそうな二人を見て本当に恨めしくなる程です。今更の様に囚われの身の悲哀を感じました。

「ああ、自由になりたい。社会に帰りたい。」と物狂おしく考え、手錠の両手をもがき鼻の鎖を引っ張り、何とかして外せないものか、

等と悶え乍らベッドを涙で濡らして悶々の一夜を送りました。

既決 四

翌朝、食事を済ませるや否や、婦人看守が入って来ました。もはやベッドとも御別れです。鼻鎖と右足の鎖をベッドから解かれ鞭の一撃。

「戒具様。又、御世話になります。何卒よろしく御願ひ申し上げます」

重い戒具を一つずつ押戴いて自分の身体に施して行きます。足錠、腰枷、手錠、そして首枷と腋鎖を嵌めて貰い、我と我が両手を後手に固定しました。これからの生涯をこうして過さねばならないのです。見物して居る看護婦にひれ伏して御礼を申し上げますと、軽く頭を踏みつけて下さいました。嵌口具を嵌められ両手を自由度二の前後にされ便器やベッドの始末をさせられ、床を這いずり回って磨かされた後、後手錠にさせられて監房へと曳かれました。既決囚監房も今迄の監房と余り違いはありません。

嵌口具だけ外され文字通り蹴込まれます。コンクリート床の上に壁に向って正座しました。もはや私は懲役囚なのです。身動き一つすら自由にはできない哀れな身になったのです。諦めてはいるものの、情なくて涙が流れました。暫く安楽な生活をさせて貰って居たので久振りの戒具のままの正座が苦しくて切なくて堪りません。思わず両足を坐り直して少し息をついた途端、忽ち発見されて太腿に革鞭を加えられ、うっかりと御礼を申上げるのを忘れたので息が止まる程の一撃を胸にくらってしまいました。

後手錠のまま犬の様に這いつくばって食事をしなければならぬ屈辱感。今後、手を使って食事できることは先ずあるまい、と考え

ますと情なくてなりません。

昼食後、執行課へ曳かれ心得を申渡されました。

「……分ったかい？暫くしたら監獄へ送ってやるけど、それ迄はここで御礼奉公よ。御手数を掛けた御恩返しをするの。懲戒は容赦なしだからね。云っとくけど懲戒で死んだって構わないのよ」

久し振りの後手錠のままの睡眠の苦しさ、両腋鎖の残酷さ、しかし、もはやこれが日常の姿なのです。此の苦しさ辛さは懲役囚として当然、味わねばならないものなのです。拷問なら自供すれば赦されるでしょう。懲戒なら定められた期間が済めばいいのですが、此の房内、後手錠、両腋鎖は刑期中は先ず除いては貰えなのです。

覚悟はして居りましたものの懲役囚と云うものの惨めさが泌々と感じられ、これから一生こうして過すのかと思いますと、大声で叫びたくなるのでした。

「横領、強盗、暴行、並びに傷害致死罪。終身懲役囚二五〇号。戒具及び身体異状ございません。」

朝の点呼に続いて、みじめな犬のような食事と云うより餌です。洗顔して口をすすぎ両手に食器を持ってする食事は、もはや私には許されないことなのです。七時になりますと殆んど全部の既決囚が曳き出され嵌口具を嵌められ次々とシャワーを浴びます。勿論、後手錠のままですから只、浴びるだけです。シリコン処理をしてある戒具は水位掛っても何ということはありません。裸身をすり合わせ乍ら一列に並んで注ぐ水で身体を濡すのです。私は一人で婦人看守に引き立てられ婦人検事の調室へ行き、そこで前手錠にされて床の拭掃除をさせられました。慣れないので勝手が分らず、そうかと云っても嵌口具の身は看守に訊ねる訳にも行かず、半分しか教えてく

れない看守を恨めしく思い乍ら革鞭で追い立てられ這いずり回って床を磨かされるのでした。

やがて事務員の婦人が来て机の上を掃除します。私が床に埋込である鉄鎖を磨かされて居りますと、扉が開いて一人の婦人が顔を出しました。横眼で見ますと此の前の執行猶予の女囚です。粗末な和服で面白粉気はなく、風呂敷包をかかえて、おずおずと入って来ました。

「お前さんは誰なの？」

「ハイ、あの執行課で此処へ行く様に云われましたので……。あの……猶予中の者なのですけど……」

「ああそう。じゃ向うの隅で壁を向いて立ってなさいな」

まだ八時ちょっと過ぎですが、やがて婦人検事が事務員の知らせでもあったのか、隣室から入って来ました。片隅で此の室の人達の靴を磨いている私に冷い一べつをくれてから猶予囚の方へ声を掛けます。

「お前かい。ここへおいで」

ビクツとした婦人は机の前に正座して

「執行猶予囚第三十七号。御命令によって出頭致しました。……何卒お取調の程御願ひ申し上げます」

「フン。先ず先ず神妙ね。猶予囚手帳を見て……それから日記と。」手帳に印された出頭日時証印を検査してから、ついで冷酷な言葉が与えられます。

「ともかくね。禪をつけなさい。かつらも取るのよ」

恨めし気に衣服を全部、脱ぎ赤禪を締めさせられた婦人は先週迄の辱かしめを思い浮べたのでしよう、微かに肩をふるわせます。両

腕の二膊部に猶予囚番号が刷込まれ、白い肌のおちこちには革鞭の痕がまだ残っています。首枷や手錠、足錠の痕は整形手当を受けたのか殆んど消えていました。



「看守さん、渡してある戒具の手入れを調べて下さらない？」
「はい……そうですね、先ず先ずです」
「それじゃ嵌めて」

冷く顎をしやくられた婦人は情なさ唇を噛み乍ら自分の両足に第一種足錠を嵌め、腰に革枷を締め、そして両手に前手錠を嵌め、看守に手錠と腰枷を繋いで貰いました。しょんぼりと正座した婦人に対して検事は日記をパラパラと見ながら意地の悪い質問を浴びせます。ままならぬ両手を腰の所でもがき乍ら必死に弁解する婦人。

「……ま、ともかく余り神妙な暮し振りとは云えないねえ。今日一日そうして向うの隅で立ってなさい。それから、忘れない中に云っとくけど、今度からね、此所に来る前に駅前警察署で手錠を嵌めてもらって来るのよ。足錠は赦したげる。自動車に乗っちゃ駄目。歩いて来ること。分ったかい？」

「……そ、そんな……恥かしい恰好を。かんにんして下さいまし。御慈悲でございます……」

「私のいいつけが不服なのかい？」

看守の鞭の下で悲鳴をあげた婦人は、よろよろと立上り隅の壁に向って立ちました。

「この男を見なさいよ。終身懲役なのよ。お前なんか今日一日、辛抱すりやいいんじゃないの。神妙に反省しないと玄関口へ繋ぐわよ」
重い第三種手錠のまま靴を磨き終えた私は直ちに後手にされ、鼻鎖を曳かれて出ます。控室には既に二人の未決囚がうなだれて繋がれていました。監房へ蹴込まれ正座の苦業が始まります。午後、何の反則をしたのか女囚が一人、監視台の前で電気鞭の懲戒を受け、此の並のものとは思えない悲痛な呻声を立てました。暫くすると隣の監房の囚人が鉄砲手錠で締め上げられたらしく苦しみ悶える様子です。全く此の世の地獄だと思いました。

夜は夜で腋鎖に責め苛まれます。以前につけられた胸鎖よりは幾分ましですが、これからずっとつけられるのだと考えますと、その辛さが骨身にこたえます。翌朝も又、検事の取調室の床掃除です。机の上等を整理していた婦人事務員に気が付かずつい、うっかりと足に頭をおつけてしまいました。

「まあ、汚らわしいわ」

鋭くのしられ頭を蹴られ太腿に革鞭が飛びました。婦人職員は事もなげに云います。

「看守さん。懲戒しといてよ。そうねえ、鉄砲手錠、海老責がいいわ。ああ汚らわしい」

苦役を済ませ曳かれる私と、すれ違いに一人の中年の婦人が看守と共に入って来ました。地味な洋装をして居りますが矢張り未決囚であるらしく、洋服の上から腰枷を嵌められ前手錠を腰に固定され

腰枷に結んだ捕縄を看守が握って居ます。頭髮も切られて居ませんし首枷も足錠ありません。私の浅間しい姿をさげすむ様にジロリと眺め、椅子に坐ります。

「手錠外してよ。あばれも逃げもしませんわ。選挙違反じゃありませんか。兇悪犯人扱いはよして下さい」

「御気毒ですけど規則です。検事がお見えになったら外して上げます。」

同じ囚人でも破廉恥罪とそうでないのとはちがうんだなあ、と羨ましく思い乍ら監房に入れられ、暫くすると婦人看守が鉄の道具を持って入って来て後手を解きました。先刻、云い渡された懲戒を思い出し震え上ります。渡されたゴム引きのおしめカバーの様なものをビッシリと穿かされ、先ず鉄砲手錠にされます。右手を肩越に、左手を下から背中中に回し、手枷の錠孔と錠孔を連結した器具の把手を回されますと次第に両手首が接近し肩と腕に苦痛がジリジリと加わります。把手を固定した婦人看守は、今度は、いつかの海老責の女囚の時、見た筒状の器具を取上げました。

「お、お慈悲です……この上に海老責にして頂いたら……体がバラバラになってしまいます。……お願いです……」

哀願する私に冷笑を浴びせ乍ら右腋下を軽く擦ります。

「あうっう、うっ……」

身もだえしますと左の腋鎖が更に胸に喰込み激痛が両肩から脇腹に走りしました。

「あぐらにして。」

命じられるままにあえぎ乍らあぐらに坐り直しますと、足の鎖が短くされ、ついで筒の一端の鉤が首枷につけられ前に引き倒されて

足鎖の中央に他端の鈎がつけられます。既に少し前にかがんだだけでも上半身はバラバラになりそうなのに、更に看守の回す把手でジリジリと筒が縮まります。

「あうーう、ぎえーううう御ゆるし……下さりま……あ、うう、ーっ」

其の苦しさ痛さ、便が洩れるのが微かに感じられます。

「鉄砲海老は始めてだろ。この位にしとこうかね。じや一時間よ」鼻鎖で床に結ばれ尻にハイポンが射たれます。失われかけて行く両肩の感覚が再び激痛を伴って甦りました。ほんのちよつと当っただけなのに此の様な苦しみを与えられるとは。あの婦人職員の方は、今はもう私のこと等忘れてしまっていることでしょう。これが懲役と云うもののなのです。口から泡を吹き、よだれを垂れ流し、眼が昏み乍らも失神しない身を呪い、我知らず陰惨なうめきを洩らし乍ら、本当に死ぬ思いで一時間を苦しみ通したのです。

やっと赦されました時には、床は涎れと脂汗でしっとり濡れ、ゴム猿又の中は洩らした便で一杯でした。シャワー室でゴム猿又と体の始末をさせられました。手が動きません。容赦なく加えられる革鞭を恨めしく思い乍ら必死の思いで我と我が両手を後で錠を下ろし懲戒の御礼を申上げるのでした。

「どう？ 苦しかったかい」

鉄格子を施錠し乍ら皮肉たっぷりに言います。

「あの位のこと、と思うだろうけど、懲役囚の分際ってものは、そんなものなのよ」

本当にその通りです。今更の様に自分の分際を身に泌みて知りました。

其後ずっと続けて毎朝、検事の調室の床掃除です。四六時中、後手錠の身には、たとえ苦役を課せられるにせよ、前手錠にさせて貰えるのが嬉しく、毎朝、曳き出されて鼻鎖をカチリと嵌められるのが待ち遠しい位でした。

一週間経ちますと又あの猶予囚がしょんぼりと現われました。両手には冷く手錠が噛み短い鎖の中央に鉄の札がついて居ます。ここへ出頭する前に駅前警察署で嵌められた手錠の時間の証明らしいです。やがて婦人検事が来しました。

「……執行猶予囚第三十七号。御命令により出頭致しました。なお、途中、駅前警察署で前手錠を嵌めて頂いて参りました。何卒、存分に御取調の程御願ひ申上げます」

「フン。……七時二十分か。よしよし。どお？ 途中、恥がしかったかい？ 歩いて来ただろうね。え？」

「ハ、ハイ、……もう、次からは……かんにんして下さいまし。皆さんに見られるのが辛くて……辛くて、ほんとにもう……」

「フン。まあ、とにかく裸になって戒具を着けなさい」

婦人は情なささをこらえて洋服をぬぎ、赤い褌を締め、そして手錠腰枷、足錠のみじめな姿で片隅に立つのでした。

辱かしめ

其日の午後、例の猶予囚の白い身体を思い浮べて、あれこれと想像しては拘束の痛さに呻いたり、近くの監房から聞える鉄砲手錠の責苦の悲鳴を聞いて震え上ったりして居ますと、嵌口具を嵌められて引出されました。

総務課で若い婦人職員から言渡されます。

「二五〇号。お前を見物し度いとおっしゃる方が来られたからね。うんとからかって頂きなさい。云々とくけど社会の方々に対して分際にはない様なことすると最低、電気鞭五個よ」

一体、誰だろうと考え乍ら見物室へ曳かれ、室の床の中央辺りに埋めてある三十程の太い鉄鎖に足を繋がれ、ひれ伏してから床から突出して居る鉤に鼻環を嵌め込みます。少し離れたところにペダルがあり、それを踏むと鉤が外れる仕掛けです。二十分も待ったでしようか、婦人連の声がして、ひれ伏した私の前に立った様子です。上眼使いに見ますと、一組の社会人の男女と、そして婦人職員の足が見えました。悩ましい香料が匂います。

「これかい？ フーン、二五〇号囚か」

男の方の低いさびのある声。

「ねえ、あなた。どう？此の哀れな恰好」

其の声は妻の、いや嘗て自分の妻であった者の声ではありませんか。私は体中がカッと火照る様で思わず身もだえしました。首の音響器が鳴ります。

「これっ。じっとしてるの」

婦人看守の鞭が脇腹に鳴り、男女二人の客は声を合わせて低く笑うのでした。

「顔をごらんになりますか？ そのペダルを踏んで下さいな。二五〇号。正坐」

恥かしさと情なさになだれますと又鞭です。

「あいさつをさせましょうか」

嵌口貝を外された私は容赦のない鞭の下で途切れ途切れに屈辱の言葉を言わされました。

「…横領、強盗、暴行、並びに傷害致死罪により死刑を…宣告されましたが御慈悲を以て…刑を減じられました終身…懲役囚二五〇号…でございます。此の様な…浅ましい姿を御目にかけまして…申訳ございません…何卒御存分に…辱かしめて…下さいまし…」

「フーン。命が助かつて嬉しいだろうね。けど、一生そんな風にして鎖に繋がれて過すのも楽じゃないわねえ。今日はね、お前に未練がないことを示せて主人がやきもちを焼くのでね、ホホホ、ちよつとからかいに来たの。どう？御気分は。フフフ」

口惜しさと恨めしさに胸が一杯ですが如何することが出来ましよう。一段と艶やかを増した嘗ての妻の粹な和服姿を仰ぎ見て涙がこぼれるのを、どうすることもできません。

「ほう。泣いてるじゃないか。えーと、二五〇号さんよ、身から出た錆と諦めるんだな。ちよつと立って見な」

鎖をジャラジャラ鳴らして哀れな囚われの姿を二人に見て貰います。

「二五〇号。御慈悲を御願ひしてごらん」

「ハハイ…御慈悲でございます。御手数でございますが、御手ずから鞭など足蹴なりと、頂かせて…下さいまし…」

「あの奥さん、鞭打ちたい処をおっしゃれば、其の様な姿勢をとりますから。はい鞭」

看守から渡された革鞭を私の服の前で振り乍ら冷く言います。

「じゃ、手始めに御尻ね」

這いつくばって尻を上げますとピシリと鞭が鳴り、私は痛さより口惜しさに呻きます。

「次は胸」

「次はと、太股よ。フッフ」

無慈悲な鞭を身に受けるため汗を垂らして、ままたらぬ体をもたえ、様々な姿勢をとらされました。

「これでお終い。どう？　口惜しいの？　ちよっと顔を上向いてごらん」

ペツと唾を顔に吐き掛けられました。余りの屈辱に身をもんで慟哭します。ああ手さえ自由なら、いや、せめて前手錠ならと思いますが、後手錠の身の悲しさ、軽く頭を蹴られただけでバランスを失って倒れてしまいました。

婦人看守の鋭い眼を全身に感じてハッとして、奥様の御足下にひれ伏して御礼を申し上げます。

「……奥……奥様……御慈悲の御鞭……ありがとうございます。」
「あなた。これで御氣が済みました？　もう嫌味おっしゃっちゃ嫌よ」

「ハハハハ、まあいいだろう。じや此の男のことは忘れるんだぞ」
「又そんなこと。分ってるじゃありませんか。これ懲役囚なのよ。人間じゃないのよ」

「よしよし。分った。もう云わない。さ、行こう。早く行かんと幕が開いてしまう」

ひれ伏して、立去られる足音を聞き、我身のみじめさに泣いて居ますと

「フッフ、情ないの？、ちよっと可哀想みたいだったわね。さ、口をあけて」

ガッキと嵌められる嵌口具。懲役囚の悲しさが身に泌みました。這いつくばって犬の様に囚人食を啜って居ますと、睦まじそうに差

向かいで食事をしている彼等二人の姿が想像されて身を切られる思いでした。

二日おいて昼食後、再び曳き出され見物室へ繋がれました。今度は誰に辱かしめられるのかと身もすくむ思いで居ますと、やがて話声がして近寄って来る婦人方。その中の一人の声を聞いて私は余りのことに我身を呪いたくなりました。私が浮気をしていたたまれな様に追出したも同然の第一回目の妻の声ではありませんか。母と女中が一緒の様です。嵌口具を外され屈辱の挨拶をさせられました。穴があつたら入りたいとはこの事です。

「立て。立ってグルッと回れ」

鎖を鳴らして浅間しい姿を見せなければなりません。

「おお、まあ、何と哀れな恰好なこと。娘や、よく見ておやりよ」
「ええ。ほんとに浅間しい姿ね。えーと、二五〇号って呼べばいいのね、二五〇号、どお？　懲役の味は。フッフ、辛いだろうねえ、情けないだろうね。そうして一生、暮す訳ね。けどお前には似合いの恰好よ。ちようど、ふさわしいわ。まあ、せいぜい苦しむがいいわよ。看守さん、ちよっと鞭を貸して下さらない？　ちよっとぐらいいなら、なぐってもいいでしょう？」

「どうぞどうぞ、御存分に。ちよっと御待ち下さい。御打ちになり易い様にしますから」

後手を外され前手錠を命じられ、自分で両手の枷と枷を固定します。腰枷には固定せず従って両手の枷は錠孔に嵌った短い突起を中心に回すことはできます。腋鎖を解かれます。

「先ず背中ね」

一繋毎に御礼を言われました。

ピシリッ

「あっあ、ありがとうございます」

ピシッ

「うっうーっあり……ありがとうございます」

「次は胸よ、そらっ」

ピシリッ。

「ひーっ、ありがとうございます……ます……」

体中、全部で十五、六鞭も受けましたでしょうか。最後に矢張り額に唾を吐きかけられました。みんなの見ている前で、我れと我が両手を再び後手錠にし腋鎖を締め付けられます。

「あら、自分で後手に縛るのね。ホホホホ、手数がかかなくて便利じゃないの」

「左様ですねえ。あの若奥様、ごらんないな。あの腋のところがった鎖、あれ痛いだろうと思いますわ」

「看守さん、此頃は縄で縛るのはやめられたのですの？ 私なんか昔の人間ですのね、金縛りも結構ですけど、捕縄をかけた方が矢張り囚人らしく思えるんですがねえ」

「いや、奥さん、そりや何てったって捕縄で締め上げるのが本来なんですがね。面倒だし、又万一、弛んだりしたりする心配もありますしね。それに何ですよ、余り長い間、縄を掛けとくと体を悪くするおそれもありますし」

「そりや、そうですね。その点こんな鉄の道具は便利ですねえ」
「大奥様、何でしたら一度、捕縄を掛けてやりましょう。私共看守は、捕縄術も習うんですよ。一つお手並を見せましょう」

再び後手錠を外され鍵を渡されましたので、命じられるままに両

手枷、腰枷を外し、ついで首枷も腋鎖も除かれます。何カ月振かで外された首枷にホッと吐息をつきました。足錠だけの自由感を味わひまもなく、捕縄の束をつきつけられて後向きになり、両手を後へ回します。両手首を重ね合わせて括られ、首に吊られ二の腕、胸ときりきり締め上げられ、胸の所で菱形になった本縄の縛めを受けました。ついで腰と太腿の付根に縄が掛り、股縄をギュッと緊め付けられました。中々鮮かな縄捌きです。足の鎖を鳴らして体を回し縄付の姿をみんなの前に晒し、ついでひれ伏して床の鉤に鼻環を嵌める様に命じられました。正坐して上体を前へ倒しますと首縄が締められ股縄が痛いのですが辛抱して鼻環を鉤に嵌め込みます。

「やっぱり縄付の方が、私なんかには囚人らしく思えますわ。しかし、看守さん、お上手ですこと」

締め上げた捕縄は肉に喰い込み、今迄の戒具とは全然別のきびしい拘束感を受けます。縛られるのは当然の懲役囚の身とはいえ、本当に情なくて仕方がありません。

「お前、よくも娘をおもちやにしてお呉れだったわね。そのざまはどう？ほんとにいい気味ねえ」

母親は草履で私の頭を踏みつけて、さんざんに辱かしめます。

「……ほんとに……申訳ありません。私が……悪うございました……」
途端に尻に革鞭が鳴ります。

「ホホホホ、申訳ないとか、済みませんとか云う言葉は、人間同志の間のことよ。お前は人間じゃないんだろ。別に謝まって貰うことはないの、ホホホ」

「ハ、ハイ、私めは、ごらんの様な姿で刑の執行を受けさせて頂いて居ります。何卒、御気の済む様になさって下さいまし」

「娘や、何とか云っておやりよ」

「そうね、じゃ、足でも舐めさせてやりましょうか」

ペダルを踏んで鼻環を床から外し、靴を私の眼の前につきつけま

した。私は舌を出して靴の裏を舐めようと思いますが、意地悪く足を動

かしますので中々舐められません。口惜しいのですが、看守の目を

感じると止める訳にも行かず、さ

んざんからかわれた末、靴の裏を

舐めさせるのも汚らわしいと云っ

て、靴で踏まれた所の床を舐めさ

せられるのでした。彼女は手早く

カメラを出して這いつくばって床

を舐めて居るみじめな私の姿にピ

ントを合せます。つぎに立たされ

て前後左右からフィルムに写され

ました。こんな浅ましい姿を撮影

され誰に見られるか分らないと考

えますと堪りません。カメラを構

えている女が恨めしくてなりませ

んでした。

捕縄を解かれ自分で戒具を嵌め

検査を願い上げ、彼女達の嘲笑を

浴び乍ら首枷と腋鎖を施して貰い

ます。手も足も括られて。

「鼻環や首環なんか嵌められてねえ。どう？ お前、自由になりた

いだろうね」

囚われの身には最も残酷な言葉です。我が両手を後手に固定し乍

ら、口惜しさ悲しさに叫び度い気持でした。今度は戒具姿を撮影さ

れました。

「ほんとにいい気味なこと。少しは胸がスツとしたわ。看守さん、



御手数かけましたねえ」

「どう致しまして。如何です、何か懲戒を云い渡されては」

「あら、いいんですの？ 理由もなしに」

「あなたの方様な立派な方々が懲戒を加えたいと考えられることが立派な理由ですよ」

「まあ、そんなこと。じゃあと今日中、ずっと監房の中でもこういう風に戒具を嵌めておいてやりたいんだけど……できたら明日の朝迄ずっとね。私がベッドに寝ている間も後手錠で苦しんでると思うと愉快ですもの」

「ハハハハ、こら、二五〇号。あんなことを仰言ってられるぞ。どうするんだ？ え？」

「アノ、ハイ。あの若奥様。あの、御存知ないのでしょうか、私共懲役囚は監房の中でも、この様に後手錠にして頂いているのが、ふつうの事なのでございます」

「あら、まあ、そうなの。ふーん。そしたら食事や御手洗なんか、どうするの？」

「後手錠でもできます」

「奥さん、後手錠を外してやるのは労役の時だけなんですよ。労役の時でも最小限の自由しか。こら前手錠にして、ごらんに入れろ」
腰の鎖を取って我が両手を前で繋ぎ合わせます。

「まあ、そうですね。ずい分きびしいんですね。けど考えて見れば、あたり前かも知れませんか。それが懲戒にならないとすると……」

私は再び後手錠にしてひれ伏します。

「あのねえ。此の間、奴隷がされてるのを見たんだけど。何とか手

錠て言うのありません？ こんな恰好で……」

「ああ、鉄砲手錠ですか。はい。ではと。今夜点呼後、明朝点呼迄鉄砲を背負せてやりましょう。じんわりと苦しみますよ」

「ホホホホ、じゃ二五〇号さん。御気の毒だけど、そうして貰いなさいな。ホホホ、私が恨めしいの？ まあ、これから一生そんなにして過すのね。神妙にしなきゃ駄目よ、フッフ」

「ではと、二五〇号。若奥様に御礼を申し上げます」

「若奥様。本日は、わざわざ、こんな汚らしい身を見物しに来られて、御手ずから鞭や御言葉で賜わり写真迄とって頂いた上、懲戒迄言い渡し下さって、ほんとにありがとうございます。御言葉通り神妙に、刑を受けて罪を償わせて頂きます」

「フッフ、ずい分神妙なことを云うわね。その涙は有難涙って訳ね」
嵌口具を嵌められた姿を写され、それ伏していますと、扉が開いて婦人看守が顔を出しました。

「アラ、まだなの？」

「いや、済みましたよ。何号です？」

「二十二号よ。じゃ、後で一緒に連れて帰ることにしましょうか」

鎖と音響器の音がして女囚が曳かれて来ました。私は隅の方で膝を曲げ膝の間に鉄棒を挟まされて立たされます。鼻環を床に繋いだ女囚は、全身、日に焼け鞭痕が無数について居り、年は判断できませんが四十才にはなってはいません。

やがて見物人が入って来ました。

三十二、三の婦人と女中らしい小娘です。

婦人は一見、奥様風の金のかかった和服姿ですが、どこことなく卑しそうな成り上がり者の様な風に見えました。

「連帯負債不払で六年の奴隷刑を服役中、反抗罪により懲役七年を宣告されました女囚第二十二号でございます。この様な浅間しい姿をお目にかけ申し訳ございません。」

ああ奴隷上りの女囚です。主人に反抗した奴隷は主人の意向によって告発されれば、残りの奴隷期間の少く共三倍以上の懲役に処せられるのです。

「フフフ、どう？ 懲役の味は。奴隷の時より楽かい？ 馬鹿だねえお前は。もう一年とちよっと辛抱すれば自由の身になれたのにさ。そりゃね、昔お前の家の女中だった私の所で奴隷働きは情なかったろうと思うわ。しかし世間様並の扱いをしてやってたんだからね。私も一年程の分だけお金損したじゃないの。これ、顔をお上げ」

ペッと唾を吐きかけられた女囚は口惜しそうに身をゆすり乍ら

「奥、奥様。それは、もう、私も昔は昔のことですし、一生懸命、働かせて頂きましたわ。決して働くのが嫌だの戒具が嫌だのとは思ったことありませんわ。そりや夜、檻に入れられる前に、奥様に手錠を嵌めて頂くのは、情けなく思ったこともありましたが……神妙に勤めさせて頂こうと思って居りましたが……幾ら奴隷女だからって、何のとがもないのに、二日も三日も手錠足錠、嵌めっぱなしで働かされるなんて、あんまりだと思ったものですから、つい……おいいつけに反抗したりして……」

「フン。それで、今はどう思ってるの？」

「ハイ。とんでもない大それた振舞だったと思って居ります。どうか御存分になさって下さいまし。」

「あの時、そういう風に神妙にすりやね。少し痛い目に会わせて赦してやる所だったんだよ。まあ仕方ないから七年間、うんと苦しむ

といいわ」

「ハイ。ここでは、労役の時も前手錠で、あとは後手錠なんですから。ほんとに奴隷の時がなつかしくて……」

「フフフ、ずい分、重そうな戒具なこと。じゃ、最後の鞭を上げるわよ」

その女は慣れた手つきで五回、六回。女囚は身をくねらせてあえぎあえぎ御礼をいわされるのです。

「おや、その囚人は何なの？」

私に気付いたその女が訊ねます。

「いやあ、奥様の来られる前にね、ここで、からかわれてたんですよ。この二十二号と一緒に連れて帰ろうと思ひましてね」

「そうお。おやまあ、懲役囚でも矢張りこれ嵌めとくんのですの？」

私の拘束錠に目をやって訊ねます。

「終身刑ですって。若いのにねえ。さぞ辛いことだろうね。」

膝に挟んだ鉄棒を落さぬ様、懸命になって脂汗を流す私は、見も知らぬ女からも辱かしめられ、からかわれるのでした。

女囚と共に監房へ曳かれる時、鼻環と鼻環、腰枷と腰枷とを、くっつけて繋がれ、蟹の様に横歩きに引き立てられました。出来るだけ身を離そうと致しますが、腰と足錠を繋いだ鎖のために膝を横へ開いた姿勢にならざるを得ませんし、どうしても肌がふれ合いますので、本当に辛くて頭がクラクラし、よろめきよろめき歩くのでした。監房へ蹴り込まれてからも何カ月振かであつた異性の肌を思い出しますと、電撃を受けた様にあえいでしまい、気も狂いそうになるものでした。

点呼後、直ちに鉄砲手錠にされました。幾分ゆるめて締められま

したが、それでも激しい苦しみです。一晚中もだえ呻き脂汗を流して、私にとってはい、わ、れ、無き懲戒を受けました。

検事の調室の床の掃除も初めの中は看守が看視して居ましたが、暫くすると、看守もあちこちの使役囚の監督に忙しいのか室迄曳か



れて来ると立去ってしまう様になり、例の婦人取員の監督で苦役に服す様になりました。看守ならば、きびしいとは申せ一応の責任もあり又、慣れても居ますし、私の方も看守にきびしく扱われるのは取務上のことで当り前と諦めもしますが、刑の執行上、直接には無

関係の婦人取員にあごでこき使われ鞭打たれ足蹴にされたりするのは、ひどく惨めな思いです。

勿論、口答え一つ許されない身、きびしい戒具を嵌められている体ですから幾ら口惜しくとも、どうともできないのは充分判っては居るものの、些細なことで頭を蹴り飛ばされ又、無理難題をいい付けられ、出来ないとして鞭打たれたりしますと本当に情けなくて口惜しくて何とか仕返しできないものかと考えたこともありました。例えば

「ガラガラ、ジャラジャラと、やかましいわね。静かに働けないの？」

どうして音を立てずに動けましょう。重い手錠の両手を合わせて赦しを乞い、できるだけ、そろそろ働いていますと今度は働きが鈍いと、罵られるのです。又、何でもない様なことにいいがかりをつけては看守に事もない懲戒を申出られるのです。年若い婦人の冷い意地悪さを、つくづく身に泌みて感じました。

一生懸命苦役に服したつもりでも、サボっていたといわれればそれ迄です。懲戒は大い海老責か鉄砲手錠ですが、其の様な懲戒を受ける時には本当に男泣きに泣いてしまいました。といってやけくそになれば今度は、いわば本式の懲戒ですから婦人取員の御機嫌を損じない様ひたすらに平身して這いずり回る他ありませんでした。

拘留所の一劃に少年囚の監房区がありますが、其の食事の運搬等は私達既決囚が使役され、又、私達の配食等は少年囚が使役されるのです。少年囚達に本格的な懲役囚の姿を見せて震え上らせるのが目的の様でした。

満二十才迄の犯罪者は懲役刑は受けず少年感化所に入所させられる訳で、私達懲役囚よりは、ずっと寛やかな扱いです。男女共、黄色の褌をつけさせられ、番号こそ私達と同様に刷り込まれ独房に繋がれては居りますが、鼻環もなく首枷も革製で腋鎖もありません。房内外を問わず足錠も腰枷もなく、唯、苦役の時以外は房でも前手錠を嵌められて居ます。私達に較べれば楽なものです。しかし未だ成熟し切らない少年が頭髪を切られ、褌で手錠の喰い込んだ両手を腿にのせて独房に正坐している姿は哀れなものでした。

看守達の室には勿論、冷房装置があり、又、中央の監視台にも扇風機の設備がありますが、看守の中には扇風機の嫌いな者もあり、暑い時分のこととて私達懲役囚が交替で大きなうちわが煽がさせられることもあります。

額を流れる汗を拭うことも許されず、重い手錠を嵌めたまま懸命になって煽いで居ますと、余りの身分の相違につくづくとみじめな気持ちになるのです。とても暑い日でしたので絶えまなく流れる額の汗を思わず手で拭おうとして、手錠の身の悲しさに瞬間うちわが

止まってしまいました。

「こらっ、休んでいいと誰がいった？ 煽ぐのが嫌なら扇風機を捧げとれ」

重い扇風機を捧げ持たされましたが、五分と続かず、二七五号囚と代らせられ、眠気を覚ましてやるとして電気鞭を三つ、そして鉄砲手錠にされて監房へ帰らされました。

二週間程しますと検事の調室の床掃除を止めさせられ便所掃除に回されました。二人宛、腰を鎖で繋ぎ合わされ、便所の床を這いつて便器の内外はもとより、踏石、溝の中迄綺麗に磨かされるのです。二人一組で三カ所位を担当させられます。裁判所や検事局の便所はいつ行ってもピカピカですが、其の裏には懲役囚達の汗と涙がこもって居る訳です。

私達は一週間に一度シャワーを浴びさせて貰えますが、便所掃除の時は帰房する毎に毎日浴びさせて貰えるので、仕事は嫌でしたがシャワーは嬉しうございました。斯うして毎日苦役を課されて居ますと両手首、足首、腰には、いわゆる枷ずれができて、ずきずきと痛くて堪りません。監獄へ曳かれる前に、こうして毎日、少しずつ苦役を課するのは、一つには戒具のままの労役に慣れさせるという意味もあるのです。それにしても暑い日中、そよとも風のない独房内で正座を続けるのは、唯でさえ苦しくて、うだりそうなのに、私達は後手錠、腋鎖、首枷です。

腰枷や足錠は余り苦痛ではありませんが、腋鎖の絶え間ない鈍痛首枷の圧迫感と、うるささ、そして後で固定された両手の切ないだるさは経験がないと分りません。本当にあえぎあえぎ、体中から汗を流し、日がな一日、渇きに責め苛まれ、冷い飲物を前に扇風機等

で涼を取られている中央監視台の看守達を羨み乍ら堪え忍ぶのでした。痒い所を搔けない辛さも又、格別で、叶わぬことと知りつつも後手錠の両手をもだえてしまい、容赦ない鞭を受けるのです。鞭痕に汗が流れ込みますと、此れ又、堪らない痛さと痒さで、思わず、泣けてしまう程です。本当に生地獄の苦しみでした。

或日の午後、壁を睨んで自由な生活を身を切る思いで險に浮べ、齒を喰いしばってじっと堪えて居ますと、婦人看守によって曳き出されました。引き立てられて又、あの見物室で平伏します。誰か知らないが、毎日こんな苦しみを受けている懲役囚に自由な姿を見せびらかして辱しめを与えられるとは、何と残酷なことだろうと泣き乍ら待つて居ますと、見えたのは故社長の令嬢でした。

「よかったわねえ、命が助かって。此の間の時、お前が余り神妙にするものだから、可哀想になってねえ。私の出した助命申請が何とか通ったって訳よ。まあ、こうして見ると余計なことしたみたい。お前だってそんな恰好で一生過すより一思いに死刑になった方がよかったんじゃないの？」

「お嬢様。と、とんでもございません。死、死刑になるのは、恐ろしいでございます。御慈悲で終身懲役にして頂けて、ほんとに、どの様に御礼申し上げていいか……」

「ホホホ、そうお。じゃよかったわね。辛いだろうけど、おとなしく刑を受けるのよ」

涼しそうなレースのドレスで、すらりと立って居られる御嬢様は懲役囚の哀れな日々を御想像もできずに簡単におっしゃいます。

「お嬢様。何か鞭など与えられますか？」

看守の問いに

「そうね。鞭もいいけど私ね、一度、自分の手で此の男を縛って見たいんですの。実は手錠も準備して来たんですけど……」

「あら、そんなことで御氣が済むのでしたら御やすいことですわ」直ちに手枷が全部、外されます。

「二五〇号。身に余ることだよ。御願ひ申上げるのよ」

「あら、看守さん、大丈夫？ 手を自由にしちゃって」

「ホホホ 大丈夫ですわよ」

久し振りに外された手枷の痕が、むごたらしい両手を差出し

「御嬢様。手錠を嵌めて下さいまし」御嬢様は、ゆっくりと口に冷たい笑を浮べ乍ら、第一種手錠を嵌めます。警官や看守以外の方に戒具を施されるのは一しお情けないもので、前に看護婦に嵌めて貰った時は、いわば仕事の上のことと致方ないのですが、嘗て親しくしていた御嬢様の手で嵌められた此の手錠は骨身に喰い入る様な味でした。勿論、私は懲役囚の身、立派な社会人の御嬢様に手錠を嵌められようと嫌も応もありません。ついで顔に唾を吐きかけられました。手錠の両手を合わせて

「お手ずからの手錠、ありがとうございます」

と、ひれ伏して御礼を申し上げますと、ハイヒールの足で頭を踏みつけ蹴飛ばして下さいました。

「今夜一晩、御嬢様の手錠を嵌めときましようか？」

前手錠を後手錠にするのは片一方だけ外せばいいのですが、わざわざ両方外され、改めてガッチリと後手錠にされました。

其夜は御嬢様が嵌めてくれた後手錠の味を味わい乍ら、柔かなベッドで寝んで居られるであろう御嬢様のことを考えて、恨めしさに涙を流して悶えた次第でした。

翌朝、何故か私だけ一人最後に曳き出されました。勿論、直ちに嵌口具です。拘置所の裏庭へ連れ出され足錠の鎖をうんと短くされます。

「二五〇号。此の庭の草取りをするのよ。今日は、ここから、向うのポプラの樹の辺迄をやるの。二時間経ったら来るからね。し残して居たら承知しないわよ。いい？ あ、それからね、昨日の御嬢様が、手錠の鍵をお預けになるのを御忘れだったからね、そのままやるのよ。フフフ、御嬢様が思い出される迄は私達だって其の手錠は外すこともゆるめることもできないんだからね。そのつもりで居てよ、フフフ」

鞭がピシリと太腿に加えられ、さっさと看守は立去ってしまいました。余りのことに茫然としましたが、諦めて気を取直し、しゃがんで後手で雑草を探り探りむしって行きます。本当に不自由で齒がゆくなりますが、如何ともなりません。短い足鎖につまづいて転んだり、むしり残した草に気付いて、あわてて引き帰したものの、仲々指先に当たらず、じれったさに身もだえしたりして、後にそっくり返った妙な恰好で這いずり回って居ますと、知らず知らずの中に手錠がカチカチと締まってきます。手錠の鎖を張らない様に、取り残しのない様にと夢中になって働きました。せめて前手錠ならと思いました。事務室の窓にはボツボツ出勤して来た職員がタバコ等ふかし乍ら面白そうに、私の苦役する姿を眺めて居るのです。むしった草を一カ所に集めるのも一苦勞です。何の道具も使えないのですから膝頭をすりむき乍ら小砂利の間に落ちた草を一つずつ苦心して集めます。せめて口の中へくわえられたらなあと嵌口具を恨めしく思いました。時間は遠慮会釈なしにどんどん経って半分も済まな

い中に婦人看守が見えてしまいました。

「おやおや、未だ半分しか出来てないじゃないか。それも取残しが沢山あるわよ。一体、何してたの？ え？ 苦役は嫌なのかい？」

懲戒の苦しみを思っ、ふるえおののく私に、冷い言葉が浴びせられ、額をグイと蹴られます。

「懲戒はあとにするから、ともかく済ませなさい」

立去られる後姿にひれ伏して、情なさ涙を流し乍ら脂汗をタラタラ流して、やっとのことで命じられた範囲の除草をすませますと気が弛んでヘタヘタと坐り込んでしまいました。体中の筋肉が硬張り、後手錠はきつく締まってしまい、本当に疲れ果ててしまいました。

青い朝の空を仰いで、みじめな気持でボンヤリして居ますと、何時の間に來たのか婦人看守の鞭が背中に飛びました。

「人間様並の恰好するんじゃないの。」あわててひれ伏して体中で哀願致します。腋鎖ですりむけた腕の付根が焼ける様です。

「フフフフ何とかできたわね。どう？ えらかったかい？」

鼻鎖を曳かれて中央監視台の横手へ連れられました。

「手錠が外れないとすると。そうね、少し弄って上げようかね」

鉄製の台に腰を掛け腿を革バンドで固定され、足錠を外されて両足を鉄箱の中に付属している鉄枷に嵌めこまれました。箱にドロドロの液体が満たされます。柔い樹脂製のヌラヌラした感触の小片がピシリと浮游して居ます。液の面はふくらはぎの中途迄あり、足首はいくら動かしても箱の壁面にはふれることなく液体内に宙ぶらりです。

スイッチが入れられました。途端に液体は縦横に攪拌され、ヌル

スルの小片が絶間なく足の裏に当り走り回ります。其の擦ぐったさ、夢中になってもがき、嵌口具の中で呻き、固定されていない上半身を死物狂いでのたうち回らせて苦しみました。今迄受けた懲戒の苦痛とは全く異質の苦しみです。体がビクビクけいれんし気が遠くなるのを感じた時スイッチが切られました。短い間隔をおいて又、足裏から何ともいい様のない感覚が突き上げて来ます。

三回繰返され、やっと赦されました。体中に冷い脂汗がジットリと湧き、心臓の調子が無だか妙です。後手錠は最早、手首を千切らんばかりに締め上げ切って居ります。此の擦り責を一時間も続ければ先ず、もたえ死は必定といわれて居ります。

促されて立上ります。眼も昏み、グッタリとなってヨロヨロして居る私に容赦なく重い足錠が嵌まり、シャワーを浴びに引立てられました。嵌口具が取られ監房へよろけ込みます。

「少しはこたえた様ね。フッフ、ちょっとスマートな懲戒だろ？」

「看守様、御慈悲です。手錠を少しゆるめて下さいまし……手が千切れそうで……」

「フフ、そんなこといっても仕様ないのよ。鍵がないんだものね。まあ、御嬢様が早く思い出して下さる様に祈ることだね」

拘置所の方から御嬢様に催促されたらと思いますが、とてもそんなことを口に出す勇氣もなく、千切れそうな両手首の痛さをじっと堪えて正坐を続けます。夕方になりますと最早、手首から先の感覚は全くなりませんでした。

「御嬢様の手錠はきついかい？」

点呼の時からかわれます。

「ハイ。もう、本当に骨身にこたえます……」

御嬢様のハンドバッグが何かの中に投げ込んであるに違いない此の手錠の鍵を夢に見乍ら呻吟の一夜が明けますと、再び裏庭へ曳かれ草むしりを命じられました。余りに苛酷な命令に仰天した私は立去ろうとする婦人看守の足下に身を投げ出し、身もたえして哀願します。舌打ちして頭をボンと蹴り飛ばし、歩き出されるあとを締められた足錠の鎖に、まるぶ様にして足下に再びひれ伏し額を地面にこすり付け、嵌口具の中で声にならぬ音をたてて哀訴しました。

「何よ。一体？」

荒々しく嵌口具を外してくれまます。

「手が、指がもう動かないのでございます。決して御命令の苦役が嫌なのではございません。いくら何しても……とても、もう……」

冷笑を浮べた婦人看守は、ゆっくりとタバコを吸い付け、やがてその火を私の手の甲に押付けました。ボンヤリした熱さが感じられる程度です。

「フン。満更、嘘じゃない様ね。しかし又、ずい分きつく締まったものねえ。えーと、じゃね。あそこに積んである石を向うの塀の根元迄運んで並べるのよ。それならできる筈ね。口をあけて……」

両手で、やっと抱え上げられる位の石が、塀から少しはなれて積上げてあります。其の石を頭と肩で押して約二十米向うの塀際迄運ぶのです。後手のため、地面に這いつくばって頭を石に当てて膝をふん張るのですが、うっかりバランスを失うと、つんのめってしまうのです。脂汗を流し、あえぎあえぎ無意味な苦役に服している私を、出勤して来た二人の婦人職員が庭に出てきて嘲けり笑い、小石を投付けたりするのでした。

塀際迄行きますと、所詮、叶わぬこととは知り乍ら、此の塀向う

にある自由な世界を思っけて身を切られる様な思ひです。恐れていた懲戒もなく監房へプチ込まれました。両腕のダルサは全く堪え難い程で、御嬢様が恨めしくなりません。このまま放っておかれたら一体、どうなることかと不安に思っていますと、午後、見物室へ曳かれました。見えたのは期待していた通り御嬢様でした。今日は和服姿です。母親も一緒です。

「御嬢様の御手ずからの手錠は充分骨にこたえて味わせて頂きました。ありがとうございます。このまま、まだずっと嵌めておいて下さるのなら、御慈悲でございます、ほんの少しゆるめて下さいまし」

「ホホホホ、話を聞くと、大分締まったらしいわね。二日や三日、嵌めたままでも何ということはないだろうと思ってただけど…痛かった？」

「これ、娘や、早く外しておやりよ。手首が腫れてるじゃないの」「あ、大奥様。もったいなうございます。…ほんとに償い切れない

天星社代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13) 印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

悦虐雨さらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

いことを……致し……ました……。この浅間しい姿を御らんになつて、少しでも御胸を御晴らしになつて……」

「お黙り。お前の声は聞き度くないよ。汚らわしい」

御嬢様は小さな鍵を取出されて手錠を外してくれました。直ちに第三種手錠を自ら嵌めねばなりません。しかし、どうにも指が動かないので、看守に必死になつて哀願しますと面倒臭そうに嵌めてくれました。

「御手数かけました。ありがとうございます」

再び自分で後手に腰枷に固定せねばなりません。腕の感覚が何だか借物の様で、仲々錠孔に嵌まらず、もがき回る私の恰好に、二人は思わず失笑しました。

「ほんとに哀れなものね。さ、早く出しましょう」

「ハイ。じゃ、二五〇号さん、せいぜい長生きして、苦しみなさいな。フフフさよなら」

(次号へ続く)

奇妙な事件の謎を解く力ギは？

或る強盗事件

南

時

夫

昭和三十三年の秋、東都に起った或る強盗事件は新聞紙上では「重役宅に覆面二人組、女ばかり四人を縛り上げ奪う」と報じられたが、さて、二人組の賊が捕われてみると、不思議な不審があとに残った。本号では「女中星和子の供述」として、その不審を解くことにする。

〔前号（九月号）の概要〕

- 一、事件のあらまし
- 二、次女喜美子さんの話
- 三、女中星和子さんの話

四 女中、星和子の供述

申訳ありません。いままで申上げたことは皆嘘でした。いいえ、みんな間違っていたの

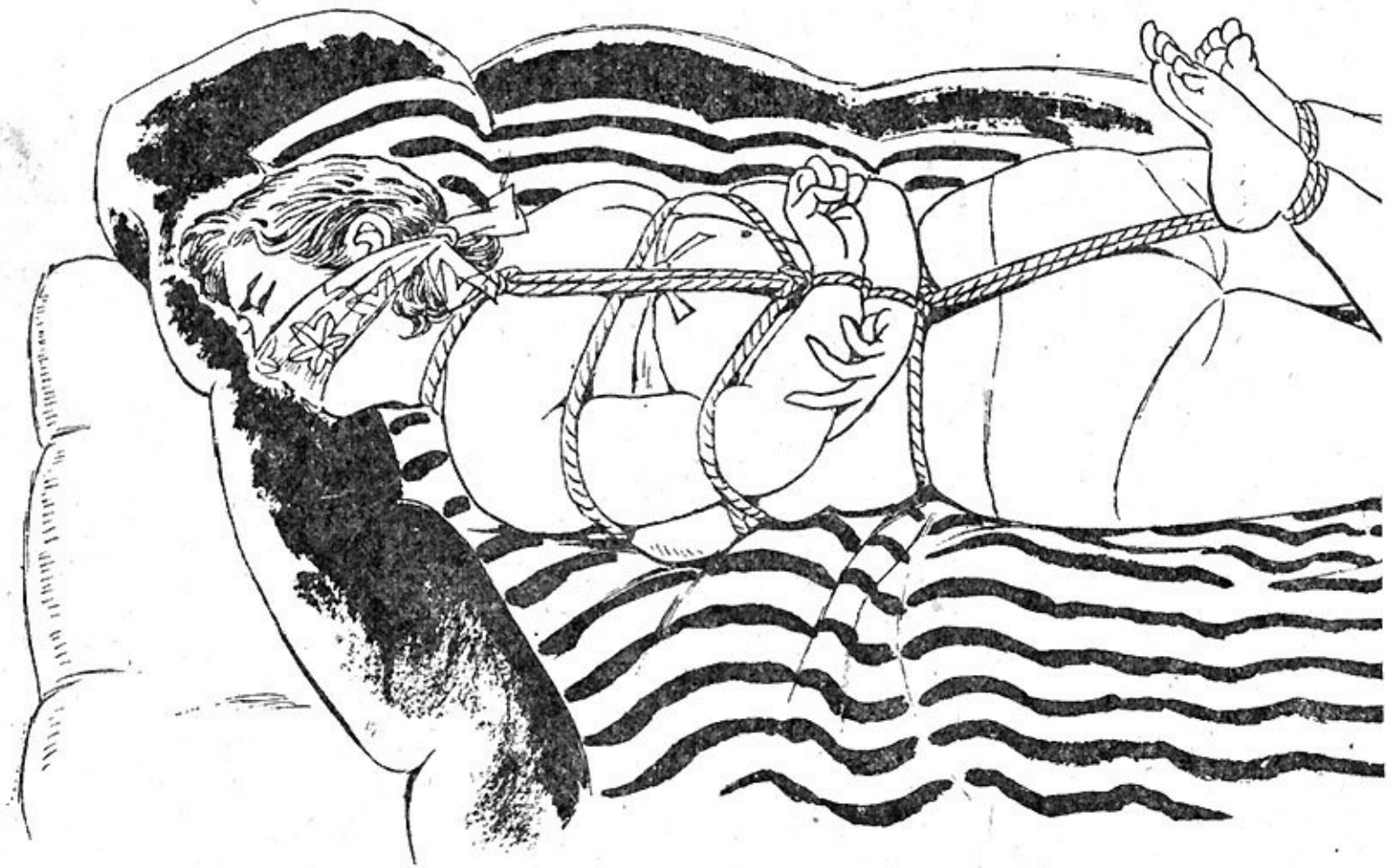
ではなくて途中までは本当です。あの晩奥様とお嬢様に挨拶してから部屋に戻りふとんを敷いてまだ寝るのも早いと思ひ、その上で雑誌を読んでいた時、二人の男が眼の前に

現れ、あつという間もなく手足を縛られ転がされてしまいました。

男達が奥の座敷に入ってゆく間、私はじつと横になったままでした。一分、二分と経ってゆく中に妙に落着いてきました。縛られた手首をすり合わせるようにして動かし、していると、案外簡単に解け、私は自由になりました。その時すぐなんとかすればよかったのですか、どうしたことか、私はそこにじつと横になったままでした。

「今騒いでは大変なことになる」と考える半面、悪魔の囁きと申しましようか、このチャンスのをがしては二度とこういう機会はないという気が心の底にひそんでいました。





誰にも決して知られたくない私の秘密——。

小さい時から次第に大きくなり、この数年間に急にふくれ上って、私の心の大部を占めてしまった忌しい、しかも余りにも甘美なあの感情。私は天性のマゾヒストだったのです。本や雑誌では、私のような女性も他にあることは知っております。そしてそれらの人達が何等かの動機によってその傾向になってしまったということも知りました。

でも、私の場合は、これという動機ありませんでした。子供のころからいろいろな本の挿絵に人が縛られているのを見ると顔がほてってくるのを押えることが出来ないうで、そっと人に隠れて読んでいました。中学校に入ってお友達がふざけて縄飛びの縄で縛りごっこをしているのをときどきしながら見てい

たり、映画の中でそのような場面があると何回も繰返して観ました。

映画の中でそれも主に時代劇にお姫様や町娘が手荒く縛られるのを観るから、私は自分をその場面に登場させて胸をはずませていたのです。道を歩いていて、ふと荒物屋さんのき先に麻縄の束が吊してあるのを眼にするとか何か悪いものを見たように私の胸は異常な程波うつのです。手拭等で口を覆って声を出せないようにすることを「猿轡」ということも覚えしました。何んとかして自分も縛られてみたい。十六、七になると私のこの欲求は何にもまして強くなりいつの間にか、私は自分で自分の身体を縛ることを覚えました。

いくらなんでも娘の私が人に「縛ってほしい」と頼むことは出来ない相談でした。異常性が強くなればなる程、私は自分の性癖を表に出すことに神経をつかいました。何の関心ももたない人は平気でそのようなことも口に出すものです。うしろめたいことのある人程それに触れたがらないのではないしょうか。

いつか上のお嬢様が私にある映画のストーリーを話して下さったことがあります。「そこでね、その娘が捕って汽車で連れ去られるのよ。貨車の中なんだけど、手と足を縄でゆ

わかれてね。猿ぐつわもされているの、そこへ彼が……」と極めて自然にしゃべっているのを聞いて、私は逃げ出したい程でした。ノーマルなお嬢様にしては、何んのこともないただ観て来た映画の画面を追って話して下さったのでしようが、私にとっては、そのような言葉が心を痺れさすようにひびいてくるのです。

私はその頃から夜が待遠しくてなりませんでした。部屋で一人になると自分で自分の身体を締めつけ痛めつけました。その為にいろいろな種類の紐や縄も手に入れタンスの奥にこっそりしまっていました。その方面の雑誌も通信販売で取り寄せ、私ぐらいの同性が厳しく縛り上げられている写真を飽かずに眺めたりしました。

雑誌で読んだり自分で何回もやってみてそれまでは殆んど不可能だと思っていた自縛の方法も覚えしました。自分の口に猿ぐつわを嵌め両足を揃えて縛り更に手首を背後に廻して縛ると、私は自分で自分を他人から、そうされたように完全に、決してほどこけないように縛ることも出来るようになったのです。しかし、決してほどこけないように、ということとはかえって簡単でした。それより嚴重に縛って

から最後には何等かの方法で自分で又解かなければなりません。

これは簡単なようで、むずかしいことでした。後手に手首だけを縛るのは、自縛に関する限り完全にするには出来るかも知れませんが、思い切って固く縛ったとしても腰の方に廻して横眼で見ながら指先を使えばどうにか解けます。でも二の腕から胸にかけてきつく三、四巻縛り後手からんだ縄をそれに通すか首縄に連結して引張ると、二の腕から先が五分と経たずにしびれて来て指先が全然効かず、こうなるともう自分ではどうもがいてもほどこくことが出来なくなるのです。

しかし、又そのような状態となった時に襲ってくる云いようなない感情。私は縛られている！「誰か！助けて！そう叫びながらその異常な雰囲気中に酔いしれました。そうは云ってもやがては何とかしてほどこかねばならないのです。一個所だけ引張れば縄のゆるむ所を作っておかねばなりません。私は何回も自分で自分の身体に縄をかけながら、その点に苦心しました。自縛を初めた頃は何んとか完全に縛りたいと思いましたが、その中に今度はなんとかして簡単に縄を解く方法を考えてようになりました。何度も失敗して

随分冷汗をかいいたことがあります。

夜の十二時頃に身体に縄を巻きつけ畳の上をごろごろと転げ廻り、さて解こうとしたところ、二の腕から指先まで感覚は無くどうもがいてもほどこけません。起上ろうとしても足首から念入りに縛りつけているので、それも自由にならず、二時、三時と刻々と時間が経ち夜も明けかかって来てこのままではどうしよう。奥様にでも見つかったら何んと云おう。冷汗が額からと脇の下から流れ落ち、自分で噛んだ猿ぐつわも気持ちが悪く自分の性癖を深く後悔したこともあります。

その時はやつのことで起上り机の角に胸を縛った縄を引掛けてどうにか肩の方へずり上げて明方近くになって解いたこともありました。猿轡というものは私にとっても夜の秘かな楽しみに無くてはならないものでした。鼻と口を覆ったり口だけを縛ったり、溢れる程の布を口に押込んでその上をぐるぐる紐で縛ったり、両手が使えるので、どんな厳しい猿ぐつわも出来ました。猿ぐつわをした上で口から耳、胸、腕、股、足等全身いたるところに紐を巻きつけたこともあります。話が横道にそれました。申訳ありません。

このような私でも、さすがに強盗に縛られ

た時は怖しかったです。日頃望んでいたこととはいいながら、いざそうなってみると恐怖感だけでした。そして夢中で解こうとしました。幸か不幸か今迄自分で縛ったり解いたり何十回と行っている私には他人から縛られたことは初めてではあっても、縄を解く要領のようなものは、知らず知らずの中に身についていました。

簡単に解け、心に落着きが返って来た時、私は再び縄が恋しくなりました。奥様やお嬢様達が奥の座敷で矢張り縛られていらっしやると思うと、早く何とかしなくては、という思いと、縛られた姿をじっと側で見たいと思う気持ちと入り混っていました。足音がして、私の部屋の前を賊達が通りました。縛られているような姿で私は身を小さくして横になっているとそのまま勝手口から出て行ったようでした。しばらくしてから、私は夢遊病者のように起上ると足音を忍ばせて座敷の方に行ってみました。

ふすまが半開きになり下のお嬢様の姿だけが見えました。矢張り猿ぐつわに手足を縛られて、お行儀よく座っています。私は幸子お嬢様の部屋に入り、鏡台の上にあった腕時計と引出しの中に入っていた指環、ネックレス

等を持ち出し、すぐ又自分の部屋に帰りました。私はお金が欲しかったのです。カメラをなんとかして買って、それで自分の姿を撮っておきたいといつも考えていました。私が盗んだことは絶対に分る筈がない。私は被害者の一人なのだ。震える手で盗んだ品物をタンスの奥深く隠すと、そのかわりに細引や麻縄等の使い慣れた道具を全部取出しました。被害者から犯人に、更に被害者になるために私は自分の身体を拘束せねばなりません。縄に狂っている女にとってこの機会はどう二度とありますまい。

私は洋服をぬぐとブラジャーとパンティだけになりました。強盗に襲われた時の服装と違うことの不自然さには気がつかぬ程、私はもう夢中でした。自縛する時のいつもの恰好になった私は姿見の前に座りました。縄を手に取って足首に巻きつけると、あとはもういつもの要領でことを運びました。足首を縛り次に膝の上、下と太股に縄を掛け強く引締め腰に廻してくびれる程強く結びました。両の股がぴたりと合さった時の気持ち。

それから縛合せた足首を横座りに曲げ片方の手首と五十糎位の長さで継ぎました。自分の手で自分の下半身を縛り終えると、私は口

を開けハンケチを含めるだけ含み、それを腰紐で押えつけ首の後ろで止め、その上からネッカチーフで覆いました。顔を上げて猿ぐつわを嵌めると後でゆるみ易いことを知っていましたが、出来るだけうつむき息の出来ない位に厳重にしました。マゾヒストと云われる人は多くはそうだと思いますか、私もどんな縛りでも猿轡のないのが一番に物足りないことでした。

だから自縛をする時も必ずといってよい程自分の口を思いきって縛りました。唇を割った猿ぐつわは鏡に写してみた時、我ながら余り見良い顔ではなくなるので、その上を布で覆うことにしています。猿ぐつわを噛むと、もうそれだけで胸が大きく波打ってきます。私は先を急がなくてはなりません。太目の縄で二の腕から胸を思い切って巻きます。一本巻いてはぐいぐいと締め上げ二の腕に縄が喰いこむ程乳房の上、下をきびしく縛り、前で結ぶと、もう上半身の自由は失って動かせるのは肘から先だけ。

そうしておいて別の縄を首に掛け、背中央に垂らし、両手を後ろに廻してその垂れた縄をたぐり寄せるようにして輪を作りその輪の中に両手首を突込み、余った縄を手に握ん

で手首にかかったその輪を小さくするように引張ると両手首が一つになって段々締まってゆきます。手首を適当に動かしながら引締めてゆくと両手首の間の隙間が無くなり、後手はいくらでも強く縛られてゆくのです。又組合せた腕を出来るだけ上に持ち上げるようにして引締めると、その縄が首に掛っているため、その間かくも短くなり高く吊上げられることとなります。こうして後手に固く縛ると、その余った縄尻を上半身を縛った縄に通して更に引張り指先を使って手首のところで固く結び目をつくるのです。このようにして私は自分自身によって完全に縛り上げられてしまったのです。それも首縄、高手小手、後手という他人に縛られた以上の完全さ、嚴重さで……

余りにも強く縛ったために二の腕から指先までしびれていきました。今まで自分の意思のままに動いていた指先は何の感覚もなくなり、縛った後手を突張ったために結び目は固く締ってもう絶対に自分では、この縄から抜けることは不可能になってしまったのです。指先が動いても容易にほどけない緊縛であり、今夜こそは自分で解かなくてもよいという気持ちから思い切って縛り上げた縄目では、どうすることも出来ないことは私自身が一番よく知っていました。姿見の中には一人の芋虫のように縄で巻かれ、顔がくびれる程の猿ぐつわを嵌められた無惨な女が写っていました。いつものことながら余りにも変りはてた自分の姿を猿ぐつわからのぞいている眼でよ

く見ました。
横座りの身体を投げだすようにごろっと横になり、足を伸ばそうとしても、あらかじめ足首と手首とが繋がっているのでのくの字型にそり返って身動きも出来ない苦しさ。思いきり詰め込んだ口中の布がだ液を吸って更にそれが猿ぐつわの下の方から流れ落ちます。私は苦痛と快感の中でもがき廻りました。もがけばもがく程縄が締ってきます。ああ、私は今こんなに雁字搦目にきびしく縛り上げられている。可哀そうな和子！早く誰か、助けて！私は本当に猿轡の中から声にならぬうめき声をあげ不自由に曲った身体でのたうち廻りました。

夏から秋の縛り映画

東 山 映 史

縛りシーンのある楽しいかな時

代劇は第二東映の出現でまたまた戦線が拡大され娯楽作品の量が多くなってきた、時代劇の魅力の美女緊縛シーンが愛好者の目を楽し

最近の傑作はやはり、ベテラン伊藤大輔監督の「切られ与三郎」である。歌舞伎で有名な「しがねエ恋の情が仇」の玄治店の映画化

だが、コリ性の伊藤監督は、お富の折カンシーンで大いに腕を振るっている。淡路恵子のお富と雷蔵の与三郎が、お富の旦那の網元の目をかすめ、密通し逃亡するが捕えられて折かんされる。シナリオでは、連れ戻されたお富は、肌ジユバンに腰巻という半裸姿でハリに吊るされ、折カンされる。横に切られ与三郎の影を写すという設定だった。淡路恵子の半裸の吊し責を楽しんでいた連中もあつたと思うが、作品では着物をはぎとられ、長ジユバン姿のお富が、荒縄で二巻き、ぎっちり縛られ、柱につながれている。口にはしゃり手拭で猿グツワをはめられて……横に影でハリから吊下げられた与三郎が斬られ、ウメク声を聞かしている。さすがに伊藤監督だ

けに、海へ飛び込んだのを引上げられたというので、頭の毛もシズクがたれ、ぎっちり縛られ、力があつた。口をふさがれ、刀をつきつけられ身もだえする淡路恵子の熱演も大いに買えた。吊下げられた与三郎は勿論、雷蔵でなしにスタンド・インだが、血をたらすシーンなど凄惨。シナリオでは下女の少女が乾分に「お富の行方をいえ」と吊し責めにあうが、足をロウソクで焼かれるとあつたが、これだけはやはり残酷といふのかとられていなかった。さきの松竹の高田浩吉と嵯峨三智子の「与三郎」では嵯峨のお富がシゴキで縛られ、妖艶な縛り姿を見せたが……。

この作品にもう一つの見ものがある。ラストに与三郎の義理の妹のお金がお嫁姿で与三郎の後を追う、一緒に死のうという。「お前の幸福のために俺は死ぬ」と追いつくお金をお金荒縄でしばりつけて与三郎は行く。だが、口にカミソリをくわえたお金はその縄を切り

自らノドをさして死んでいた。お金はテレビの富士真奈美だが、白無垢の花嫁衣裳を荒縄でしばられ無惨な美しさがあつた。「弁天小僧」のラストといい、伊藤監督はやはり楽しい。

松竹の「闇法師」で佐乃美子の腰元が後手にしぼられてころがされるが、縄が首にかかっていると変った縛りだった。注意しないとわからぬが……彼女も「七人若衆売出す」の石子詰や「鬼夜叉姫」の長じゅばん一枚で柱にしばりつけられ、折かんされるなど責められる女優だ。

大映の「競艶八剣伝」で、純情スター美川純子が、スパイの腰元として敵中に入り、身元を現わされ、縛られ縄尻をとられ、「白状せよ」と折かんされる。新進西山監督がどのような責め方をするか楽しみだ。阿井美千子が男装の墨染の少将で美しい公卿姿を見せるが彼女も身分がばれ、捕えられ、「女であろう」と胸もとを開かれ乳房をのぞかす。「甲賀の密使」

では半裸の吊し責め、帆柱にしばられるなど、このところ大いに可愛がられている。

東映作品にも縛りシーンはあるが、何かきれいとすぎて緊迫感がない。テレビでも面白い縛りシーンを見せるのだから、監督も座りなりでなく研究してほしい。

その上、大映作品には、このごろ時代劇のエロ、グロをねらうという意味でか見るべきものがない。

第二東映の角田喜久雄の「将棋大名」に新人中里阿津子の縛りシーンが見られそう。角田作品といえば、縛りと拷問が数多く出るので有名だ。原作にも、美女折かんのシーン、吊し責めなど多かった。美女を縛って折かんする美剣士の登場など面白いものだった。映画ではそう出せぬらしいが、中里のお千代が、敵手に、人質として捕えられ、木に縛りつけられ、猿ぐつわをはめられる。この間も本式の吊し責めにあった新人女優

のことで、どのように責められるか楽しみ。美女の死体が死人詰の将棋とからみ登場するはずだ。

大映の勝新太郎の「不知火校」でも縛り責めが登場するはずだ。監督は森一生。

楽しかった新東宝の時代劇がなくなることは淋しいことだ。「生首大名と地獄將軍」の小絹絹江の吊し責めなどよかったが、今は見られないのは残念だ。その代り、現代劇で見せてくれるらしい。

「スパイと貞操」で万里昌代のスパイが破られたシユミーズ一枚で、手首をクサリでしばられ吊され責められる。頂けるシーンだった。これを他の女にのぞき見されるのだが、シーンもたっぷりタンノウさせた。「憲兵と幽霊」とい、新東宝の企画は面白い。次は「地獄」だろう。黒縄地獄で、黒い縄でしばられ責められるなど、子供のころのノゾキカラクリならぬ恋し見たしの地獄絵巻は楽しみだ。

被虐の白い花

赤川道郎

四馬孝・画

一、蛇

阪急電車を十三駅下車して東へ十分ばかり歩くと、一軒のストリップ劇場がある。

OMミュージックホールと云う立派な名にしては、いかにも場末じみた、うす汚い劇場だが、際どい露出をちょいちょいやり、時には猥褻物陳列罪で検挙されたりするので、常連の客が、かなりついており、まずまずの入りを見せていた。

昭和三十四年も後十日あまりに、おしせまった、ある夜、此の劇場で最終回の幕が開いた。七、八人の同じ衣裳を着けたストリップの群舞によるお定まりのプロローグがはじまり、ついで中央の安っぽい背景の前に立って、二台のスポットにくっきりと照らし出さ

れた女は、正直こんな場末のストリッパーにしておくには、もったいない程美しかった。調子はずれな楽器のかなで、幼稚な曲につれて、ゆるやかに腰をくねらせ踊り出した女は、最初のうちこそ、すらりとした長身を、ぴったりと包んだ派手な衣装が、じゃまをして、その凄い程冴えた美貌しか、うかがえなかったが、衣装の背に有る、チャックを割って銀色に光るバタフライだけになると、その裸体は抜けるように白く肌も細やかで、ぐいと、突出するように盛上った胸の隆起も前に出たどの女より、図抜けて、恰好が良かった。そして女が思わせ振りの身振りで腰を回転させながら、銀色のバタフライもその足元に落してしまい、テグスで吊られた、ほんの前だけを隠した小さな布切一つの姿を正面向けて客達に曝した時、客席から一斉にざわめきが起った。

「おい、なんやあれば、書いとんのやろか？」

「いや、あらほんまの入れ墨やで」

女のぬけるように白い下腹に一匹の蛇が丸く、とぐろを巻いていて、鎌首をすうっと下にのぼしていた。短い曲の終りが近づくと、女は舞台中央に一米四方位突出している俗にヘソと呼ばれているエプロンステージのさきまで出て、一きわ烈しく腰をくねらせ始めた。女の蛇はそれにつれて、するすると今にも、とぐろを解いて動き出しそうに思えるのだった。そのあやしきは、女の稀な美しさと、ともに、異常な魅力を発散して、たいていの、エロやグロには驚きそうにもない客達をかたずを呑んで見入らせた。その時、中央中程の席から一人の若い男がふらふらと立ち上り「まさ子」と悲痛な大声をあげて女の方へ近づいた、狭い場内である。

あっと云う間にその男は、かぶりつきへとついた。かすかな笑いさえ浮かべていた女の顔がそれを見とめると、一瞬引きつったようになつて、「あっ」と、かすかな悲鳴をあげたが、丁度、其の時曲が終り暗転となつたので、女は派手に舞台を踏みならして下手の方へ走り去った。男は舞台へ這い上ると、その後を追った。「なんや、なんや、どうしたんや」場内は一瞬ざわめいたが、酔っぱらいが興奮のあまり舞台へあがるといったことは、よく有る事なので、次の曲が始まると、もう誰もそんなことに気を掛けていなかった。

男は女の後を追って楽屋まで踏み込んだが、そこで二、三人の若い男達に攔まれた。

「なんだこの野郎、座長に因ねんつけるのか」

「変な真似しやがると営業妨害でのぼしちまうぞ」今にも袋だたきにされかねない状態だった。

「早く帰らんか」一人が男の肩をどんと突いて、それがきっかけに殴られかけようとした時、一番奥にいた油切った五十男の後に隠れながら、その様子を見ていたさっきの女が、自分がそうされているような声を上げた。

「乱暴しないで、早く帰って貰って。早く」

「まさ子、なに云うのだ。さ、帰えろ。帰えろ」

男の言葉には何かしら呪文のような、ひびきがあった。

「何んとか云ってやれ」

五十男が苦り切った調子で女に云った。

「帰って下さい、絶対帰るなんてことは出来ません。私の体、御覧になりましたでしょう。二度とお目にかかりたくないんです。」

男はがっくりと首を垂れると、すぐそこ出て行った。

その夜、その男は劇場からほど近い旅館で服毒自殺を計って翌朝女中に発見され病院に収容された。呑んだのはプロバリンだったがかなり重体だった。所持していた身分証明書によって男は京都市東山区北白川上ル会社員頼野史郎二十八才と知れた。遺書が二通あった。立合いの警官が所轄警察署殿とある方の封を切った。

四十分後に、まだ開演前のOMミュージックホールへ警官が訪れて、ストリッパー頼野柊子に面会を求めた。

「芸名はなんと云っているか知りませんがね、蛇の入れ墨をした人です」と若い警官は支配人に念を押した。派手な色模様のネグリジエのまま事務所へ現われた女に、若い警官は、まぶしそうな顔をしながら、改めて名を問い確認すると、

「御主人が重体です」と、事情を語り、蒼白になって、よろめく頼野柊子をいたわりながら、ただちに病院に同行する気配を示すと、

女のすぐ後から事務所へ現われ、それぞれと落着かないそぶりで事情を聞いていた五十男が、

「困りますよ、じき開演時間だし、座長に穴をあけられると、どうにもなりませんしねえ。それに、その男は以前はこれの亭主だったか知りませんが、今はなんの関係も無い筈なんですよ」と、しきりに女の同意をうながす口調で抗議したので、警官は一応「あなたは？」と尋ねた。得意気に差し出した男の名刺には、（東京ピカデリーシヨウ太夫元白戸倉三）とあった。警官は太夫元と云うのが判らぬまま、名刺をポケットにおさめると、

「詳しい事情は判りませんが、此の人には頼野史郎つまり今病院にいる此の方の御主人ですな、その人によって一年前に捜査願も出されてありますし、署としても一応出頭を願う事情を聞かないことには」と、あっさり白戸の抗議を打切った。

若い警官は仲々気がきくようであった。

さざえのように口を閉ざしたままの頼野粧子を病院へ伴うと看護婦に耳打ちして小さな一室を空けて貰い、粗末な事務机に向い合うと熱い番茶を貰ってやり、



「御主人のようすを医者に伺がって来ますから」と、内ポケットにしまっていた頼野史郎の遺書を彼女の前に置いて出て行った。一人

になったとたん、石のように固かった頼野梶子の表情が見る見る崩れて、大きく美しい目には堰を切ったように涙が溢れ、読んではならないものを盗み読みするような素早やさで遺書の封を切り、やや乱れてはいるが達筆な文面を喰入るような眼指しで、貪ぼっていた。

梶子、君が私の元を去って以来どれ程手を尽くし探し求めたことか、……恥も外聞も無くあらゆる知人にも事情を話して協力を願っていた甲斐があつて先日当地へ遊びに来た友人からOMミュージックホールで奥さんそっくりの人を見たと言った時の私の嬉しさ。友人は、でもまさかストリッパーにはね……と首をかしげていたが、私はそれが故に梶子である事を確信したのだ。そして梶子も知つての通り今日、自分の眼で君を確認し得た時の私の歓喜は、あのように私が取り乱した事で君にも判って貰えるだろう。一年間の悪夢のような苦しみも此の一瞬に吹っ飛んだのだ。だが其の後の梶子のなつかしい声は私の生命の火に水を掛けた。

「二度とお目にかかりたく無いんです」とは、私は君がどんなに醜い身体になつていようとも、たとえば両手両足を失った人になつていようとも、私が、「さあ、帰ろうよ」と、云えば私の胸に飛び込んで呉れるものと信じ切っていたのだ。あんな入れ墨なんか、なんの妨たげになるものか、二人のかわいいマスコットにしてやれば良い。梶子の身体に有るもので、私の愛せないものが有るだろうか。しかし、そんな考えも一切自分の独り合点と判った時、私がこの先どうして生きてゆけようか、なまじ梶子とめぐりあえぬ方が良かった。苦しくとも希望を持って梶子を探し求めていた時の方か楽しか

った。残された私の道は、梶子の幸せを祈って死ぬより他に無い。梶子がいつまでも幸せでありますように祈りつつ、これでペンを置きます。左様なら。

永遠に私の妻である梶子へ

史郎

涙でくしゃくしゃになった顔を拭おうともせず部屋を出ようとした梶子は、丁度戻って来た若い警官とおつかり合つた。その胸に狂ったように取りついて、

「主人は主人は」と、さっきとは打って変つた梶子に若い警官は驚きながらも、

「御安心なさい、危険な状態は通り越されたそうです」と、病室へ案内してやるのだった。

それから数日後、この何か深い訳の有りそうな二人は、阪急十三駅から京都へ向つていた。

梶子はすっかり堅気な身装りに變つていて、しっとりとした人妻らしい落着きを見せていた。史郎の方もまた顔色はあまり冴えてはいないが、まず回復しているように見えた。もっとも病院では、もう二、三日、退院を延ばすように勧められたのだが、二人の間に特に史郎の方に今日やって来たクリスマススを、どうしても京都で迎えたい理由があった。

ぴたりと寄添つて車外の風景に見入る二人の間に、しばし言葉は交わされなかった。数日の病院生活の裡に話題は尽きたように思えた。と、ぽつんと史郎が、

「クリスマスは僕に一番嫌な日になるかと、思ったよ」そう云つて梶子を見た目は心持うるんでいたようだった。幸い前の席に客はい

なかった。榎子はなにも云わずに首をかしげて、夫の肩にそれを預けた。史郎も同じ、しぐさを返した。榎子の豊かな髪が史郎の頬にゆっくりさわった。——そう丁度、一年になるわ——榎子は胸の裡でつぶやいた。そのまま二人の思いは一年前に遡っていた。

一、影

手早くブラシを掛けた靴に史郎が足を通してスマートな背広姿が土間に立って、榎子はサンダルを引掛けて彼の前に廻る。

「早よ帰って来てね」

「うん」

ぴったりと寄りそって史郎の首に手を廻す榎子は、五尺三寸たっぷりのすらりとした八頭身で、至って長身の史郎にもそうひけは取らずに、夫の首にぶら下ったような、恰好にはならない。

史郎の姿が通りを折れるまで見送って家に入ると、玄関の二畳を足して三間だけの小さい家じゅうが一度にがらんとして、うつろになっちゃったような感じを榎子は結婚して以来約二年にもなるのに毎朝味う。それから後、榎子の定まった仕事と云えば六時きっかりに帰って来る史郎の為に時計が四時を打つのを聞いてから近所の市場へ夕飯の買物に出るだけである。毎日毎日がその繰返しにすぎない単調な暮しの日々なのだが、以前の生活を思えば榎子は幸福すぎた。

でも、あのすさまじい夜も昼も無い頹廢的な生活の裡にあった甘美な思い出に、史郎との正常な生活の枠に入った当時は身を焼くようなもの狂わしさに我が身を持てあました事もあったが、もう此頃はそんなことを忘れようと苦心する必要も無いぐらい影の薄い存在

になっていた。

手早く掃除を済ませて、史郎がずい分面白いから読んでごらんと置いていってくれた一冊の本を日当りの良い奥の間で寝そべりながら読み出した榎子の心は、久し振りにあやしくかき乱されていた。それは探偵小説と云う事になっていたが、事件の描写そのものよりヒロインである二人の美少女の繊りなす同性愛のさまざまな情景が、日記風に念入りに描かれてあって、決して正常ではない此のような愛欲が美しい文章になって夫の話によると多数の人に読まれているらしいのが、榎子にはうらやましかった。

自分の持っているあの体験は同じ異常さにおいても、これとは比較にならぬ深刻さを持っていて、とうていこのような美しい文章にはなりそうも無い。榎子は何度も本を置こう置こうとしながらお昼のパンも忘れて読みふけた。

買物時間にぎりぎりまでその本に引っぱられて、榎子はようやく腰を上げたが、顔から軀まで熱っぽく火照った自分に榎子はてれた。(いやだわ私) 打消そうとしたが、それは容易に治まらない。(いいわ) 榎子は此の火照った身体を今日は一つ、そのまま夫にぶっつけてやろうと決心した。(そうだわへソクリでウイスキーでも買ってうんと酔って貰わなくては——それに、さっとお風呂にも行って来よう) 榎子は、いつもおすおすとした控え目の史郎の愛情を、今日こそ一度変えてみたいものと思った。

予定通りの買物を済ませて急ぎ足に帰る榎子のあとを、さっきから見え隠れにつけている男があった。五十がらみの、がっしりと見るからに頑丈そうな軀に革ジャンパーを着け、派手なハンチングを冠っていて、どう見ても堅気な職業を持つ男では無い。やがて商店

街を外れて人通りが少なくなると、男は大股に榎子に近づき肩を並べた。

「榎子、まさか京都にいたとは思わなかったぜ」

「ええッ！」

男を見止めた榎子は、みるみる顔色を失った。

「まあそう驚くな。お前だってまさか俺が一生放り込まれているとは思っていなかったろう」

こおりついたように動けなくなった、榎子を促した男は、買物籠に目をやって、

「お前がそんな物を下げているのを見ると、どうやら世帯を持っているらしいな。いつからだ？ うまくいっているのか」

なつかしように言葉を交した男は一寸不思議そうに複雑な表情を示した。

次の四辻を右に折れると、榎子の家だった。榎子はどうしても倉三に家を知られなくなかった。倉三にいつの間にか腕を取られていたが強引に立ち止まり必死の眼ざしで、

「ねえ、処を知らなかったのは許して下さい。頼みますから。ここで別れて下さい。私を忘れて下さい。会わなかったと思って」と、頼んだが榎子の口調は弱々しかった。倉三は、ふんとそれを鼻であしらうと、

「どうやら俺の事なんぞ全然、頭に無かったとみえるな。まあいいや。だがな、俺も京都に暫らく居る事になっている。明日じゅうに一度ここへ尋ねて来い。別れるとか、忘れてくれとかは、それからの事だ」

倉三は手帳に居所らしいものを走り書きして引き裂き榎子にそれ

を握らすと案外あっさり背を見せた。

幸い近所の人に見附からなかったようだが、あの僅かな道程をどうして家に帰ったか覚えぬ程榎子は惑乱していた。

——さあ、一体どうすればいいだろうか。通り魔のように忽然と現われた倉三を、よほどうまく捌かぬ限り、折角擲んだ幸せを一切めっちゃめっちゃにされそうなのだ。しかし私のどのような感情をも敏感に嗅ぎとる夫に覚られぬようにして、あの倉三を捌く智慧が私のどこにあるだろうか。——榎子の思索は、とりとめもなく混乱していくばかりだった。

榎子と倉三との複雑極まる、つながりは遠く十年前から始まったのだ。

三、影とのつながり

榎子の故郷は九州の博多であった。後一月で終戦だった年の七月の大空襲でかなり手広く土建業を営んでいた榎子の家も壊しかった。両親も跡かたなく消えてしまった。当時小学校三年だった榎子だけが学校へ行っていて無事であった為に助かって全くの一人ぼっちになった。

二年後、博多駅で大勢の戦災孤児の群にまじっていた榎子を拾いあげたのが倉三であった。彼は元々興行師の出であったが終戦後は雨後の筍のように輩出したストリップ劇団の小さな一つを持って旅廻りをしていた。

博多柳町で半月程の興行を打上げて長崎へ向う途中であった。浮浪者や戦災児の群った待合室で不用意に倉三が喰い出した大きい握り飯に忽ち蠅のようにたかって来た彼らを、彼は手荒く追い払って

いたが、その中の一人だった榎子に、ふと優しい言葉を掛けたのである。

「ほう此の子は珍らしく、かわいい顔をしてるな。さああげよう」



痩せ細った垢だらけの手に、めったに口にした事もない大きい純綿の握り飯をのせて貰った榎子は、

「どうだい、小父さんの子にならんか」と云われて、こっくりと、うなずいたのだった。

永くて半月、大かたは三日、五日と云ったあわただしい旅の連続であったが、ろくに物も喰えない駅での生活とくらべて天地雲泥の差があった。初めの裡はいじけ切っていて劇団の誰とも口も利かなかったが、馴れるに従って榎子は日に日に持つて生れた快活な性質を取り戻し劇団の誰からも、かわいがられながら、美しく成長していった。倉三は勿論かわいがってくれたのだが、榎子には一つだけ不満があった。

それは死んだ両親のように夜になっても同じ部屋で寝てくれない事だった。

一つの劇場へ乗り込むと、皆舞台や楽屋で寝るのだが倉三だけは別に宿を取った。

それは親方なのだからと榎子にも判るのだが、初日さえ開けてしまえば全く暇な倉三は、昼間は榎子がく

たびれる程相手になってくれるのに、舞台がハネ宿へ帰る時になると全然、見向きもしてくれずに、踊り子の中の誰かを連れて、いそいそと帰って行くのだった。

同じ踊り子が数日続く事も有るかと思うと毎夜変る事もあった。そして不思議なことに、その踊り子は翌日から一日か二日必らず舞台を休んだ。それを又誰かが別に心配してやるようすがないのだ。そう云った榎子の幼い不満と疑問は榎子が十六になった春のある夜、身を持って一挙に解決させられた。

大分県中津市に有る朝日座での初日がハネた夜、榎子は初めて倉三に声を掛けられた。連れて行かれたのが洋式のホテルだったので榎子はよけいに喜んだ。もっとも其の頃は倉三が踊り子を連れ帰る意味は臆ろげながら察してはいたのだけれど、倉三が初めて其の一夜を自分の為にさいてくれたのだと思っていた。

物珍らしさに部屋に入っても、きよろきよろしている榎子に倉三は食事をさせながら、酒を呑んだ。

「美しいお部屋ね、お父さん」

「うん」倉三は大きくうなずいて見せた。

「こんなお部屋で寝ると明日から楽屋で寝るのが嫌になりそうよ」

榎子は倉三にあまえたつもりだったが、それは倉三に、いいきっかけを与えた。

「もう楽屋で寝んでもいい」

「ええっ、それ本当？」

榎子は喜んだが、すぐ気を利かせて、

「そうだったら嬉しいけれど、一人じゃつまらないし、第一もったいないわ」

榎子は大きな誤解をしていた。

「何がもったいない。榎子が泊っても部屋代は一緒だよ。」

榎子は父が自分の部屋で寝てもよいと云っているのに初めて気がついた。「でも、それでは悪いわ」と榎子は口ごもった。

「どうして悪いんだい」

榎子は思い切って云った。

「どうしてって、お父さんの邪魔をしては悪いに決まっているわ」そう云うなり赤くなつた。

倉三は満足そうな笑いを浮かべてから、まるで自分に云い聞かすように

「そうか榎子はよく気がつくな、もう大人だな」と云うと、コップを置いて丸いテーブルを廻って榎子の横に立った。

そして敏感に感じとった父の変化に「おや」と云った表情で倉三を見上げる榎子に、かがみこんで、

「今夜から榎子しか呼ばない。榎子が俺の女になるんだよ」

ひとことずつゆっくりと区切って十六になったばかりの榎子の体内にしみ込みますように云う倉三の言葉は、心の底で浮浪児から救って貰ったのだとの恩儀を日頃抱いていた榎子にとって、いっさいの拒否を許さない力を持っていた。

いつの間にか脇へ手を廻わされて、茶色の薄いセーターの上から、倉三の頑丈な掌のひらで掴まれていた。榎子は倉三の魔法に掛つたようになった。

そのまま抱きあげられて、生れて始めての広いベッドにそっと降された時、榎子はまだ喰べ掛けのチョコレートを握っていた。

「喰べてしまいなさい」と倉三は云ったが、空いた方の手で顔を、

おおいながら榎子は、かぶりを振った。

榎子はこれから自分の身体がどう云うふうに使われるのかは知っているつもりだった。すれっからした踊り子たちの話や、彼らがよく読んでいた毒々しい絵の表紙がついた雑誌など、それを知る材料はいくらでもあった。だから、やっと此頃つけ始めたばかりのブラジャーを剥がされると、当然、次に来る筈の倉三を予期していっそう身体を固くしながらも観念したのだった。

ところがブラジャーを剥がれた時にうつぶせにされたなりの背なかへ、いきなり両手をぐいと、ねじ上げられて、細い縄らしいものが巻きつけられるのを知ると、榎子は急に父が他の人と変わったのではないかと驚いた。ここで初めて魔法が解けて正気に還ったようになった榎子は、「何をするの、お父さん」と首をねじって父を確かめた。その倉三は榎子の始めて見る顔になっていた。うろたえた榎子の顔は手首を縛りおえた倉三の両手に捕えられて、そのままねじるように上半身へ引き起こされた時、榎子は（此の人は狂っている）と、背筋に冷いものを走らせた。それでも本能的に「お父さん」と哀願しようとした榎子のかわい口は倉三のハンカチが一杯押し込まれて息が詰まりそうになった。あまりのショックに、ただ震えるだけになった榎子の白い肌に倉三の操る縄はするすると巻きついていった。高手小手に縛りあげ、まだ熟し切らない乳房の上下にも手加減せずに縄を掛けた倉三は、そっと割れ物でも扱うようにテーブルの上に置いた。

今はぼろぼろと大粒の涙を流すだけで、じっと縛られた姿を曝している榎子を、ゆっくりと楽しみながら倉三は酒を呑んだ。自分の目に狂いのなかった事が倉三は嬉しかった。むしろ予想以上の拾い

ものだったと有頂天になりそうな自分を持てあましていた。

すれっからした女ばかりを相手にして来た倉三にとって榎子は新鮮すぎた。今までの女で縛られただけで泣くような女は一人もいなかった。驚きながらも好奇心に目を輝かすような女が多かった。

一年後、倉三の巧妙な縄と鞭にすっかり馴らされた榎子は倉三との夜を待つ女になっていた。それから二年、榎子は益々美しくなった。しかし、その頃から、あれほど全盛だったストリップも、ようやくあきらまれて倉三の懐ころも淋しい日が続いた。そして四国の松山で興行を打った時、ひどい不入りに見舞われ劇場側が、ギャラを払いしぶった事から喧嘩となって、倉三はあっさり支配人を刺殺した。其の場で彼が逮捕されると、劇団はばらばらになり、榎子は又



一人ぼっちになった。まだ十九になったばかりで身寄りも無くそれでいて人目をひく美貌を持った榎子の行く先と云えば、ないようについて、はっきりと決まっていた。

松山を振り出しに転々と流れた榎子は、あらゆる水商売の垢に染まっていた。幸か不幸か美貌であったが故に誘惑も多かったが、さして身体を売らねば生きて行けない事の無いのが、せめてもの慰めと云った生活が続いた。倉三の事を思わぬでも無かったが、月に何度と通信の制限を受けている彼と手紙のやり取りをするのには、榎子の居所が余りにも変り過ぎた。そして二年後、榎子は、京都のあざみと云うバーで史郎を知り激しい恋愛に堕ちた。

あくまで結婚しようとする誠実な史郎の態度と、幼い時に両親を失い全く一人きりと云う彼の身の上は、倉三との暗い過去にこだわる榎子の心を大きく揺すぶった。水商売の女には不似合な程素直な性質と、少しもすれたことの無い榎子を見込んだマダムに励まされ、(君の過去なんかは不要なんだ。今の君が欲しいんだ)とはっきり云ってくれた史郎を信じて、ようやく榎子は幸福を掴んだかに思えたのだが――。

四、ロープへのいざない

「私のヘソクリで買うとききましたんよ」

まだ半端な京都弁で喜ばせてくれた。ウイスキーの角瓶を自分に吞ますのは惜しいように、ごくごくとあける榎子の白い咽喉を眺めながら史郎は驚いていた。

「今日はえらい呑むんやな、大丈夫かいな」

「大丈夫ですて、強いんよ、私」



いつのまにか横座りになって、桜色に染めた顔の、くっきりとルージュで描かれた幾分大きな口にせっせとコップを運ぶ榎子には、結婚以来、史郎の初めて見る、すうっと引き込まれそうな魅力があった。

史郎は思った、榎子はその顔のように身体までも桜色に染めているのではないだろうか、彼はそれを確かめたくなった。と、それにキッカケを渡してくれるように榎子が誘いを掛けて来た。

「ねえー呑み競べしません？」

「そうだ。今夜は一つ思い切り酔わしてやれ——」

「うん、やろうか、さあ——」

史郎は、せっせと榎子についてやった。

ウイスキーの強烈なアルコールにかきたてられた二人は、次第に酔を深めていった。

「なあ榎子」

さすがに片手で顔は被っているが、じっと仰臥したまま史郎の観賞を許している榎子の豊かな胸が息づいている。

榎子の撓やかな腕がのびて史郎の首に巻きついた。起こしてくれといっているようであった。史郎は榎子を抱き上げて自分の膝の上に置いた。榎子は親に抱かれた赤ん坊のような恰好になった。酔いが二人に大胆な会話をさせた。

「私の云う事も諾いてくださるなら」

「諾いたげるとも。そうしたら榎子も……」

「どんな事云っても諾いたると約束して」

「勿論や。さあ、どうするのんや……」

「だったら、私を縛って……」

「えっ……」

史郎は耳を疑った。

史郎の首で輪にしていた両手を解いて榎子は崩れるように俯伏した。胴の一部だけが史郎の膝に載っている。そこへ榎子の両手が組合わされた。

「早く、私を縛ってくれるのよ……」

ようやく有りあわせの綿ロープを手にした史郎は榎子に指示されて、とまどいながらも、ロープを掛けていった。

「これで、ええのか」

最後の縄じりを榎子の腹に喰入るばかりに締めおえた史郎の声はかすれていた。思いどおりに縛られて、史郎の前に転がった榎子の目は濡れたように潤んでいた。

「あきれはりました？」

「……」

史郎は首だけ振って否定した。

榎子の異ような望みに、ちよっと言葉がなかった。

いつもとは反対に榎子の方が積極的だった。

「さあ、あなたの番よ」

榎子の唇が誘った。

白いロープが、きっちり巻きついて、余けいにくびれた細い胴が、それに存在を誇示するようにぐっと曲線を描いて続く逞ましいヒップが史郎の目前にあって、ぴったりと合わさった肉づきのよい太股、すんなりと伸びた恰好の良い脚がつややかな肌合を見せて、ピンとそり反った足指は蚕のような白さで見事だった。

榎子の髪はわざと染めたような茶褐色で、彼女自身はそれを嫌っ

ているらしいが、それは如何にも色白の肌にぴったりで、その个性的なのが史郎は好きだった。

ふわふわと柔らかさうでいて、手に握りきれないくらい豊富な髪は無どうさに梳られたままのようで、それでいて彼女の顔によくマッチしていた。

五、怪 写 真

深酔いすれば全く記憶を失う事が有るという事を幸い二人は知っていた。翌朝は二人とも、そのふりをしていた。互いに違った意味で昨夜の想いを楽しんだり味ったりしていながら、とぼけあっていた。うわべだけは、いつもの通りな温和しい史郎と、控えめな榎子になって、互いに手を振りあって史郎は出勤していった。史郎の姿が見えなくなると、今迄押さえに押えていた期待と不安が一度に榎子の軀中を駆け廻った。

——どうだろうか、夫は私を縛る事に少しでも興味を持ってくれたらどうか。今夜にはもうあっさり忘れていたのでは無いだろうか。出来れば忘れないで欲しい。縄を手にして欲しい。そうでないと今度、倉三が現われた時が恐ろしい。倉三そのものに私の牽かれるものはなにもない。しかし倉三の使う縄は私にとって魔法のような力を持っている。その魔法に打ち勝つ為に夫の縄が必要なのだ。正常な夫に悪魔の美酒を味わせようとする私は、悪い女だ。しかし、私はどうあっても夫とは別れたくない。今の幸せを逃がしたくないのだ。倉三への具体的な対策はまだ無いけれども、夫が私の望みどおりに夜を演出してくれるようになりさえすれば、倉三の縄は私にとって苦痛以外のなものでもなくなる筈だ。そうすれば倉三はど

うにか捌けるのでは無いだろうか……。

すべては今夜の夫に懸っている。だが、私自身が昨夜のような大胆になれるだろうか……。

だが榎子が期待どおりの夜を過すのには、元々ひよいい史郎の体質に無理があった。

自分も酔わなければならなかったし、彼にもどうしても過ごさす必要のあるウイスキーを、さりげないようすで随分、手を尽して榎子は奨め、なんとかして昨夜のような雰囲気を持ち込もうとしたが、史郎の軀はそこまでウイスキーを受けつけなかった。一、二杯口にただけで「さあ御飯にして」とグラスを置いてしまうのだった。飯を喰っている夫を前にして榎子が一人で呑む訳にはいかなかった。

史郎は雑誌を少し読んで枕元のスタンドをひねると、寝入ってしまった。

榎子は失望に打ちのめされた。砂をかむような想いが重く、全身によどんだ。それから昼は倉三の影に怯え、夜は又失望のみの暗い日を榎子は二日、過ごした。そしてその翌日、ようやく夕食の支度を済ませた榎子に、(大学時代の友達が尋ねて来たから少しつきあって帰るよ)と史郎から近所の煙草屋へ取次電話が有った。そして九時すぎに帰って来た史郎は、かすかに酔っていた。こういう夜は必らずにか土産を買って来たりして上気嫌な筈なのに、今夜の史郎は「お帰り」と迎えに出た榎子が、すぐに「おやっ」と気づくほど、こわばった顔をしていた。

榎子の胸に何かしら、どきり、と響く悪い予感があった。ぶっすりと黙ったまま食卓に向い合うと、漠然とした不安に、お

ずおずとしながら榎子が、ついで出すウイスキーを投げ込むよう二三杯、流し込んだ史郎は、ポケットから一枚の写真を取り出した。「これは榎子と違うか?……」

その写真を見た榎子の顔から、すうーっと血の気が引いて抜けるように白い顔が蒼白になった。そこには逆さにされた大きい机の脚に手足を縛られ四つばいになった全裸の女が写っていた。歯を喰いしばり、顔をぐっとあげて咽喉までのぞかせていて、その側に遅ましい軀をした五十年輩の男が鞭を振り上げている。

憶えがあった。倉三に数多く写された写真の中の一枚である。倉三はさんく榎子を鞭打って榎子の表情の氣に入った時、自動シャッターを使って、よくその中へ入った。

「どうして、これを?」

「榎子……」

史郎は食卓を飛び越して烈しく榎子の肩を抱いた。

「昔の写真やな。僕と一緒にになる前の写真やろ。そうやな」

史郎にはそれだけが気掛りのようであった。うなずきながら自分の胸にぐいぐい顔を押しつけて声をあげて泣く榎子を慰さめるように史郎は云った。

「こんなもの、お前が、このあいだあんな事、縛ってくれなんて云わなかったら、榎子って、氣がつかなんだかも知れんのや……」

榎子は一そう激しく身をもんだ。

「私が嫌いになりましたでしょう……」

「嫌になんかなるもんか、昔の事は僕等に関係ない。それより心配なんや、こんな写真が僕の手に入った事が。榎子、なにか、あったんと違うか?」

史郎の少しも変らぬ愛情の籠った言葉は榎子を絶望から蘇えらせたが、だからと云って倉三の事は、おいそれと云い出しかねて、思わず榎子は首を振って否定していた。

「そうやったら、よいんやけど……」

半信半疑の史郎は、うかぬ顔をして、

今になって考えると「あの男は、どうもお前も僕も知っとるように思えるのや」と、重い口調で話し出した。

——史郎は今日、会社の退けるのを待っていてくれた友達と、社から近い行きつけのスタンドバーへいった。七、八人もカウンター止り木に腰掛けると、もう満員になる小さな店だが、少しも流行っていないくて、いつ行っても空いているのが彼は好きだった。今日も店は空いていた。

暫らく呑んで史郎らがほろっとした気分になった頃、一組の客が帰ると、客は史郎ら二人と殆んど同時に入って来た若い男との三人きりになった。その男はいちげんの客らしくマダムの愛想話にものらず史郎の横で黙ったままウイスキーをチビリチビリなめていたのだが、そうなるのを待っていたように、しきりに話をそれも史郎に話し掛けて来たのである。久し振りに会って話をはずましている二人にとって邪魔だったが、こういう場所ではよく有る事なので、いい加減にあしらっていると、今度は写真を買わないかと持ち掛けて来た。それで、よく話に聞くY写真売りかなと思った。二人に話をさせない程しつこく買えと迫まるので、うるさくなった史郎が、「いくらなんや」と聞くと、三枚一組で五百円といった。「そんな金があれば、それだけ余分に呑むよ」と友達と笑い合うと、男は段々と値を下げて、とうとう百円でいいと云った。

しびれを切らして史郎が百円札を投げ出すと、男は六百円の勘定を千円札で払い、

「只でも良かったんですがね」と冗談のようにいうと、そそくさと出て行った。

「百円の商売するのに六百円も呑まはって。それ買うてあげはらんとお金持ったはらへんのかと思うてましたわ」マダムが呆れたように云った。

満更興味が無くもないので渡された封筒から写真を出して見た。

「どれどれ」と友達が三枚の写真をカウンターに広げた。どれも全裸の女の縛られたのばかりであった。

「なんや安いと思うた」正真のY写真を期待していた友達は一寸落胆した声をあげたが、

「しかし此の女は美人やな」と榎子の分を押えたのである。

幸い友達に榎子と一、二度しか会っていなかったのと、大分酔っていたので史郎は助かった。それでも大慌てに慌てて写真をひったくり急用を思い出したと友達を振り切って立ち上った。

「どうも只でも良かったんやて云いよったんが、冗談とも思えんや。僕にどうしても、これを掴まそうとしよった見たいな、僕が何度断っても友達には一度も買えて云いよらなんだしな。それにあの男、会社出た時からつけて来たようにも思えるんや」

語りを了えた史郎の顔は、その言葉つきに似ずいよいよ暗かったが榎子はもう泣きやみ、史郎の胸から顔を離していた。

——尋ねて来ぬ自分に業をにやした倉三が何かの手段で夫の勤め先を知り、若い男を使つてのいやがらせに違いない——如何にも彼らしいインケンなやりかただと怒が胸を衝きあげてきた。

「心配かけて済みません」

「……」

無言の史郎は一切の事情を知りたがっていた。

——打ち明けるべきだと、榎子は決心した。しかしそれには大変な努力がいった。

「私を棄てないと約束して下さい？」

「……」無言ではあったが、しっかりと抱いてくれた史郎の手に確かな返答を受取って榎子は一切を話した。

ただ彼と会った時は振り切って逃げたとだけいい、居所を書いた紙片を貰った事と、それを頼りに、明日、倉三を尋ねようとする決心は打明けなかった。

それをいえば引き止められるか、でなければ一緒に行つて其の人に会おうと云い出すのに定まっていた。こちらに何んの非がないにしても、僅かな金の事であつさり人を殺した事もある倉三に史郎は合わせられなかった。聞きおえた史郎は、やや愁眉を聞いたようであった。

「かわいそうに苦勞をしたんやなあ！ それでも其の人は恩人でも有る訳や」と倉三にまで同情めいたことを云つてから、写真を粉々に引き裂いた。

「其の人は、こんな写真で僕が君を離すとも思っているんやろか」榎子はこの時程、痛切に史郎の愛情を感じた事はなかった。胸が詰まり、それに応える言葉がみつからなかった。

史郎は、なおも榎子を励ました。

——二人は、ちゃんと正式に結婚した夫婦なのだ。嫌がらせ以上のものが何も出来る筈はない。結局は二人の心さえしっかり結びつ

いてさえおれば、なんの心配も無いのだ——と云い切った。

「まさか柁子を映画の筋書みたいに誘拐する事も出来る筈がないしな」

その口調にも顔にも、もう暗い影は見られなかった。抱きしめていた柁子を、そっと離すと史郎は座りなおした。

「さあ——柁子、お腹も減ったけど厄払いに今晚はうんと呑もうや」
酔ってくるにつけ二人の本音が出て来た。割り切ったようであり、やはり互いに心配なのだ。史郎のそれは倉三よりも柁子の方であり、柁子のそれは史郎の愛情には、もうなんの忌憂も抱いてはいなかったが、思い切った事をやりかねない倉三の方であった。

だんだんと酔ってくる自分を意識しながら、史郎は柁子に愛の交わぬ事をなんども誓わせた。

「約束してくれ柁子、どこへも行かないで」

「私を信じて……絶体に。どこへ私が行くと云うの」

柁子は真心をこめてそれに応えながら、その為にはどうあっても倉三に会わねばならないと決心を固めた。

十二月の夜気は二人をひんやりと包んでいたが心の中は酒の酔ばかりでなく、ふつつつと燃えたぎっていた。目の前に真白い足を投げだして、横坐りになった柁子の身体があった。

美しい身体と優しい気立とを持ちながら、なんという複雑な過去を経験していることだろう。史郎は柁子の全身に目をやりながら、今更のように驚くのだった。

過去のある身体とは柁子も決して否定していなかったが、それにしても、そんなに早くから一人の男に独占され、縛るとか鞭打つか自分の窺い知る事もなかったアブノーマルな愛欲を味った事がある

ったとは……しかも、その上、此の肌は、その異様な愛欲におぼれていたのだ。いや、とり憑かれていた風である。

結婚して以来、自分一人のものだと思っていた此の美しい肌が嘗ては他の男の手によって縛られ鞭打たれて写真まで撮られていたのだ。

女体の持つ神秘と不可解さに史郎は、今初めて触れる思いであった。

柁子がいとしければ、それだけ胸もつぶるようなショックであった。これが嫉妬というのであるのか。押えようとすればするだけ、頭ががっかつと燃えてきた。史郎は柁子をつき放して立ち上った。その足元に粉々にされた、あの写真の残骸があった。

あの、まだ固そうな身体を、犬のように四つ這いにされて無惨に縛られた柁子が、生々しく彼の眼前に複製された。

彼はそれを今、目の前にしおらしく坐っている豊かに成熟した柁子と取替えて見た。胸がしまるような、訳のわからぬ刺激があった。

——柁子は、ああされるのを悦んでいたのだ——

突然、彼が立ち上ったので、そっと薄目を開けて上目づかいにうすを伺おうとした柁子のそれも、史郎の燃えるような眼差しとががちあった。

史郎は、それにかぶせるように云った。

「柁子は、僕のものやな……」

なにを今更と、柁子はうなずいた。

「そやから、柁子の軀は僕の好きなようにしても、いいわけやな……」

六、悦虐の花園

うわ言のように云った彼は、坐り直して残り少ないウイスキーをコップにつき一息にあふると、柩子を抱きあげ奥の間に運んだ。そ



こに用意してある夜具を足でまくり隅に押しやると、応接用に使っている一閑張りの大きな机を曳き出して裏返しにすると柩子をその上に降した。

そして「さあー」と促がす史郎に柩子は、「あっ……」と胸を躍らせたが、まだ確かに、それとは察しかねて、「どうするの……?」と、とぼけた。

「あの写真のように、してやるんや」そう史郎は応え、と、筆筒から柩子の細引類を取り出し始めた。望んでいた筈の事なのに、こう史郎に出られると、柩子はやはり身体を固くした。

命じられて、ようやく机の端に立ったものの、しゃちこ張る柩子の身体を彼は強引に折り曲げ両手から先にしっかりと縛りつけると、柩子の両股を容赦なく開かせて、写真通りの恰好に仕上げてしまった。

——美しい生きた置物が出来上った——
——なんとしても、この美しい生きた置物をいじめぬかなければ、すまない気がしてきた。両腕が机の足に固定さ

れて、伸びきった恰好のよい脇腹が目の前にあった。
脇腹へ両手をやって思いきり擦った。ほんのりと浮んだ肋骨をぐ

りぐりと指先でこすった。原因のわからぬ怒りが、そんな動作にも拍車をかけられて湧いてきた。噛みしめた口の端から唇が切れて血が唾液に混って流れた。

彼は柢子をこんな状態にして見て、それには予想外の悦びや楽しみがあることを発見した。そして、これにはまだまだ隠され貴重なものがあるように思えるのだった。

柢子は死ぬ程擦ぐったがって、奇声を発して、全身をねじ曲げてのたうち回った。史郎の指先を逃れようと身をよじった。その度に史郎の指先に力が加った。

「この綺麗な身体が他の男のおもちゃになっていたのだ」

そう思うことで史郎の異常な仕草に対する背徳感は失われ、快い嗜虐の陶酔感が湧いてきた。

史郎はまず、かがむと、それだけではどうやら自由を許されている柢子の額を引きあげて、つんとよく通った鼻をひねりあげた。

犬が主人を迎ぐような恰好で白い咽喉を勢一杯伸ばして柢子は身体の奥で永い間、無理矢理、眠らせていたマゾヒズムの血を目醒めさせ、柢子の姿を意識している史郎はようやく嗜虐への道に第一歩を踏み込んだようであった。

「さあ、どうしてやろう」と史郎は口に出した。

「写真のようにと云わはったでしょう——早く打って……」

柢子の意志に左右されては、自分の悦びは半減する。今の史郎はそれを知っていた。

彼は柢子の要求を黙殺して、そのふっくらと白い背中に、またがり足を浮かせた。

「うゝゝゝッ」

白い馬はかすかに呻きをあげた。手足の細引きを解いて部屋中を乗り廻してやっても良いのだが……。

ふと天井を仰いだ史郎はある構図を思いついた。

——そうだ、ちゃんと準備が出来る迄——黙って彼は馬から降りると大きな風呂敷を取り出して柢子の顔をすっぽりと包んでしまった。息苦しさ、不安に、「いやゝゝ」と柢子が首を振っても、それが落ちないのを見定めた彼は、縁側の戸を開けて腹這になると、床下から太いロープの通った木製の滑車を取り出した。いつか家の修理を頼んだ時、取人が忘れていったものである。

机の脚を押して部屋を中心へやった。一閑張りの机は畳の上をよく滑べって柢子は微かに揺れながら移動した。

夏の大掃除の時、屋根裏を掃除するのに天井板を二枚ばかり剝がして、そのまま釘を打っていないのを彼は覚えていた。

「うっ……」と柢子を呻かせて背の上にあがった史郎は、ばらばらとほこりの舞い降りるのも、かまわずに板を左右に分けて、その上に現われた太い梁に滑車を取付けロープを下へたらしめた。からからと鳴る滑車の音が史郎の耳に小気味よく響いた。

これには、かなりの時間と労力が要って、史郎の台にされている柢子は、「うんうん」と絶え間なく呻き声をあげて、みるみる全身に脂汗をふき出し、史郎の足の裏にもそれを、べっとりと伝えた。

流行おくれになって、使用しなくなった巾の広い頑丈なバンドが二本素ばらしい役目を果たす事になった。柢子の脇と腰とにしっかりしめつけて、それに丈夫な細引を用心して二重に通し輪にする、と、ぴんと張って中心を取り、ロープを結びつけた。

それで準備は終わったのだが風呂敷の目隠しを取ってやるのがなん

だか惜しくなった彼は、そのままロープを牽いた。

バンドに通した細引が、ぴいんと三角形に張ると、榎子は風呂敷のなかから「あゝっ」と、苦悶とも感謝ともつかぬ叫びをあげながら、徐々に浮上っていった。

床の間の柱の瘤になったところへロープを固定すると史郎は榎子に近づいた。ゆれている榎子は妙な恰好だった。ひもで吊られた磁石が机を吸い着けたようであった。彼の眼の上一尺ばかりに風呂敷を被った榎子の顔がある。

自分に思うさま、いじめなぶられ抜かれた後、まだゆらゆらと揺れている榎子を眺めながら史郎は自分に全てを許した女体——他のそれには罪悪か支障を伴わずには遂行する事の出来ない。どのような加虐をも誰に憚かる事もなく加える事の出来る妻と云うものの貴重さと、人一倍美しいそれを持っている自分の幸せを今改めてしみじみと味っていた。すると、今目前で吊り下っている榎子が可哀そうな気もするが、榎子はこのようにされるのを好んでいた時があった筈なのだと彼は強いてそんな気持を押えた。

——一日中、夜になるのを、縛られるのを、鞭で打たれるのを、そればかり考えてんの。そのくせ、いざ裸にされて縛られかけると逃がれようとするのよ。打たれる時は痛くて痛くていくら我まんしようとしても、ひいひい声をあげるのよ。それなのに——と、そこまで云って口をつぐんだ榎子を思い出していた。

その後には、なにか口では云えない悦びに、似たものがあるのに違いない。もっといじめてやってもよいのだ。史郎は本箱からごっそり中味を抜き出すと榎子が縛られている机に積み重ねていった。机は忽ち重量を増して、榎子の手足を烈しく下へ引っ張って苦痛を

加えて行つた。

まだ風呂敷で包まれたなりの顔を盛んに振って、「ひいっひいっ」と悲鳴をあげ、その苦痛を示めしていたのが、手足の先から胡粉を掃くように白くなって血の気が引いていった。

史郎が手許に残った最後の本を積み終った時、まるでそれが合図であったように柱につなぎ止めてあった方のロープが、その瘤を通り越して榎子はいっさんに落下した。本や雑誌がどっと畳に乱れた。

——さあ、今夜の仕上げをしてやるのだ——

史郎はなにものかに命令されているようであった。素早く振りかぶった細いベルトを熟練した調教師のような正確さで、それをするのに恰好の位置に変わった榎子目がけて鋭く打ち下ろしていた。

「ひいっ、ひいっ」

榎子は、ようやく人間にかえったような悲鳴をあげた。

その悲鳴にせかれるように史郎はバンドを振った。しなやかなバンドは、びゅっと鳴り、よくしなって榎子の背から腹に胸に烈しく巻き着いて、そのまま張りついてしまいうさうであった。その手応えに、苦痛に、二人はいっしか、そういった不思議な遊びに没入していった。

榎子は遠く忘れ、そして秘めていた故郷へ返るようなものだった。史郎はその榎子に連れ立ち導かれて、その故郷のあまりの素晴らしさに歓喜し忘我して行く自分を止めようがなかった。

——そこは、この悦びを知り、分け合う者のみに、とびらを開いてくれ、それを知らぬ何人の立入も、憶測をも許さぬ、悦虐の花が瞭然と咲き誇る花園にも似た夢の桃源郷であった。打ち、打たれ転がし、転がされて、その桃源郷に遊ぶ二人に、無情な夜明が近づきつつあった。

(次号へ続く)